

14.5-563



1200600798490

翻譯文

ソ聯極東及外蒙調查資料 第四十一編

西部蒙古及烏梁海地方の自然地理概觀

下卷



13.1.28

滿鐵產業部



始



書 A
201

書 A
201

翻譯文
ソ聯極東及外蒙調查資料
第四十一編

西部蒙古及烏梁海地方の自然地理概観
下卷

滿鐵產業部

度量衡換算表

材積 (木材)	容積	重量	面積	距離	區分
一立方 米	二フ ツ セル ル 二ウ ・ ド ロ	二フ ン ト 度 二 ツ ント ネ ル	二 ヘ ク タ ー ル 二 デ シ ヤ チ ン	一 釐 二 サ ー デ エ ン 里	ソ 聯 單 位
	三石 ・ 五 九 三 七 二尺 ・ 九 九 四 八	二六・六〇〇 ・ 四 三 六 八 一 〇 一 〇 九 二	一町 ・ 〇 〇 八 三 一 町 ・ 〇 一 六	七尺 ・ 〇 二 七 一 六 〇 里 七 尺 ・ 〇 四 〇 九	日 本 尺 貫 法
一立 方 米	三立 ・ 五 二 九 九 二 二	一六・三八一 ・ 一 〇 〇 九 五	一〇、〇〇〇平方 米 一〇、九二五平方 米	一 米 ・ 〇 六 六 八 二 米 ・ 一 三 三 六	「メ ー ト ル」 法



I種
W



1200600798490

目次	一
第一章 緒言	一
第二章 自然地理概観	一
第三章 地形	一
第四章 気候	一
第五章 水文	一
第六章 植生	一
第七章 動物	一
第八章 人口	一
第九章 産業	一
第十章 交通	一
第十一章 結論	一
索引	一

西部蒙古及烏梁海地方の自然地理概観 下巻

目次

第八章 阿爾泰諾爾山脈南西斜面の河川……………一

 第一節 チョルヌイ・イルトゥイシ河……………一

 第二節 チョルヌイ・イルトゥイシ河の支流……………一三

 第三節 烏倫古河……………四六

第九章 哈喇烏蘇湖流域の河川……………六二

 第一節 科布多河……………六二

 第二節 プヤントゥ河……………一〇九

 第三節 ツェンキル・ゴル及びチルガラントゥ河並に哈喇烏蘇湖……………一一六

第十章 杭愛高原を下る河川並に西蒙古中央部の小流域……………一二四

 第一節 杭愛高原を下る河川と湖沼……………一二四

 第二節 西部蒙古中央部の小流域……………一八二

第十一章 過去及現代に於ける西部蒙古の氣候……………一八七

 第一節 西部蒙古の過去に於ける氣候と氷河及萬年雪……………二八七

 第二節 西部蒙古に於ける現代の氣候……………二一一

第十二章 植物被覆……………二三六

 第一節 概 説……………二三六

 第二節 阿爾泰山系及支脈の植物被覆……………二四〇

 第三節 薩彥山系南斜面及びその接續地の植物被覆……………二六九

 第四節 杭愛高原、唐努鄂拉及びツァガン・シボト山脈の植物被覆……………二九五

 第五節 沙漠地帯の植物被覆……………三〇七

第十三章 西部蒙古の動物界……………三二〇

 第一節 獸 類……………三二〇

 第二節 鳥 類……………三八四

 第三節 漁 類……………三九五

第十四章 西部蒙古に於ける鑛物資源……………四〇三

西部蒙古及烏梁海地方の自然地理概観 下卷

第八章 阿爾泰諾爾山脈南西斜面の河川

第一節 チョルヌイ・イルトウイシ河

東經九〇度三〇分までの南部阿爾泰アルタイの南斜面及び、阿爾泰諾爾山脈南西斜面を擁護せる、延長二六〇露里に及ぶ廣汎な山岳地帯に降下する雨雪は、その上流地方をムス・ダダ雲嶺以南の高いキイト・イン・アルチャ盆地に置くところのチョルヌイ・イルトウイシ河（二名喀喇伊爾齊斯河）に注ぐ。

而して、キトウイキン・アルチャム盆地は主脈より分派せる、絶対高度二〇、八〇〇——一一、一五〇呎の、餘り積雪の多くない尖峰を載いて居る、二つの支脈によつて構成され、海拔七、五〇〇呎（註二）の平均高度を保ち、その殆ど全地域は、森林帯の限界外に在り、森林は山岳が遠ざかつてチョルヌイ・イルトウイシ河に出口を與へてゐる個所にのみ見受けられるに過ぎない。

チョルヌイ・イルトウイシ河は四つの河川より成り、それらの河川は殆ど、盆地の中央に於て會流して居り、盆地の南方には、氷河の侵蝕を受けて平滑になつたり、峡谷に裂斷されたり、或は圓錐狀に削剝されたりしたところの

(註二) 花崗質の巖群が隆起してゐる。

當河の河源の面積は一五〇平方露里に充たず、比較的小さいが、河は流水及び沼地に富むキイトゥイン・アルチャ盆地より可成り急流をなして流出し、狭い、蛇行性に富んだ林間の狭谷を流過してゐる。因みに、この峡谷の地形に關する資料は未だ明らかにされてゐない。

サボーチニコフ教授は、アラサン療養泉への通路ミ Cholmui イルトゥイシ河との交叉せる個所に於て(註三)、即ち、Cholmui イルトゥイシ河の盆地を流出せる地點より約二〇——二五露里下方に於て河に下つてゐるが、同氏によれば、當 Cholmui イルトゥイシ河は、こゝでは標高二、〇〇〇——三、〇〇〇呎の山岳に圍繞された、深く狭い河谷中を流れてゐる(註四)のこゝである。尙、森林はこの山岳を峰頂附近まで被覆してゐるが、これは北斜面のみで、南斜面は裸地となつてゐて、只ステップ性の草類に被覆されてゐるに過ぎない。こゝでは河の流れはさほ急ではなく、河幅約二〇「サージョン」の淺瀬を流下し更に下流に至れば巨岩の突出せる間を飛沫をあげながら流れてゐる。

この淺瀬の下方に於ては、山峽より流出せる大きい支流クンゲイト。イ川が先づ右方より Cholmui イルトゥイシ河に注ぐ。然し、このクンゲイト。イ川の上流は、Cholmui イルトゥイシ河流域の他の多くの峡谷に於けると同様、直徑二「アルシン」に達する大きい樺や落葉松の繁茂せる、非常に廣い峡谷内を流れてゐる。(註五)

河はそれより二〇露里の間、先づ南流し、次いで徐々に南東に轉流し、バラ・イルトゥイシ河口までの六〇露里の間同方向に向つて流れる。この河區の河谷は全く雜多な特色を呈し、比較的高くない山脈の間を縫ひつゝ流れてゐる。

て、まだ充分なる發達を遂げてゐない。河はこの山間の河谷内に於ては花崗岩壁に限定された狭い深谷(カニヤン)を流れてゐて、深谷の急峻な絶壁の突鼻に近寄らねばその河面を看るこゝが出来ない。右の深谷には左右より花崗岩山によつて兩側を圍まれた狭い山峽が続いてゐる。この岩山は圓形の外貌を呈するも、山峽側にも、イルトゥイシ側河の方にも、やはり峻しく急傾斜してゐる。そのため、Cholmui イルトゥイシ河の道は、こゝでは、絶えず山峽へ入らねばならぬので、非常に通過が困難である。道は極く稀に河畔の小さな、不毛の砂洲へ出てくるこゝもある。河畔には概ね「たうひ」やポプラの處女林が続いてゐる。尙、山峽にも草はあるが、主に蘆葦やポプラの叢林が主占してゐる。河は砂洲の附近では比較的穩かな廣い河となつて流れるも、その上流や下流では巨岩や漂木に充たされた急瀧を瀧の如く飛沫を散らして流れてゐる。

この河區に於ける河の右側支流には見る可きものはないが、左側支流には、チャットゥイルタス川及び Cholmui イルトゥイシ河の一大支流たるジュルトゥイ河がある。

バラ・イルト。イス河は幅五「サージョン」の、やはり大きな川で、廣潤な草原をなした河の柳やポプラの繁茂する間を流れるが、Cholmui イルトゥイシはこの川の下方で最後の山脈を横切つて南折し、後、同轉流點より三〇露里下方でステップ性草地に入り、そこでゴルボイ・イルト。イシ(一名庫伊爾齊斯)河と會流する。

Cholmui イルトゥイシ河の山地を流れる區域の總延長は一五〇處里を超えず、一方支那領内のステップを流れる延長は三〇〇露里以上に達し、概ね西北西の方面を取つてゐる。河は、こゝでは四〇——五〇「サージョン」の廣

さの緩かな流れにして低い河岸中を蜿蜒ミ流下し、時としては、ポプラや柳等(註六)の繁茂する洪瀆地を形成する。克蘭河口までには河中に稀に島が見受けられ、河床は、かなり廣く、特に右岸沿線には、半ば砂に埋まつた而も段丘によつて南及び北より制限を受けてゐる幾つかの舊河床があり、段丘の嶮崖には、チルヌイ・イルト・イシによつて曾て浸蝕された岩層(綠色)(註七)のエピソード塊を交へた。高陵土化する長石層が露出し、而もこの地層の露頭は水涯にもあり、石英礫岩、雲母砂岩及び混雑粘土質砂土等の水成岩の層層(總層厚度約四「サージン」)に被露されてゐる。尙、ゴルボイ・イルト・イシ及び克蘭兩河々口間に於けるチルヌイ・イルト・イシには徒渉し得る淺灘はなく(註八)、たゞ、八月になつて減水した頃にはカラ・ト・シタ界標附近に徒渉し得られる箇所ができるのみである。

チルヌイ・イルト・イシは克蘭河の水を受けて後は、多くの島の間を流れ、廣く分流化するため、著しく淺くなり、満水時ですら、淺灘の徒渉は容易である。秋に於ける本流の深度は、所により半「アルシン」に充たぬ(註九)。次いで二五露里下流に於て、河は再び一つの河床に纏り(註一〇)、水量の多い急流、ブルチュム河に達するまでは順調に流れる(註一一)。

(註一) サボーデニコフ著「イルト・イシ及び科布多兩河々源に於ける蒙古阿爾泰」三二六頁、以下のチルヌイ・イルト・イシ河に関する記事は主に右の書による。

(註二) サボーデニコフ著書一九二頁。

(註三) これらの泉はジュルト・イ河の右支流バラウン河の河谷にある。これに就ては尙、後に再説するであらう。

(註四) この河谷の標高は五、〇三五呎を示す。

(註五) サボーデニコフ著書一六六頁

(註六) サボーデニコフ著書三二八頁

(註七) ボターニン著書第一卷、一八、一九、二二頁

(註八) サボーデニコフ著書二五二頁

(註九) チルヌイ・イルト・イシ河に関する照會資料「ザイサン關稅事務」第四五號(一八九九年發行)

(註一〇) ブルチュム河の噴音は余がチルヌイ・イルト・イシ河を渡つた箇所、サルダム界標(ブルチュムより二露里に在る)でも聞えた。

(註一一) ミロシニチュンコ氏は克蘭及びブルチュム兩河口に於けるチルヌイ・イルト・イシ河の水位を一、六八二呎及び一、六七八呎と測定してゐるが、これによると、右兩河口間の距離は四〇露里であるから、一露里當りの落差は〇、七呎となり、従つて、實際のチルヌイ・イルト・イシ河の流速(サルダム界標の渡場に於けるが如き)と若干相違する。想ふに、右の水位は、その何れかと誤つてゐるものであらう。

一九一一年の六月初旬に露清株式會社の汽船ビートル・ベンズニツキイ號(註一)がこの地點まで試験航行を行ひ、ブルチュム河口よりザイサン・ノル湖までの全延長の航路測量を行った結果、同會社の専務取締役クラシリニコフ氏は、チルヌイ・イルト・イシはブルチュム河口まで航行の可能なることを確めた。右に關し氏の本社に提出した報告(註二)及び河の概況報告(註三)、主として一等水先案内人プトウリン氏の作成にかゝる河の模型圖(註四)は吾々のこの河に關する断片的な情報を綜括せしむる上に非常な便宜を吾々に與へた。

(註一) ペ・ペレンズニツキイ號は一九二二年の五日にも、再びブルチュム河口まで溯航したが、當時は賓客の一人として、科布多蒙王に政廳より任命された蒙古王バルタ氏も便乗した。

(註二) ロッデーウチ氏か右の二文書の寫本を余に提供されたことに関して余は衷心より謝意を表す。

(註三) 遺憾ながら頗る概括的なもので、而も記述の内容が断片的で且つ明瞭を缺く點が多かつた。

(註四) 余は茶商ウガウ・商會支那人、ア・ルイセフ氏の手を経て、この圖の寫本を入手した。

チョルヌイ・イルトウイシ河はブルチュム河の急流を入れて後、流速を増し、同河溯航の汽船に對してはその速力を一時間一〇——一露里より三露里まで減せしめた。ブルチュム河の與へるこの影響はその河口より三五露里の延長にも及び、特に初の二〇露里間は汽船が一時間三露里以上を進行し得ないほきであつた。この區間では河は幾つかの流れの早い分流(註一)に岐れてゐて、その河幅は頗る廣くなつてゐる。然し、これらの分流内の淺瀬の所でも航路の深さは九「チトウエルテ」即、五、二五呎までのものであるから、汽船はこの區間を毫も停滯することなく通過することゝできた(註二)。

ブルチュム河口より八露里の所には、クラスナヤ・ガラ(紅い山の義)といふ山がチョルヌイ・イルトウイシ河の右方に聳えてゐる。この山は準嘴礫のこの部分に於ける、他の紅色を呈する山岳と同様、紅色砂質粘土より成つてゐるらしい。河はこの山麓で再び島のために分流化せしめられ、航路は右へ寄つたり、左へ寄つたりして三回も分流を移行する(註三)。更にブルチュム河口より一七露里の所では左方よりサウスイク・クリ沙漠(註四)が河に接近する。この沙漠は、その後、河床より遠退いたり、近づいたりしてアルカベリ河まで伸び、そこでカム・テュベ沙漠に

合する。然し、それまでも幾回もなく河を横切り、そこに、例へばカバ河口の下方に於けるやうな大きな、頗る高い砂山、正しい馬蹄型の砂丘を構成してゐる。やゝ下方に至ればチョルヌイ・イルトウイシ河に、コクスウン山脈の山脚が接近し、その脈麓に於て河は幾つかの分流となり、航路は河(註五)の中央を縫つて立木のある島嶼の間を通過する。尙、幾露里か行けば、島の數は減じて主流の河床は廣くなる。然し、水中に埋つた叢林より見て、河の擴大して居るのは常態でないことが判る。左岸の連山はこゝではその山尾を河岸に臨ませ、航路はその斷崖に片寄つた所を過ぎる(註六)。

(註一) クラシリニコフ氏の航行記には、河は細流に分れ、航路はその細流の中央を通過してゐると記述されてゐる。

(註二) ソスノフスキイ氏の所謂「岩質急流」がこの河を横断してゐるのではないだらうか？

(註三) この記事はブトリーンの地圖とは全く一致してゐない。尙、同氏は航路圖に分流に於ける航路の勾配を示してゐない。

(註四) 沙漠に取圍まれた湖盆の名稱による。ブトリーンの地圖には一七露里の地點にアタタス岬(アタ・タス?)とあるが、沙漠は示されてゐない。尤も幾らか上流には「砂利」の符號が記入されてゐるが……。

(註五) ブトリーンの航路圖より案するに、河は、山麓にキルギス人の多營地のあるムウミヤ山まで二露里の間、立木のある島の間を流れてゐるらしい。

(註六) これは航路圖に示されてゐない。航路は主流の中央に在り、ボスレドニイ・ヤール(斷崖)はブルチュム河口より三八露里下方に在る。

河は四〇露里目の所で、深い一河床に集流し、その河幅は六〇——八〇「サージエン」になる(註一)。河岸には

ボブラが點生するが、洪瀨地は既に無くなつてゐて、一般に樹木は「すげ屬」の點生する、灰色の、軟弱な砂地にしか見られない。左岸の沙漠は各所に大砂丘を形成し、その頂部は南北の走向を示してゐる。河はそので曲流して(註二)、遂に幅一〇〇「サージョン」(註三)の淀みなつてカバ河口に近づく。

この地點に於けるチルヌイ・イルト。イシ河の河床の標高は一、五八二呎を示す(註四)。

河はカバ河口を過ぎれば、一つの島を形成し、それを左側より迂廻する(註五)。爾後、沙漠の點在する高地が左右より河を狭めてゐる。河は、峻しい岬になつて左側より突出せる山を八露里の間迂廻し、右岸の峻しい絶壁附近に於て右方に轉流し、その岩壁に沿つて三露里の間流下する。この絶壁を過ぎれば、紅灰色の脆弱な砂原の表面に綠色の廣い洪瀨地が現はれ、こゝでは牧草が右岸のみではなく、左岸にも見受けられる。尙、左岸には鮮紅色や黄色の混砂粘土より成る山岳の崩壞部がある(註一)。

(註一) サボーチニコフ著書一三四頁

(註二) 航路圖にはブルチュム及びカバ兩河々口間の距離は五〇露里とあるも、クラシリニコフ氏はそれを九〇露里と決定してゐる。尙、この地方の河流は曲流である。

(註三) この區域の航路圖には、四九露里目の所の右岸の砂洲附近にキルギース人の多營所が示されてゐる。やゝ下流にはボブラの密林に面して、大きい砂洲があり、河を二の分派に岐ち、五〇露里目の所では左岸に砂山があり、その下流には流れの急な曲流群がある。尙、七〇露里目の所には右岸にキルギース人のマザール即ち棺棚があり、カバ河口の稍上流の右岸にはキルギース人の多營所がある。

(註四) 航路圖には一小砂洲と、その稍南に島嶼が示されてあり、航路はその砂洲と島嶼との間を通つてゐる。

(註五) サボーチニコフ著書より。

(註六) この區域に關しては、航路圖には次のやうに述べられてゐる。即ち、カバ河口(これを上部河口と呼ぶ)より二〇露里下方に同河の下部河口がある。同河口の下には墓地があり、その先にはベータヤ・ガラ(白山の麓)が頗る大きい立木のある島と相對してゐる。一一五露里目の所では、チルヌイ・イルト。イシの右岸にタラスナヤ・ガラ(紅山の麓)があり、その上方の左岸の砂洲附近にはキルギース人の多營所がある……と。

チルヌイ・イルト。イシ河はカバ河口より二五露里を過ぎて脆弱な細長い沙漠に入るが、この沙漠は、その後、八露里の間河床に沿つて續いてゐる。然し、沙漠は暫くの間左岸に伸び、それより右岸に移り、急に斷絶して、灌木の叢に入替り、そのまゝ、柳やボブラの密林に變る。そこでは右側よりベレゼク河(一、三四三呎)(註一)が注いでゐる(註二)。ベレゼク河口を過ぎるに河流中には一つの島が現はれ、航路は左方よりそれを迂廻する。島を過ぎるにボブラの林が兩岸に見え、その間を河は恰も並木道のやうに五露里の間一河床に據つて流れる。その後河中に又、島嶼が現はれ、航路は左方より右方へ轉じ、又、左轉して、遂にチルヌイ・イルト。イシ河は國境を横斷し、アルカベク河口へ向う(註二)。

クラシリニコフ氏はチルヌイ・イルト。イシ河で行つた試験運航の結果を次のやうに記してゐる。河水は豊富で河底は専ら砂より成り、而もやゝ硬い礫質の河底の所は僅少であるから、航行には都合が宜い。尙、河の深度九「チットウ・ルティ」即、五、二五呎未満の所は淺瀬にさへ無く、地方人の言にすれば、チルヌイ・イルト。イシ河で

は水嵩の多い時期は五月十五日より八月十五日まで続くこのことであるから、河床の點からは、汽船の運行に何等の危険も受けない。かくて、チオルヌイ・イルト。イシ河は支那領にありては、直流域約一〇〇露里、曲流を合せ一八〇露里の間舟行に適するものと観るこゝが出来た。之加、全域に亘つて河は平坦で、流れも緩慢であり、たゞ終點の近くで、ブルチュム河口の手前に早潮があつて著しく舟行を妨げてゐるのを認むるのみである。

乍然、右の記事はこの河に關する、既存資料——地理的文獻の内容を幾らか趣きを異にしてゐる。

初めてチオルヌイ・イルト。イシ河に船舶の航行が行はれたのは一八六三年頃である。この時、商人コルチンは僅々二、五呎の吃水の船でザイサン・ノル湖々岸の調査を行つた。然るに、氏は、適當な深さの河床を見出し得ず、チオルヌイ・イルト。イシ河口を通過することができなかつたのである。この調査は五月末の、河の水準の高い時に行はれたものである(註四)。尙、ソスノフスキイ大尉もこの河の航行に就いては悲觀的な結論をなして次のやうに書いてゐる。即ち、普通はチオルヌイ・イルト。イシ河が頗る急流で、深く且つ、廣いやうに聽いて居り、又さう書かれてもあるが、實際には少しも急ではなく、又深くも廣くもない。たゞ河水の氾濫直後に於ける水嵩の高い時には河の淺瀬は勿論徒渉し難いし、その他の季節になるに、淺瀬が夥しく出来、特にカバ河口の上流にそれが見受けられる(註五)……。

然し、その後時勢の變化に伴ひ、一八七〇年終りより、ロシアの商人がチオルヌイ・イルト。イシ河に入り込み、そこで、カバ、ブルチュム及びクラン河々口に於て吃水三、五呎(註六)の大型の平底船即ちカルバース舟を建造し、それ

に商品を積んで、ウスティカーメンノゴールスクやセミパラチンスクまでも運行する様になつた。尙、當時の航行は概ね七月に行はれた(註七)。

其の後、航行術にも熟練し、河の状況にも馴れて、經驗ある水先案内人も現はれるに至り、カルバース舟の運行に次いで、この河にロシアの汽船を浮べてロシアと西部蒙古との通商水路たらしめ得るこゝも考へられる様になつた。然し、一八八九年、支那の地方長官は「一八八一年の協定にはロシア人のチオルヌイ・イルト。イシ河航行權に關する契約はない」の理由によつて突然ザイサン湖の商人ア・エヌ・ソバチキン氏のカルバース舟の運行を禁止し、且つ、露國汽船に對する本河川航行禁止命令を發した(註八)。この禁令は全く、不可抗力なものにして尙現今まで効力を保つてゐる。こゝに於て附言すべきことは、トムスク交通管區長男爵アミーノフ氏の努力である。氏はチオルヌイ・イルト。イシ河下流の調査に貢献した人で、一八九七年(註九)と一八九九年(註一〇)に自らアルカベク(一一)河口まで、この河を通航した。

(註一) ミロシニチュンコ著書一七九頁

(註二) 航路圖に詳記されてゐるところでは、一二三露里目の所で右方にクラスヌイ・ヤル(紅い絶壁の巖)が現はれ、その下方にキルギース人の多營所があることとなつて居り、尙下流では、河が一大彎曲を描き、その彎曲部の西端には、やはり、キルギース人の多營所があり、ベレゼク河口の上方には第四番目のアド。イタ・ベケと云ふ多營所がある。

(註三) 此の區域にはキルギース人の多營所が二ヶ所あり、何れも本河の左岸に位置を占めてゐる。

(註四) リツテル著「アジア地理」第三卷補遺、セミーノフ及びボターニン共著「阿爾泰・サヤン兩山系」二六頁

(註五) 同著書五六九—五七〇頁

(註六) これ等のカルバース舟は通常、長さ一〇「サージン」幅二「サージン」深さ二「サージン」を有し、一、〇〇〇—二、〇〇〇布度の貨物を積載した場合吃水は四、五—六、五「チュウトルテ」に達する。カルバース舟はウステ・カールメンノゴルスで請負はされた職工の建造にかゝり、用材は樺、楫で、工費は鋼具を含めて二五〇留を要する。然し、この價格の大部分はその後土地での賣却値段によつて償はれる。因みに、イルト・イシ河のカルバース舟は獨逸(サクソニア)の運船の型を真似たものである。

(註七) 「ザイサン税關事務」第四十五號一八九九年發行

(註八) 同上

(註九) 「交通省誌」一八九七年第十號

(註一〇) サボーデニコフ氏著「チルヌイ・イルト・イシ」(「シベリアの生活」紙第二四一號及び二四四號掲載)

(註一一) ところが、セミバラチンスタで出版されたマハリス氏の「一八八〇年末の記録」(「チビイ・イルト・イシ河及びザイサン湖航行の諸条件」中には既にチルヌイ・イルト・イシ河の航行の可能性に就いて次のやうに述べられてゐる。即ち「チルヌイ・イルト・イシ」は初夏にはブルチム河々口まで航行可能である。土地の漁夫メンド・イバーエフの言によれば、八月下旬に至ると既に河口より一五露里の所に多くの鰯が現はれるが、四「チュトウルテ」以下の吃水の船はそこを通過しうるとのことである。チルヌイ・イルト・イシは三つの分流となつて湖に注ぎ、その北と南の分流(カマルウハ)は淺く、小舟のみ通過しうるが、中央の分流は深い。この中央の分流には砂洲があつて、その深い河床(「二」チュトウルテ)は二つの沙洲の間の湖中に深く突入してゐる。この島嶼があるため湖より河へ船を導くのは非常に熟練を要する。浪の起つた時には河は波立ち、晴天時には航路の水色は一層暗黒を呈する。河口への夜中航行は殆んど不可能である。

第二節 チルヌイ・イルト・イシ河の支流

支那領に於てはチルヌイ・イルト・イシはその右側よりクラン、アルチュム、カバ、ベレゼク及びアルカベクの五つの水量の豊富な支流を収めて居り、更に、左側よりはジュルト・イ及び庫伊爾齊斯の二大河水を受け入れてゐる。左にこれらの諸支流に就て述べやう。

一 クラン河

ボターニン氏及びサボーデニコフ教授の率ゐる兩探險隊はウルモガイト・イ峠へ向ふ途中、このクラン河の上流を過ぎた。兩人はクルム・イムベスミ云ふ山岳を下り、右の峠を距る一七露里の所でこの河谷へ出てゐる(註一)。これより先のクラン河畔を通つた者は恐らくグラヌー氏一人らしいが、氏はその報告に添附せる地圖(第五葉)に於て氏自身の行程をボターニン氏の行程に殆んど一致せしめてゐるため、氏がここでクラン河を離れたかを決定することは六ヶ敷しい。氏の簡単な旅行記(註二)では右の疑問は明かにされ得ない。グラヌー氏の云ふクラン河(即、ジュニシユケ・クラン河?)は會流せるころの大きな河が、もしも、クラン河の本流だを假定するならば、氏が一河域より他の河域へ移つてゐながら、何うしてこの事實を無視し、兩河を會流するものとして述べてゐるのか、判断に苦しむ。もし、兩河の會流點は四、五〇〇呎の標高に位し、こゝに當て、ムス・タグ山脈より發してゐた長さ約六〇軒の水河の末端がなければならぬといふ、興味ある記事が氏の著書にありさへせねば、余はかくまで氏の記事の不明な點を詮索しなかつたかも知れん。

此處に於てクラン河に於ける余の行程圖は、ラフ・アイロフ氏の集めた照會資料に基いて従來地圖に示されてゐる阿爾泰諸嶺山脈のこの地域の山勢や河川分布状態を知る上に重要な役割を演ずるものと思ふ。因みに、サボーデニコフ教授は己が地圖を作成するに當り、この資料を輕視して、氏自らを基礎としてゐることは遺憾なきことである。寧ろラフ・アイロフ氏の地圖の方がサボーデニコフ氏の地圖よりも遙に實際に近いのである。サボーデニコフ教授は「余は總ての河谷を踏破した譯でないから、この部分に於ては、否でも應でもラフ・アイロフ氏の地圖のスケッチやペフツォフ氏の行路圖を参考にせねばならなかつた」と記してゐるが（註三）、同教授のこの辭句が抑も何を云はうとしてゐるのか諒解し苦しむ。何故なれば、ラフ・アイロフ氏の仕事は西部蒙古地圖製作上の立派な根據となるもので、サボーデニコフ教授がこの地方に於ける自分の仕事を高く評價し様にして、ラフ・アイロフ氏の仕事を否定せんとするが如きは、到底考へられないことであるからである。（註四）

クラン河はムス・タグ山群に發源し、最初の七露里は浸蝕を蒙つた氷砕石丘や矮樺の生えた山岳高地の間の狭い河谷を南西の方面に流れ、八露里の所で廣闊な河谷に出で、そこで、砂利に埋つた廣い河床を南西に流れる左支流イルバラ河と同じ方向を取る。こゝではムス・タグ山脈の南西斜面のトウルゲン禿山に發源するトウルゲン川が左側より注ぐ。尙、右の禿山からは、阿克・サラ河の左支流たる、他のトウルゲン河が西方へ流れてゐるが、これに就いては後に述べる。イルバラ・クラン河谷はクルム・イムベス河口に至るまでの九露里の間に在つては、キルギス人間にジャイラウミと呼ばれる河谷（この名稱は廣い山間放牧地を意味する）と同様な特徴を有してゐる。尙、こ

のこゝはこの河谷やそれを圍繞せる高地の性質を良く説明してゐる。高地は、事實、こゝでは柔和な外貌を呈し、山間ステップ性植物に蔽はれた傾斜の緩慢な山腹を有し、溪流の灌漑を受けたる深い側谷を有つてゐる。この種の谷はこの邊ではそれ／＼地主の所有に屬し、所有主はその牧畜群を遡つて一ヶ月半から二ヶ月位（普通六月中頃より八月の中頃まで）こゝへ放牧にやつてくるこゝになつてゐる。尙、こゝには、クラン河に流入する溪流の名を冠した夏營所（ヒンガ）が同河の右側に四ヶ所（アスタウチ、ボク・タッスイク、コク・カラ・スウ及びホス・アラク）あり、左側にも四ヶ所（イルバラ、テル・スウ、テュレ・バイ・ジャイラウ及びクルム・イムベス）ある。最後のクルム・イムベス河谷に沿つてはウイ・チリク河谷へ通ずる踏均らした道かついて居り、この道は、曩に掲げたポターニン、サボーデニコフ教授や、恐らく、グラヌー氏も通つたらしい。尙、この道は遊牧民の移動する時にも利用されるが、キルギス遊牧民の或者は、クラン河谷に臨む高い山岳を通り、阿克・サラ河に沿つてクラン河谷へ下る山道を取つてチニメルチュク（ケメルチュク）河よりクラン河へやつてくる。一九〇三年の六月下半には未だ雪が消えてゐなかつたためにこの山道を通るこゝは出來ず、余はクラン河の右支流アスパイ川の上流より、川の側にある雜路に據つて河邊を下らねばならなかつた。尙、この二つの道は阿克・サラ河の下流で合する。

クラン河はクルム・イムベス河口の下方で西折し、その河床には大塊の岩石が次第に増加し、尙、下流に至れば、嘈音を立て、流れ始め、遂には激流に變る。此の河區では岩質の山嶺が河に迫り、谷は次第に狭まり、河上に河岸の段丘が高く突出し、先づ落葉松や椴松等が姿を現はし始める。

河谷の方面を轉ずる地點より五露里目の所では右側より最大支流アク・サラ河がクラン河へ注いでゐる。

(註一) ボターニン氏もサボーデニコフ氏も余の聽取せるクルム・イムベス分水山脈越の峠の名稱を記してゐない。この峠の標高をサボーデニコフ氏は八、四八〇呎と測定してゐる。(同著書四〇四頁)

(註二) 同著書七四—七五頁

(註三) 同著書一四頁

(註四) この断定はサボーデニコフ教授の次の記事よりなしたものである。即ち氏は「余の旅行區域外の地圖も、勿論改訂されるであらうが、それにはまだ多くの年月を要する」と。余は特にサボーデニコフ氏の旅行區域以外の地圖のみでなく、丁度サボーデニコフ氏が他の旅行家(測量班の將校ラファイロフ氏を含む)の行程に對してなしたと同様の改正を、サボーデニコフ氏自身の行路圖に對しても加ふべきものと思ふ。サボーデニコフ氏は多くの岩山地域を足早に歩いてゐる。然し、元來氏の記事には脱漏の點も多いが、それは別としても、かやうな條件の下に作成された行路見取圖には初めから誤謬がある筈である。一例を挙げれば、本文の記事と地圖との一致してゐないブルタン河とクウ・イルト・イシ河との間の河域の如きは、現に著しく簡単に述べられてゐる點などがそれである。

アク・サラ河 アク・サラ河は阿爾泰諾爾山脈の一大支脈に發源する。この支脈は、ムス・タグ山群の北西二〇—二五露里の所で阿爾泰諾爾山脈より岐れ、最初は南の走向を取るが、後、クラン河に七露里近く接近して、西方に急折し最初にサルグリ、後にコク・タシユルミいふ名稱の下にクラン河ミアルグン河ミの分水界となる。右の支脈が西方に轉ずる地點には山上にテミル・バカミいふ龜の形をした頗る偉大な峰頭が隆起してゐる(註一)が、これは、

殆んど黑色に近い色彩を呈した橢圓形の禿山であり、その下方に横はる雪原の白い地面と共に、奇異な對照をなしてゐる。尙、禿山の上にも所々に雪がかゝつて居り、恰も蛇の如く谷を匍下つて瞭然と凹所のみを埋めてゐる。この禿山はアルチュム河系のスムダイルク河の二支流テミル・バカ及びトルグイ並にクランの諸河に集まるカブイル・タス、アルチャルイ、カラムルラ及びジョルバイの四つの小川の河源となつてゐる。アク・サラ河の源流の一つも亦この禿山に源を發してゐる。同河の他の一つの源流は更に西方の禿山の山腹にあつて、この禿山はスムダイルク河系ムンケ川の河源ともなつてゐる。こゝよりアク・サラ河は東流し、その間阿爾泰諾爾山脈を下る幾つかの支流を入れ、後、河源より八—二〇露里の所で急に南方に轉流し、クラン河に至るまで同じ方向をさる。アク・サラ河はこの最終の區域に於ては新に、ムス・タグ(註二)の直ぐ西方の主脈に聳える一禿山より流下する支流、トルグンミいふ非常な激流をなして流れる河を入れてゐる。

アク・サラ河はその下流地方では廣い河谷を流れ、廣さ二〇「サージュン」の淺瀬のある、而も急傾斜せる、深さ二・五呎の河床としてクラン河に注いでゐるが、河床は塊狀の砂利より成る硬い地盤よりなつてゐるため、渡河には大して不便ではない。尤も吾々の羊は一五「サージュン」だけ下方へ押し流された。

(註一) バカ(Baka)は蛙の義、タシ・バカ(Tash-Baka)は龜の義である。當時、余に通譯してくれた人の言によると「龜の蛙」ではなくて「龜」であつた。

(註二) 余はアク・サラ河谷を自ら通つてゐないため、上記の記事は照會資料に據つて述べた。

クラン河はアク・サラ河口より約三露里下流までは、やゝ北方に傾きつゝ西流し、それより銳角をなして南西に

轉ずるが、爾後、アス・バイ河口に至るまでの一九露里の間はこの方向を變へない。

クラン河はこのアク・サラ—アス・バイ兩河口間の區域では巨岩のある狭い峡谷の間を走り、巖に激し、沫をあげつゝ流れ、河床附近には何處にも道はない。路は、こゝでは山の斜面を進み、時々クラン河面より二〇〇呎も高い所を通つてゐるこゝがあり、而も、巨石や樹木に埋つた激流(註一)を横断して峻しい坂路を登つたり、降りたりしてゐるため、駱駝隊の通行には尠からず困難である。殊に難所はカブイル・タスマ云ふ所で、そこでは山道は大きい花崗岩塊の間を縫つて續き、而もこの岩塊は花崗質断崖に河床(註二)の間の峡谷に廣い障壁となつて散在して居るため、馬を岩間の狭い裂目を通すにはその都度荷を解かねばならず、吾々は此處を通過するのに尠からず手間取つた。然しこのクラン河畔の難路を征服する苦しみは、附近の峡谷に展開された多くの側谷の壯麗な眺めや峡谷の美しさによつて癒された。そこには全面を針葉樹に蔽はれた山壁や、裸岩、激流、雪を頂く山峰、溪流、林、等が恍々たる陽光を浴びて美しく展開してゐた。

たゞ一回、吾々はクラン河谷を過ぎる時に天候が俄に變り、非常に深い乳白色の雲霧に閉ざされ、文字通り咫尺を辨じ得なくなつたこゝがある。それがため、吾々はその場に天幕を解いて滞在するこゝになつた。するこゝ一時間ほさして霧が晴れて見ると、吾々の天幕は餘り大きくない絶壁の突鼻に設けられてあつた。そこはちやうど、クラン河がアス・バイ河を入れて南東に急折し、ウイ・チリク山脈が近寄り難い峡谷に迫つてゐる箇所に見えてゐたのである。やがて空氣も澄み直り、クラン河の峡谷は遙かステップの方向に至るまで一面に見えて來た。その時、案内者は余

にジニシケ・クラン河口に、シャルイ・スメー町の在るこゝ云ふウラスト・イ河口を指し示して呉れたが、キルギース人が地理に明るいためでもあらうか、彼の肉眼で見えるこゝ云ふのに余はそれを望遠鏡でさへ見るこゝができなかつた

(註一) 或時かやうな急流を徒渉しようとして、余は命を捨てかけたことがあつた。余の馬が河の石の間に脚を踏込み、それを抜け出すことができないうで、余と共に急流に倒れた。幸に余の側方に圓礫岩があつたから、余はた。半ば蹲居してそれに頼り、コザックに救助された。

(註二) これらの岩塊の或るものには稜角の脱れた、丸味を帯んでゐるものもある。然し、それをもつて濁水河の端推石の遺物と看做す譯にはゆかぬ。といふのは、クラン河の上流には、何處にも此の種の花崗岩頭が見受けられないからである。想ふにこれらの岩塊は、まだ、クラン河が現今よりも高い水準を流れてゐた當時、山崩れによつて出來たものであらう。

アス・バイ河 當河はその下流では、クラン河谷の直接の一延長たる一つの河谷に流入するが、上流では兩河は互に全く相反する方向を取つて流れ急峻な絶壁の下で合流し、そこに小さな突角を形成する。兩河の流速は、ほど同じであるが、クラン河の方はその全く透明な一大水量でもつて混濁したアス・バイ河の水を力強く壓迫し、右岸に押やり、幾「サージン」が過ぎて既に、アス・バイの濁水と混じて混濁して了ふ。アス・バイ河はかなり大きな河で、この河は、テミル・バカ秃山よりやゝ低くてコク・タシル山脈最終端の高所たる一秃山より發源する。尙、この高峰の脊後に於てコク・タシル山脈は南西の走向に轉じ、アルチュム及びクラン兩河の分水界として伸び、サボーチニコフ氏の所謂モシコ山脈となつて終りをつけてゐる(註)。

アス・バイ河の上流は小川になつて居り、河床は専ら圓礫に埋められてゐて、六月には淺瀬の一部は徒渉するこゝ

が出来る。やゝ下方では左側よりコク・タシユル河を、右側よりズウ・カラガイ河を受け入れて急流となり、渡渉の容易な浅瀬はなくなる。尤も河はズウ・カラガイ河口の下方に於て山峽に入り、クラン河に合するまでこの山峽中を流れて居り、浅瀬を渡る必要はない。アス・バイ、ズウ・カラガイ及びコク・タシユル三河の上流は何れもジャイラウ (Djalau)、即ち牧草地や山間ステップ性の草に蔽はれた緩傾山岳となつて居り、河はその間を流れてゐる。このジャイラウはキレイ王や若干の有名なキルギス人の避暑地となつてゐる。

(註) 同氏編纂の地圖による。

クラン河は上記の如く、アス・バイ河と合流するが、それより山峽に入り、殆どその左支流、ジュニシケ・クラン (小クラン) 河口に達するまではその中を流下する。

ジュニシケ・クラン河 當河はウイ・チリク (オイ・チリク) 臺地を流れる若干の川より成る。これらの川の内最も流れの急なものは、ウイ・チリク川云々、二つの源流より成り、その右方のものは八、一〇〇呎の標高 (註一) にあるカラ・サズミいふ廣い沼地に發し、左方のものはチルヌイ・イルト、イシ河の最大支流をも灌養せる一つの山脈に發源する (註二)。この二源流の會流點附近 (七、七七五呎) の河谷は標式的な氷砕石丘に充たされ、しかも、その間に小湖がある (註三)。河は臺地を下るに、ジュニシケ・クランと云ふ河名で呼ばれ、そこで右方よりトルダ、左方よりウステガン^ウの二支流を入れて水量を増し、狭い河谷をクラン河に向つて流れ、シャルイ・スメー^イ町の上方一〇露里の所で同河と會流する。

兩河の合流地附近は非常に河が深く、特に六月に徒渉し得る浅瀬は稀にしかない。町の附近には、この河を渡るために橋が架けられてゐるが、この橋は屢々流水に漂はれるこゝがある。恰度一九〇三年にもこの橋が落ち落ちて、シャラ・スメー^イへ往くのに、チェメルチク河口の方へ著しく迂回せねばならなかつた。

(註一) サボーデニコフ著書四〇四頁

(註二) サボーデニコフ著書一七一頁

(註三) サボーデニコフ著書一七一頁

克蘭河はシャルイ・スメー^イ町のやゝ上方で野原と菜園とより成る廣い洪瀆地のある河谷に出る (註一)。この河谷は、たゞ河の左岸のみに擴大してゐて、右岸側は高地となつて居り、そこには岩岬の河中に突出してゐる所が隨所にある (註二)。片麻岩より成るトルタ絶壁の如きも亦この種の岩岬の一つで、サボーデニコフ教授はこれに就いて次のやうに述べてゐる。トルト (又はトルタ) 絶壁はクラン河岸に二〇「サージュン」の高さに聳え、この絶壁の上の平地には「オボ」(様々な色の枯枝の散在せる石山)がある。石山の特色は淡紅色の地衣によつて殆ど全面を蔽はれてゐるこゝである。地衣は岩石を腐蝕しつゝ、巖頭一帯を蔽ひ、細長い尾を下方に垂れてゐる。紅い夕陽に映じた地衣は、さながら濃い鮮血を振かけたやうで、谷全體が薄暗くなつた頃でも、地衣だけは鮮血の如き色調を瞭然と現はしてゐる。

この岩山の下方八露里の所でバンダガタイ (カンダカタイ) 河が左方よりクラン河に注ぐ。この河は二つの小河

より成るも、左側の源流は詳でない。即ちポターニン氏は左側源流に於ては針葉樹林の繁茂せる河谷のみを遠望したに過ぎないが(註四)、右側の源流に沿つては、あまり大きくないが、高い沼澤質の盆地より山の峰に登つてゐる。川はこの盆地では緩かに流れてゐるが、盆地より、片麻岩の礫塊に埋つた南方の狭谷に至るに、谷を浸蝕しながら、激流に化してゐるこのことである。かやうな峡谷(立木の多い)の山路は峻険で、片麻岩塊をば縫ひつゝ續いてゐて、頗る通過が困難である(註五)。然し、この様な區域は餘り長くはない。二つの源流の合した後の河は峡谷の擴大せる地域に入り、それより緩傾斜せる山腹を待つ河谷に入り、そこでボブラ、樺及び各種の柳類の繁つた長く廣い草地のある直流區域を廣い河幅になつて流れる。この河はこゝで更に左側よりタラトイ(又はタルハトイ)川の水を受け入れる。サポーデニコフ教授もボブラや柳の繁茂せるこのタラトイ河谷を通つてゐる(註六)。尙ハンダガヤ河口は二、三二〇呎の水位に在る(註七)。

(註一) サポーデニコフ著書 三三三頁、ポターニン著書 第一卷 二二五頁

(註二) ポターニン著書 第一卷 三三六頁

(註三) サポーデニコフ教授は「花崗岩質」と述べてゐる(同著書一五五頁)

(註四) 同著書、第一卷、四二頁

(註五) ポターニン著書、第一卷、三九一四〇頁

(註六) 同著書、一一九頁

(註七) 同著書、第一卷、三三四頁

クラン河はアス・バイ河口より南東の方向を取り、シャルイ・スメーのある河谷に入つて、それより南方へ轉流するが、その先のトルト。岩の下方で再び東に轉じ、一五露里の間はこの方向に流れる。これよりクラン河は片麻岩より成るクイズイル・アド。イル山脈を横切つてステッパに出で、西方に轉じ、それより六〇露里過ぎて、チオルスイ・イルト。イシ河に注ぐまではこの方向を變じない。尙、當河はこの最終河域に於て右方よりチメルチュク及びクウルト。の二支流を入れる。

チメルチュク、クウルト、及びその他の支流 チメルチュク及びクウルトの二大支流はアス・バイ河の源ともなつてゐる一禿山に發源し、この三河の狭い谷の間には、コク・タシル山脈の支脈たるブウルン・ドク支脈がある。余はこの支脈が既にその岩質性を失ひ、高いながらも單調な外貌を呈した箇所でこの支脈を通過した。然しクウルト河谷よりそれへの登路は相當に峻しく、下坂は可成り緩かである。峯は落葉樹の粗林になつてゐる。

余はチメルチュク河(註一)の源流より一五露里下流の、河谷の廣くなつてゐる箇所に出で、一露里の間河を調査した。この河は上流では奇麗な針葉樹林の繁茂せる峡谷を流れ、その河幅は直流箇所四—五「サージュン」、深さ約一呎を示してゐるが、クウルト。河と異なる點は河床に塊狀礫の分布せる點であつて、その礫の中には綠泥片岩や微粒雲母片岩の如き、主としてコク・タシル山脈や左岸の山脈を形成せる岩石の圓礫が頗る夥しくある。

サポーデニコフ教授はチメルチュク河谷の廣い耕地々帯(標高三、一四〇呎)及び、それに平行して伸びたクウルト。河谷を横断せる際に兩河の上流を過ぎたことを記してゐるが、叙上の状況より見て、これは甚しい間違である。

が明瞭である。余は標高四、八〇〇呎の箇所でクウルト河を横切つたが、チェメルチク河は、尙それよりも高所に流域を伸ばして居り、右の標高は、上流ミ中流の中間の高度に當つてゐるのである。而も、こゝでは、まだ、耕作は行はれて居らず、それより二〇露里を下つたクウルト河にも又、チェメルチク河にも耕地の跡は見受けられなかつた。余の行程線上、即、源流より一八露里の所ではクウルト河は深さ約一呎に對し、河幅は三「サージュン」に達してゐた。柳、落葉松及び雜灌木林のある河谷は、こゝでは狭くなり、所によつては殆ど河谷の形態を失ひ、深谷ミなつて、緩かに隆起せる山岳の間に挟まつてゐた。尙、これらの山岳の中、左岸のものは、既に述べたやうに、ブルンドク山脈、右岸のものはコルムドクミ呼ばれ、灰色片麻岩や微粒雲母片岩より成つてゐる。因みにコルムトクの名稱は、時としてクウルト河の上流をも指すこゝがある。

余の取つた路がクウルト河を横切る地點より五露里下方で、右の兩山脈は狹隘になり、新たに岩質山脈に遷移し、その牧草に蔽はれた前山は姿を消し、河は廣さ約三露里の平原に流出する。これをヤシリ（又はアルシミ發音す）グルトミいふ。こゝでクウルト河は、コルムドク山脈の走向を變へた方向に従つて、南西より南方に轉じ、それより五露里下方でアラガク川ミ合する。後者は六月には非常に増水し、その源流は二五露里北西のкок・タシユル山脈の南西連續部を成す山岳中にあつて、幾つかの溪流より成るも、皆、同一の特色を具へて居り、山岳より平原に出るミ、縁に柳楊の生えた溝形の河床を流れ、夏の終には殆ど涸渇し、六月には出水して河床を充し、所によつては谷一面に氾濫して、軟弱な地層を、所謂バナタク（往々にして全く通過できぬ沼地）に變化せしめてゐる所も

ある。尙、この季節にカラ・スウ、チョイガトイ、ヂェルガトイ、アンサトイ、その他の河川を渡るこゝは頗る困難で、廣さは約二「サージュン」にも及び、河底は粘泥化し、而も頗る深くなつてゐるため、荷物を水に浸さずに渡るこゝは仲々困難である。

アラガク河より三露里下方ではチェレン川が右側よりクウルト河に注ぐ。余はこの河の上流の、河が落葉松や樺の生えた、深く浸蝕された河床を流れる箇所を渡つた。こゝでは河幅は二「サージュン」、深さは一呎であつた。

尙これらの河川に關する地理的文獻はない。マトソフスキイ氏ミ余ミを除いては（註二）サボーヂニコフ氏のみが、クウルト河谷を横切つてゐるのみであるが、氏はこの部分を略述して居り、クウルト河のやうな比較的大きな水脈をすら十分に記述してゐない（註三）。

（註一）余はこの河の名をチェメルチクではなくて、チェメルチクとハツキリ聞き取つた。ポターニン氏も亦同様に發音してゐる。然し、この二つの名は、今は忘れられてゐるが、舊名ケレン・ケムチクと云ふ舊烏梁海語から轉訛したものである。

（註二）「帝立ロシア地理協會時報」第十輯三一頁

（註三）同書一三三頁

チェメルチク河口以下のクラン河はミロシニチンコ氏のみが通つてゐるが、氏はその記事を公表してゐない。サボーヂニコフ氏ですら、この河の下流に就き、たゞ次の數行を費やしてゐるのみである。即「こゝの河岸には所々に柳やポプラが生えて居り、その綠草地から稀に河面が見え、河の流れる方向を察知することが出来る。水はブルチム河よりも寡いが、夏の上半頃、特に雨期明け頃には淺瀬も相當に深くなる……」（註一）。尙、余の見たこ

ころでは、既に一九〇三年の六月半頃にはチュメルチク河口までのクラン河の全域を通じて何處にも淺瀬のなかつた。たゞ、こゝでは、シラ・スメー町に出るために、非常な危険を冒してクラン河の左岸へ渡りることが出来たに過ぎぬ。以上の點より見て克蘭河はチュメルチク河より下方に於ては急瀬をなしてゐて、而も分流してゐるものと云はねばならぬ。尙、曩にも述べた如く(註二)、クラン河口の下方のチルスイ・イルト・イシ河に於ても亦、これと同様左所がある。

(註一) 同著書三三三頁

(註二) 二〇一―二二頁参照

(二) ブルチム河

次に博爾集河であるが、これは主として阿爾泰高原のこの部分の調査に従事したサボーヂニコフ教授の報告に基いて記述することが出来る。

博爾集河はチルスイ・イルト・イシ河の最大支流で、その水量はイルト・イシ河よりもやゝ寡く(註二)、タブイン・ボグド・オラ山岳結節點、及びこの結節點に連互せる恆雪や氷原に覆はれた大阿爾泰(即、南阿爾泰)及び阿爾泰諸爾山脈の一部より流下せる水を集めてゐる。

ブルチム河はその西部支流哈納斯、東部支流コム兩河が合して出来たもので、その合流點以下をブルチム河

と云ひ(註)、北哈納斯河を含めた總延長は二〇〇露里以上に達してゐる。

(註一) サボーヂニコフ著書三三三頁

(註二) サボーヂニコフ著書より。然し、イグナトフ氏(「地理」一八九七年發行第一卷所載「南部阿爾泰に就て」一六頁)に據ればカナス河は湖を出た所より、ブルチム河と呼ばれるとある。ミロシニチンコ及びマトソフスキイ氏も同様の斷定を下してゐる。

カナス河 當河は北カナス、南カナス及び西カナスの三つの主要な急流より成り、三河は會流して、そこに所謂上部哈納斯湖を形成する。

北カナス河はタブイン・ボグド・オラ雪嶺群の西斜面を下る廣汎なる氷河(註一)の下底より一大濁流をなして流出し、初の數露里は多數の瀑布を形成して、舊氷碎石丘の間を(註二)噪々として流過し、それより流れの緩やかな河になつて、所々分流化しつゝ流れてゐるが、河谷は一般に狭く、圓礫に富み、而も蒼鬱たる針葉樹林に被覆されてゐるため、通過は極めて困難である。尙、北カナス河は二〇露里の總延長を通じて幾つかの急な水流を受け入れてゐるが、その中右側の四つの水流は第二流と云ふ所の氷河より流出してゐる。

(註一) 當氷河の下端は絕對高度七、八七五呎に在る。

(註二) サボーヂニコフ著書二二七頁

南カナス河(註一)は約一五露里の延長(註二)を有し、タブイン・ボグド・オラ山塊の南斜面を下る一氷河の水を集め、最初の三露里は南西に走り、そこで右側より、幾らか小さい幾つかの氷河より流下せる著大な二つの水流を

入れ、次いでカラト、イル・カナス峠より下る川を合して西北西の方向に轉じ、その上カナス湖に注ぐまではその方向を流れ、この河區に於ても兩側より幾つかの水流を入れてゐる。而して、右の水流の中で著名なものはペーラヤ・レーチカ（白川の義）を云ひ、これも亦、タブイン・ボグド・オラ山塊南斜面の氷河に發源する。尙、兩河の合流點は七、三八〇呎の水位にある。南カナス河の流れる峡谷は北カナスの峡谷と同じく、非常に接近し難く、而も北カナスと同じく岩石に富み、狭くて、圓礫の大塊に埋められ、所々に、所謂「石沼」なるものを形成し、その下部には針葉樹が密生してゐる。サポーヂニコフ教授の同行者、學生オブルーチュフは大きい氷碎石より成る廣汎な崩落部に道を塞がれたため右の湖まで行き得なかつた。こゝで河幅は凡そ二〇「サーヂェン」を示し、淺瀬は渡渉出來ず、河の左側には四つの急傾斜せる河谷があり、そこを流下する流れは激しい瀧となつてカナス河に落ちてゐる（註三）。尙、オブルーチュフは林中に幾つかの堀立小舎や木造小屋の骨組なきを發見してゐるから、この峡谷へは獵師がやつて來るものが見える。

（註一）サポーヂニコフ氏はこれを南カナスと名づけてゐるが、如何なる理由によるものか理解し難い。この河は東より西に流れ、東方より上部カナス湖に注いでゐて、寧ろ東カナスと呼んだ方が適當である。

（註二）サポーヂニコフ氏（同著書三三三頁）は河の延長を三〇露里と記してゐるも、イリイン氏により、特に作成された地圖や同氏の編輯の下にオブルーチュフ氏の作成した一般地圖によると河の長さは何れも一六露里を超えぬ。

（註三）サポーヂニコフ著書二二二頁

西カナス河は最も小さく、イグナートフ氏がこれを通つてゐる。氏のこの河に關する記事は既に裏に述べてお

た如くである（註）。西カナス河はカナス峠の鞍部の近くの小さな氷河に發し、非常に峻しい谷を南東の方向に流れ、河は途中で二つの小湖を形成しつゝ、上部カナス湖に注いでゐる。尙、イグナートフ氏は第二の湖を上部カナス湖と推定してゐるが、氏も書いてゐる如く、當時、霧に地形に妨げられてカナス河の他の二つの急流の河口を視ることが出来なかつたこのことであるから、これは確實なものではない。

（註）上巻三六頁以下參照

尙、上部カナス湖の東部は峡谷に喰入つてゐるから、恐らく湖岸に沿ひ湖を迂回し得られるであらうが、サポーヂニコフ教授は附近の地形に通じた案内者を伴はなかつたため、此の點に就いて何等確固たる資料を提供してゐない。

上、下兩カナス湖の中間にあるカナス峡谷の長さは約五〇露里を示し、峡谷は初め南方に一〇露里伸びそれより二度西方へ方向を轉ずる。爾後、下部カナス湖に至るまでの四〇露里は、概ね南西の方向を取る。峡谷の兩側には左方に高いエメグイト、イ山脈が隆起し、右方に大阿爾泰（即南阿爾泰）山脈の支脈たるサルゴムイル山脈がある。この兩山脈は何れも雪の斑點を着け、その表層は頗る岩石に富み、兩山脈、殊にサルゴムイル山脈からは多くの溪流がカナス河に向つて激流となつて下つてゐる。カナス河はこれらの河の水を受け入れて、勾配の急な、圓礫の多い河床に水を駛せて居り、激流となつて流れてゐる（註）。尙、河谷の上部には早春の解氷期頃には河の所々に淺瀬が出来るが、下方には激流が多く、水源も大きく、河を渡るこゝは想もよらぬほごである。

この區域でのカナス河の最大支流はアク・ウリグン河で、水は乳白色を帯びてゐる。この支流は、イグナートフ氏に據れば、流速も水量も共にカナス河に譲らぬ程である。このことである。アク・ウリグン河はプファルミンスク雪嶺群より流下してゐるが、その流域は甚だ狹隘で、タブイン・ボクド・オラの宏大な氷河面積の水を集めてゐるカナス河流域に比べると、何分の一か小さく、従つて、水量の點ではカナス河よりも多いとは云へない。

(註) イグナートフ著書一四一―一五頁

下部哈納斯湖は、峻しく傾斜せる斜面に落葉松を密生せしめたる二つの山脈の間を北東より南へ伸びてゐる。湖岸部の山岳は特に峻しく、そこには巖が湖面に屹立してゐる。湖水はやゝ混濁してゐるが、トルコ玉に似た色を呈してゐる。湖水の流出口附近はさほゞ深くはなく、湖岸より遠くまでその湖底は透けて見えるが、湖底に深い溝のあるやうな所は勿論、不透明である(註一)。イグナートフ氏の測定による湖長は一二露里を超えず(註二)、湖幅は約二露里に及んでゐる。湖面の水位は南端で四、五二〇呎を示す(註三)。湖より排出する河の出口には高い段丘があり、その断崖の上には石ミ白色粘土から成る層が露はれてゐる。また、白色粘土層のみの所もある。湖の下方には西側より丘陵状低地が伸び、その窪地は水を湛えてゐる。これは總て氷河によつて形成されたものであらうが、もし、さうなれば、湖邊の段丘は氷砕石よりなつてゐるであらう(註四)。阿爾泰諸爾山脈では、こゝが舊氷河の分布した最低限界に當つてゐる。

カナス河(或る者は既にこの邊から博爾集河とも呼ぶ)は激流になつて湖より落ち、その河幅は三〇―サージヤ

ン(註五)に達し、立木のある高い段丘の間を流れ、四〇露里先でコム河と合する。

(註一) サポーデニコフ著書二〇四頁

(註二) 同著書一七頁

(註三) この數字は次の測定の平均である。

ミロシチュンコ……………四、三七一呎

マトソフスキー……………四、六〇〇”

サポーデニコフ……………四、五九二”

平均……………四、五二二呎

(註四) サポーデニコフ著書二〇五頁

(註五) サポーデニコフ著書二〇四頁

(註六) サポーデニコフ著書三三五頁

コム河 當河流域はカナス河と略同様の面積を有し、水量は寧ろカナス河よりも多い様である(註一)。

サポーデニコフ教授はタルクルイ峠(九、六六五呎)を下つて、この河へ出てゐる(註二)。この峠より下る同名のタルクルイ川は各所より溪流を受け入れて、速に水量を増し、河谷に注ぐ。河谷は、浸蝕を蒙れる氷河床に特有な形態を具へ、現今では、鮮かに緑草の生育せる沼地になつてゐる。八、〇〇〇呎の標高には、最初の紅松が現はれ

そこからは既に、針葉樹の密林に覆はれたコム河の幽谷が見え、その密林の上には雪を戴く主脈の尅大な山峯が突出してゐる。

コム河はウニルフネエ・コブドスコエ・オゼロ（上科布多湖）に通ずるコム峠より流下し、タルクルイ川のコム河ミ合する箇所は甚しく急傾斜してゐて、そこには多数の瀑布があり、而も、後者は針葉樹の密生せる岩山を階段狀に落下してゐる。路はこゝで川の左岸に沿ひ、岩山や高い草地になつた峻しい立木のある山腹を通る（註三）。

コム河も階段狀を成してこゝを流下し、瀑布群を形成してゐるが、それとタルクルイ川との會流點の水位は六、一五〇呎を示す。従つて僅か數露里の間に於てタルクルイ川の河床の水位は殆んど一、八五〇呎も低下する。尙、コム河谷も、又、同河の第三の無名の源流（主脈のコム峠のやゝ南に發源し、タルクルイ河口のやゝ下方で本流に注ぐ）の落差も極めて大きいらしい。

（註一） サボーヂニコフ著書二〇五頁

（註二） サボーヂニコフ著書一九九頁

（註三） サボーヂニコフ著書二〇〇頁

以上の三源流を併せた後のコム河は激流を成して流れ、水量は豊富となり、徒渉に足る淺瀬を發見することは困難である。この河谷は混森林に蔽はれてゐて、たゞ稀に乾燥した無林の段丘が所々にあるのみである。

タルクルイ河口より二二露里の所で右側より大きなソム川がコム河に注ぐ。この川は氷河群に發源し、下流で

はステップ性の草の生えた廣い河谷を流れる。ソム河はコム河よりは僅ばかり狭いのみで、又さほゞ深くなく、流れは緩慢で、河底には微粒狀の砂利が敷衍してゐる。

右の河口より九露里下方では右側よりコム河に他の大きなエメゲイト。イ。いふ川が注いでゐる。この川は垂直な岩壁を持つ狭谷を流出し、河口の手前では島を挟んで二つの分流に岐れそゐるが、水量は多く、そのため、サボーヂニコフ氏は橋を架けてそれを渡つた程である。エメゲイト。イ川は極地性矮樺の生えた沼澤質の、高い（七、六五〇呎）臺地（エメゲイト。イ山脈がこれに連亘する）に發源し、河はそれを下つてコム河谷へ出るまでの間、峡谷を通ざる。

エメゲイト。イ河口附近（正確に云へばソム河口より）に於てはコム河は急流を成してゐて、轟然たる音を立てつゝ、岩質の河床を下り、激流はこゝでは既に幅三〇「サージョン」、深さは岩の間の凹所で約七呎を示してゐる。この邊は最も景色の良い所で、サボーヂニコフ氏もコム河谷は概して景勝の地である云つてゐる。尙、この地域の標高は三、九五〇呎を示す。

これより下流のコム河谷は急に廣潤となり、山岳は低夷し、植物被覆の特色も亦變化し、薄暗い針葉樹林は次第に稀薄となり、觀るも心地よい樺や「やまならし」（白楊）の森に交替する。

コム河谷を一〇露里下ると、次に支流サムイルスイン・アウラク川に出會ふ。この川はエメゲイト。イ川と同じく臺地より流出する。更に一〇露里ゆけば、左側よりジクペレン（註一）がコム河に注ぐが、この河はソム河やエメ

グイトイ川よりも小さくて、その河谷はコム河の下流の河谷と同様、全然踏査されてゐない。(註二)

(註一) サボーヂニコフ著書二〇〇頁。添附の地圖には、ジタレン河はサムイルスイン・プラタ河口の對岸に注ぐやうに記されてある。

(註二) サボーヂニコフ教授はこのコム河域に關し次の如く述べてゐる。即ち四〇露里國境地圖に示されたやうな第二のソム河なるものはこゝにはないと。

スムダイルク河 アルチュム河はコム河に合してより、余り高くない、緩傾斜せる山岳の間の、かなり廣い河谷を南流する。この河谷の特に廣い所はチョンクウル界標附近で、横幅は凡そ一〇露里に及び、圓谷を成し、この圓谷の北端ではスムダイルク河がアルチュム河に注いでゐる。

スムダイルク河谷は全く調査されてゐない。余の行程略圖より判ずるに、この河谷は既在地圖にも全然誤つて示されてゐることが判る。

スムダイルク河は、ムス・タグ尖峰の三〇露里北西にある同名の峠(主脈の低夷部にある)より流下し、爾後左側より多数の支流を入れて直西に流れてゐるやうである。これ等の支流の中の主なるものは、ムンケ、トルグイ、テミル・パカの三河がある。これらは巔に述べた如くである。(註一) スムダイルク河はテミル・パカ河口の近くで、トルグン峠より流下するトルグン川に合し、それより南西に轉じ、コム河に平行に流れてゐるが、同河は極く狭い山脈によつて切離されてゐる。水量は地方民の言によれば、コム河の半分に相當する。

アルチュム河は標高約二、一五〇呎を示すチョンクウル界標の圓谷内に於ける直流區域では河幅六〇「サージューン」

に達し、たゞ秋の減水後にはのみその淺瀬を涉りうる。サボーヂニコフ氏は八月十六日に右側の支流カルグタン河口附近の、河が島を形成せる箇所を渡河してゐる。尙、その際には、案内人は最初に駱駝を河岸に直角に本流へ曳き入れて進み、それより流に溯り、淺い所を撰んで漸次右岸へ近づいて行つたが、それでも馬で運んだ荷物は水に浸つたこのこゝである(註二)。

(註一) 一七頁參照

(註二) 同著書一三三頁

カルグタン河に就いては、サボーヂニコフ氏はこれをアルチュム河の一小支流のやうに記し、又、この河の水は附近の廣い耕地の灌溉に利用されてゐるこゝを附記してゐる。

カルグタン河口の數露里下方ではアルチュム河には、セブスケ臺地の岩質高地より流下せる阿克・スウ川が左側より注いでゐる。阿克・スウ河谷も亦殆んど残らず耕地に利用されて居り(註一)、チョンクウル圓谷はクイズイル・タスミいふあまり高くない山脈に圍まれてゐて、アルチュム河はその山脈を貫いてチルヌイ・イルト。イシ河谷へ出る。こゝではアルチュム河はウムルタイ・トベクミいふ廣い三角洲を形成する。この三角洲は淺くて、相當に廣い分流に岐れ、六月にのみ水流を見ることが出来る。六月になるに河水は四方に溢れて、凡そ幅一五露里の平地を被うてしまう。この平地は主に柳楊屬より成る密林になつてゐる、(この柳楊の處女林はアルチュム河の分流中最も大きな下。ルウ・カイト河の流れる界標の東邊に特に密生してゐる)。尙ウムルタイ・トベク三角洲の西部はウムルタ

イ・ト。ベク河の洪瀆地、(同洪瀆地はコム河(註二)々口より全延長を通じて河ミ平行に伸びてゐる)ミ連つてゐる。

(註一) 余の情報もこれと同様である。ブルチュム河下流の略圖を作成した測量家ボグダノフ氏は、「ブルチュム河よりタ、ルト、河までの間の地域にはキズイル・タス山脈より流出せる小河としては、アク・スウ、コストイク(余はこの小河をコスト、タと聴取した)及びテレクト、イの三河があるも、皆、チルヌイ・イルト、イシ河までは達してゐない」と記してゐるが、(アジアに関する地理、岩石及び統計資料抜粋)第二八號所載カステンコ著「ヂンガリア」より。)これは、他のアク・スウといふ河に就いて云はれてゐるのかも知れぬ。

(註二) ボグダノフ氏がブルチュム河の東方に於てはチルヌイ・イルト、イシ河谷へ注ぐアク・スウ小河について述べてゐることは、曩に掲げておいたが、もし、かゝる小河が實際に在るとすれば、それは沙漠に滲入消失してしまはないで、タイズイル・タス山麓丘の南方八—九露里の所にあるトルウ・カイチ分流に注ぐものでなければならぬ。

(三) ガバ河

カバ河はカラ・カバ及びアク・カバの兩河より成るも、キルギース人はこの河が七つの源流、即ち西方より算へてジャマン・カバ、カラ・カバ、アラサン・カバ(以上は合してカラ・カバ河ミなる)並にテミルト、イ・カバ、アク・カバト、ルン・カバ、ナルイン・カバ(以上は合してアク・カバ河ミなる)より成るミ看做してゐる。故にカバ河諸源流の流域は總稱してジツト、イ・カバ(七つのカバの義)ミも呼ばれてゐる。かく第二流ミころの川や流れの複雑な水網よ

りなつたこのカバ河系はカナス湖ミマルカ・クリ湖(註一)ミの中間に介在する全山岳地域を豊富に潤してゐる。

カラ・カバ河は全部露領内、即ち吾々の記述する領域外を流れ、一方アク・カバ河はその全延長に互つてロシア帝國ミ蒙古ミの間の國境を成してゐるが、まだ十分に踏査されてゐない。

サボーヂニコフ教授によれば、「アク・カバ河は白濁せる水を走せてゐる點から見、南阿爾泰山脈のプフタルマ河の河源地帯の反対側にある一大水河に源を發するものミ想定しうる」(註二)ミのこゝである。ミころが、尙ミロシニチニコ氏は、アク・カバ河谷の略圖を作成した一測量師の言よりして、「この河の河源の周圍の山峰にのみ恒雪があつて、アク・カバ河の深い峡谷には雪も水もない。河水の綠色に濁つてゐるのは、春の出水に浸つた場所にある綠色粘土や微粒狀白色石英砂層(恐らくアク・カバ河流域に分布せる、著しく石英化せる、淡綠色粘土片岩の破壊して出來たものであらう)が浸蝕されるからである」記してゐる(註三)。サボーヂニコフ氏の地圖にはこの河源に一一、一三〇呎、一一、一四五呎ミの二つの標高が記されてゐる。これは恐らくオムスク軍司令部の陸軍測量師の最近の作圖に基いて作成した國境地帯の地圖から轉載したもので、プフタルマ河及び、アク・カバ、ナルイン・カバの兩ガバ河の河源地帯たる山塊の標高であらう。次にアク・カバ河の源流より八露里の所に七、五五〇呎ミ記しあるのは、その河谷の標高であつて、一〇露里先には六、七一〇呎の標高が示されてゐる。これらの二つの數字はアク・カバ河のこの地に於ける河床の勾配の著しい、(一露里當り八四呎)を示すものである。かやうに河床の勾配が大であり、而も、圓礫が夥しいために、河は頗る激流になる譯ではあるが、左支流のトルン・カバ河口

に至れば、そこでイグナートフ氏が徒渉に都合の良い淺瀬を見つけてゐるよりすれば、よほき流勢も衰えてゐるものと見える。

アク・カバ河谷の兩岸に聳えてゐる山岳は、尙、著しい高度を保つてゐるが、その峰頂は既に平くなり、貧弱な草に覆はれる。尙、その斜面にはアルチュム河流域の幽谷（セブスケ高原の山塊によつて、乾燥し切つた南風を遮られてゐる）に見受けられるやうな、豊潤な牧草地の痕もなければ、又、林も稀で、たゞ北方や北西に面した斜面に僅かに樹林があるに過ぎぬ。かくの如くも植物の貧弱なのは一般に準噶爾沙漠の影響を防ぐに足る高山を前に控えてゐないからである。

アク・カバ河はナルイン・カバ（註四）に合流する。後者は、カナス河のやうに甚しく荒涼たる峡谷からではないが、兎に角、狭い林質の峡谷（標高四、四七五呎（註五））より流出する。この合流点よりサポードニコフ教授の渡河した所までの一四露里の間では、河はステップ性の草の生えた廣い谷を流れ、それに沿うて落葉松の廣い林地が延びてゐる。サポードニコフ教授によれば、この河は水量が多くて、河幅は二〇「サージーン」であるとのことである（註六）。尙、それより二〇露里下方の標高三、二五〇呎を示す個所では、アク・カバ河はカラ・カバ河と合流し、それより南東の方向を取り、國境より遠ざかつて支那領に流入する。カバ河は山岳を出てから五〇露里以上平原を流れその河床には落葉松の廣い森林帯が延びてゐる。一八八三年（註七）にカバ河を訪れたベフツォフ氏は、「この河は下流に於ては山岳の出口より分流となり、山を遠ざかるにつれて分流の数を増し、遂に八條の分流を派出してゐる

が、それにも拘らず河の淺瀬を渡ることは困難で、春でさへ徒渉は全々可能である」（註八）と述べてゐる。

（註一） イグナートフ著書一九頁

（註二） 同著書三三七頁

（註三） コステンコ著書参考「一八八二年度の阿爾泰に於ける大體観測作業」二二一―二三頁

（註四） イグナートフ氏はナルイン・カバと記してゐる。

（註五） ミロシニチュンコ氏はこの地點を低く見積り、三、七四七呎としてゐる。

（註六） 同著書二〇五頁

（註七） コステンコ著書五九頁

（註八） ザイサン市で蒐集せる余の資料もこれに一致する。

（四） その他のチョルヌイ・イルトウイシ河支流

ベレセク河 チョルヌイ・イルトウイシ河の次の支流であるベレセク河は叙上の諸河、即ち、クラン、アルチュム及びカバの三河に比べて可成り小さい河であるが、夏の上半にはその水量は尠からず増加する。

ベレセク河は高峻なウシ・クルマンカル山脈（註一）より流下せる幾つかの川より成り、これ等の川は右の山脈の南麓に横はるアク・ジャイラウ河谷（四、四三五呎）を過ぎ、同河谷の南縁をなすカラ・チクウ山脈に突當り、狭い峡谷に流入し、それを貫流して一河床に集流する。ベレセク河は、沙漠になつてゐる平野に出る前に、カプイル・

タス(註二)と稱する狭谷を通る。この狭谷の出口より八露里ゆけば、既に高い砂丘が現はれるが、その砂丘は、チルヌイ・イルト。イシの河床に至るまで、河邊に連続して伸び、ベレセク河はこの砂海の中を流れてゐる。尙その洪氾地には灌木が密生し、又豊潤な草が繁茂してゐて、爽快な感を與へてゐるが、夏には蚊その他の昆蟲が多くて住むには適せぬ。下流地方になるに水量を減するが、然し河床は泥よりなり、「サージエン」の長さの竿を軽く突刺しても竿頭まで這入つてしまふほどに深いから、淺瀬でも涉ることは出来ない。

(註一) 蒙古語(烏梁海語)ではグルバン・ハラ Gurbant-hara と發音する

(註二) ミロシニチンコ著「一八八二年『爾泰に於ける天體観測』一八一—二四頁

アルカベク河 チルヌイ・イルト。イシ河の次の右支流たるアルカベク河は全延長を通じて國境河川に成つてゐる。露領内では、前記ウシ・クルマンカル臺地の山岳や、阿克・ジャイラウ河谷よりその水を集めてゐる。アルカベク河は南方より阿克・ジャイラウ河谷を制限せる山脈を切開いて平野に出で、それより露支兩國の境界を成る。ロシア側の河谷は殆んど總て耕されてゐて、河水をそれに曳いた灌漑路が多く、それがため、河が夏の初にチルヌイ・イルト。イシ河まで賣らす水量は激減し、秋には全く涸渇するほどである。ペフツォフ氏によれば、河水は秋になるに、山岳を出た所より最初の二〇露里の間は流れるが、その先は所々に窪地に水溜があるのみで、しかも、それには魚類が棲むほどのことである。これはアルカベク河が單に地表水のみでなく、地下水をも有することを證するもので、それは水溜の水は常に新しく清められてゐるのでも判る。河の左岸は沙漠で、廣大な面積にはカドルイ・クム沙漠が續く。

ジェルト。イ及び庫伊爾齊斯河 次にチルヌイ・イルト。イシ河の左支流たるジェルト。イ及び庫伊爾齊斯河の記述に移らう。

ジェルト。イ河 當河に就いては、殆んど何等の情報もない。サボーヂニコフ教授はジェルト。イ河の河源を推定されるるジャマト。イ河の河源地帯及び同河の右支流たるハラウン河附近の山峰を訪れ、又、同河の下流の河谷(註一)をも展望してゐるが、この河の状況を明らかにしてゐない。このジャマト。イ河が、果してジェルト。イ河の河源であるのか、それともジェルト。イ河には別に源流があつて、ジャマト。イ河は、たゞその著大な右支流であるを看做すべきかは今の所明らかでない。ポターニン氏の情報より判ずれば(註二)、主流となる河はジェルト。イではなくて、主脈を越えるコルムト。イ峠より下る同名の河であつて、右方よりジャマト。イ河を受入れてゐるジェルト。イ河の方はたゞこのコルムト。イ河の一右支流たるに過ぎぬを看做すの外はない。もし、さうなれば、この河域に於ける山岳地方の地形圖に著しい變更を加へねばならぬことになる。サボーヂニコフ教授はジャマト。イ河の上流地方について次のやうに述べてゐる(註三)。「ジャマト。イ河の河源地帯たる科布多河ミチルヌイ・イルト。イシ河の二流域の中間に在る分水嶺は七、六八五呎の標高を示し、ダイン・ゴル湖面よりも三、二五呎高く隆起し、これよりジャマト。イ河の二つの源流が發してゐる。この二源流の合した後のジャマト。イ河は開けた河谷を尙一五露里東流し(註四)、それより轉流して姿を變すがこの河區に於てはジャマト。イ河は右方より二つの支流を受け入れてゐる。その内の、最初

の支流は相當に大きくて、途中で幾つかの小さい湖を貫通する。尙、ジャマト。イ河のこの河區に關する情報は明らかでない。次にハラウン川の記事に移るが、これも詳しくは知られてゐない。サボーデニコフ教授の出た箇所ハラウン川の幅は四—五「サージョン」を示してゐる。ハラウン河の峡谷は狭く、深いため、水流は非常に蛇行して居り、岩石に富む河岸を右に寄つたり、左に寄つたりして、路は僅に一三露里の間に二十五回以上も河を渡らねばならぬ。たゞ一ヶ所だけ、水が馬の鞍にまで達する位、淺い淺瀬があるのみである。サボーデニコフ氏の踏査したこの川の終端は療養泉として名高いアラサン界標になつてゐる。それより先の路は、ハラウン川が巖の裂目に入つて居るため、アラサン附近の一高所より見たところによれば、(註五)到底通行出来得ないらしい。以上は吾々のジルト。イ河に關して知る總てである。

(註一) 同著書三二八頁。同書二二八頁には「山路は狭谷を過ぎると、チルヌイ。イルト。イシ河に近づくと、やはり巖塊の間を通る。ジルト。イ河の左支流の河口は巖の後ろからは見えない」とある。が、この状態では河谷が眺められないことはあるまい。

(註二) 同著書、第一巻、六五頁

(註三) 同著書、一八八—一九〇頁

(註四) サボーデニコフ教授の地圖には、この河の方向は東方ではなくて南東になつてゐる。

(註五) 同著書、一六九頁

クウ・イルト。イシ河(クウ・イルツイス又はホ・エビン)當河は、ゴルボイ・イルト。イシ、又はサボーデニコフ氏の所謂、シイニイ・イルト。イシ(青いイルト。イシ)河にも相當し、主脈に於て三つの源流になつて始まり、一部は泉

水を集め、一部は小さな雪原の水を集めて、かなり廣闊な谷を流れ、略々標高八、三〇〇呎の地點で會流する。會流した河は最初の六露里の間は曲流するが、緩かで廣い、一部沿澤質の平坦な、舊氷河湖の湖底であつた河谷を流れてゐる。庫伊爾齊斯河はこの地域では右側よりこの谷に急速に流入せるチャガン・ダラス及びチャガン・コルの二つの支流を入れる。前者は、或る時代に疑もなく氷河底になつてゐたこの圓谷を過ぎて居る。クウ・イルト。イシはこれ等の支流を合して水量を増し、前記湖の天然の堤防をなしてゐる氷砕石丘を貫いて、著しく狭まつた河谷に入り、そこで、やうやく、僅ばかりの水を持つサイリクム河を入れてゐる。尙、右の二つの河に挟まれた突角地帯(七、五四五呎)には氷河のために削刻せられた平滑な紅黄色の巖が衝立つてゐる(註一)。

クウ・イルト。イシ河谷はサイリクム河口以下では林地となり、草地は殆んど消えてゐる。氷砕石の遺物は、こゝでは到る處に見受けられ、左支流のクシト。ルダン川、即、マーロイト。ルダン川(小ト。ルダン)(註二)の河口に至るまでは河に沿ふて續く。尙、それより一〇露里先でポリシ。イト。ルダン(大ト。ルダン)河がクウ・イルト。イシ河に注ぎ、雪の斑點を着けた山岳がその河谷を壓してゐる。爾後、河は一〇「サージョン」の幅に廣がり、哨音を立て、飛沫を擧げながら、人間の近寄れぬ狭谷に流入ある。ゴルボイ・イルト。イシ河の河谷は、この邊では、それに沿ふ山岳よりも三、〇〇〇呎以上低下して居り、深い溝のやうな形をしてゐる。

(註一) サボーデニコフ著書一八四頁

(註二) サボーデニコフ著書一八三頁。地圖も同様である。然し、その前の一八二頁には、「二露里下方でト。ルダン河(ポリシ。ヤ

トルゲン)が注いでゐる。その河口は氷砕石丘に圍まれて林になつてゐる」とある。同書三三〇頁に於てサボーヂニコフ氏はクシ・トルゲン(又はキチクト・トルゲン)河の名稱をジュニシケ・トルゲンとしてゐる。

ゴルボイ・イルト・イシ河はボリシ・イト・トルゲン(ウリクン・トルゲン)河口より一七——二〇露里の所で同河の右支流たるクシ・クウ・イルト・イシ河(即ちマールイ・ゴルボイ・イルト・イシ)と合する。サボーヂニコフ教授の行程も亦、ゴルボイ・イルト・イシ河の河源に及んでゐて、氏はゴルボイ・イルト・イシ河流域と同河の著大な右支流であるカイルト・イシ河流域とを分割せる主脈の一支脈を越える高い峠(二〇、四六五呎)を降つて、ゴルボイ・イルト・イシ河へ出てゐる。右の支脈はこゝでは灰色の石灰粘土質片岩より成つてゐる。

クシ・クウ・イルト・イシには二つの支流があり、その河源には岩質の秃山群が見える。この山群を越へる峠(八、一三五呎)の下には、その峠より發した一つの小川が廣い沼澤質の河谷を靜に流れ、二ヶ所だけは高い氷砕石丘に取圍まれて居り、それより數露里下方では阿爾泰地方での曲型的な、樹木に富んだ峡谷に入り、クウ・イルト・イシの狭谷と同様の、頗る近づき難い狭谷に入るまでその狭谷を走る。爾後、川はこの狭谷を出てクウ・イルト・イシに流入する。

ゴルボイ・イルト・イシはクシ・クウ・イルト・イシ河口より二〇露里(サボーヂニコフ氏は誤つて四〇露里と記入してゐる)の所で廣いコク・ト・ゴイ(又はコク・ト・ガイ?)河谷に入り、そこで右側よりウリクン・カイルト・イ(即ちボリシ・イ・カイルト・イ)川を受け入れる。

このウリクン・カイルト・イ川は恒雪線よりも遙に高く聳へた非常に高い主脈に發源するも、その河源には氷河群はない。ウリクン・カイルト・イ川は廣い河谷を通り、河源より一〇露里目の所で左側よりマンガダイチャ川を受け入れる。後者は多くの瀑布に富み、段丘に沿つて薄暗い峡谷を流出し、ウリクン・カイルト・イ川と合する。この合流點は標高六、六八〇呎の位置に在る(註一)。カイルト・イ川はこゝより、河幅七——八「サージョン」の透明な流れになつて、左側の林に富む山腹と右側の殆んど無林の山腹との間を流れ、その途中に小さな沼を形成してゐる。川はマンガダイチャ河口より二〇露里の所で南折し、ゴルボイ・イルト・イシに注ぐまで、その方向を變へない。そして右の屈折部より一五露里の所で左側よりクシ・カイルト・イ(即ちマールヤ・カイルト・イ)を受け入れる、然し、この川はボリシ・ヤ・カイルト・イ川よりも水量が多く、雪の斑點を着けた秃山群に取圍まれた、廣い河谷を流れてゐる。カイルト・イはこの支流と合して水量を増し、漸次河幅を擴大する。尙、それと同時に被覆植物の特色も變化して、草地はステップに遷移し、廣い混生林を伴つてゐる。この河は、この最後の河區では幾回もなく分流出し、最後に一河床に集流するが、そこでは河床は相當な深度に(註二)、二〇「サージョン」の幅を示してゐるクウ・イルト・イシ河谷へ開いた窪地はウリクン・カイルト・イ河谷のこの擴大部の自然的延長であるが、河はこの窪地の方へ向はないで、狭い近寄り難い狭谷中を南流し、そこで圓礫の間を騒然と流れてゐる。因みに、カイルト・イの全長は約九〇露里と算定されてゐる。

上記の如く兩河の會流せるコク・ト・ゴイ河谷は標高三、六〇〇呎にあり、そこには、コク・ト・ゴイ川よりふかれた

灌漑路の水で潤された耕地や草地在し、而も、その草地は、クウ・イルト、イシ河の近くでは「すげ」屬や蘆荻の生えた淡緑色の泥濘質砂地に變つてゐる。クウ・イルト、イシ河はカイルト、イ河口に近づくに、幅約二五「サージ」の平穩な直流となるが、深さは可成り大きく、サボーヂニコフ教授は八月にその淺瀬を渡つた際、荷物の一部を水に濡したほきであつた(註三)。クウ・イルト、イシ河はカイルト、イ河を入れて俄に南折し、轉て、あまり高くない岩質山脈に圍まれた立寄り難い狭谷に流入し、それを過ぎるに、暫く裸の丘崗の間を走つて、遂に西の方向を取り、殆んそ沙漠に近いステップに入り、チルヌイ・イルト、イシ河に合するまで、四〇露里の間それを流下する。

以上でチルヌイ・イルト、イシ河流域の諸河川に關する記述を終り、次にその續きの阿爾泰諾爾山脈の南西斜面より下る烏倫古河の説明に移らう。

(註一) サボーヂニコフ著書一七八頁

(註二) この資料は八月のものであり、この頃阿爾泰地方一帯には急速な減水が認められる。

(註三) 同著書二二三頁

第三節 烏倫古河

烏倫古河の流域は非常に變化に富み、面積も廣く、殊にその山岳性の密林地帯はステップ性及び沙漠性地帯の間地帯として博物學者達に深い興味を興へてゐるが、それにも拘らず、この地方は西部蒙古の中で最も調査の行届

いてゐない地方として残されてゐる。今、次にこの河の各流域に就いて判明せる點を述べて見よう。

ブルゲン河 ウルング河の上流はブルゲン(又はアウルゲン)河と呼ばれ、このブルゲン河は阿爾泰諾爾山脈の一支部に發源し、支脈は遠く恒雪線を越へ、臣吉里河ミブルゲン河との間の廣い地域に伸び、更に各支脈に分裂し低夷して南東に一六〇露里進み、高峻なブルゲン・ホシユ山となつて終つてゐる。而してこのブルゲン・ホシユ山を流過してブルゲン河は西に急轉する。尙、阿爾泰諾爾主脈は「かやうに偉大な支脈をば放射線狀に派生しつゝ、」(註一) 徐々に低下し、恒雪を戴く近接し難い岩質山塊群を、緩傾斜せる而も余り深くない鞍部によつて連續せられた連峯を對立せしめて居り、たゞ遙に南方のツァガン・オボグンタ及びタイフン・フムスト。イ山群中の連峯のみ、再び雄俊な姿を見せてゐるに過ぎない。然し、右の連峯中最も登り易いウラン・ダバ峠の標高ですら一〇、五〇〇呎に達するから、この對照は主脈の實際の高度を可成り低く見せてゐるこゝが分る。この兩山脈の間に介在する谷は、その河源に於ては頗る狭く、而も一〇〇露里近くの延長に亘つても、やはり、同様であるが、その先になるに、河谷は開けて、遂にバイン・ゴル河口になるに一〇露里ほどの幅のステップに遷移する。

ブルゲン河は二つの源流より成り、その北にある川はタルグイル・ゴル云ひ、これは大きくてコク・ツン・コク秃山(註二)の雪原より下り、西にある川はハラヌリン・ゴルと呼ばれ、これは氷砕石湖たるハラ・ヌル湖の排出河とも成つてゐる。タルグイル・ゴル河は延長一五露里の間に於て多くの支流を受け入れて、水量を増し、ハラヌリン・ゴルよりも急流となつて、同河との會流點に近づいて居り、地方人はタルグイル・ゴルよりも、このハラヌリン・ゴル

の方をブルゲン河の源流と看做してゐる。

ハラ・ヌル湖は五露里の湖周を有し、深く、水は非常に澄み、湖底の大きな小石さて見える。この湖は雪を戴くハラヌリン・モンクウ秃山より谷底へ匍下る水河によつて灌養され、且、周圍に丘陵を繞らしてゐる。尙、この丘陵は明らかに古代の水河の跡であつたらしく、現在では漂積層や、それを覆ふ密林で隠蔽されてゐる。

右二源流の合流點以下をブルゲン河と稱し、河は狭い河谷を流れてゐるが、この河谷はトルダグン・ゴル河口以下では右岸に針葉樹の密林を有し、左岸はステップで、後者の内部には殆んど草木のない裸地もある。尙、ブルゲン河に注ぐトルダグン・ゴルは、明らかに叙上の二源流の合流點より數露里南方に在り、本流に比べて二倍の水量を有しており、ハラヌリン・ゴルと同じく、トルダグン・ゴルイン・ツァスイ雪嶺(註三)より下る水河に發源してゐる。

ブルゲン河はトルダグン・ゴル河口の下方では右岸の山岳に甚しく壓迫せられ、同山岳より下る水は一つの河床に纏らずして、小さい川となつて別々にブルゲン河に注いでゐるが、それらの川の水を合するに河は著しく水量を増す。これに反し、左岸には阿爾泰諸嶺の發達した前山が伸びてゐて、それより廣く開いた流域の排水路をなす幾多の頗る大きな水流がこの河に注いでゐる。而して、それらの水流の主なるものには、オルドン・ヌル(同名のオンドル・ヌル峠より流下する)、エルト。(ヨルト。イ又はジュルト。イも云ひ、サボーヂニコフ教授はウラン・ダバン峠(註四)よりこの河谷へ下つてゐる)、フチムルト。イ(ツァガン・オボグン山の氷河より流下するし、而も同ツァガンオボクン山(註五)の北方にあるドロシ・ヌル峠の方へ向つて流れる)、トルダグン(註六)等がある。これ等の諸河

川の錯綜した河谷には立派な牧場が多く散在し、又針葉樹林もあり、中には地方人間に神聖視されてゐる林區もある。

ブルゲン河は右方よりイェルトウイ河口に近づき、廣い水の透明な流れになつて落葉松の生えた河岸を流れる(註七)。この河谷の標高は六、八五〇呎を示し、河谷はこゝでは幾分か擴大し、それと共に最初の蒙古人の耕地が現はれ、落葉松林の間には柳や錦鶏兒の叢も混つてゐる。その後急に、草地性の植物は姿を消して、ステップ性のものに變り、それが河岸の樹林の下蔭にまでも入り込んで生育してゐる。

(註一) 「ロシア地理協會時報」一九三〇年發行第三十六輯所載ラドイギン著「ウルンゲ河上流地方の旅」七四頁

(註二) コク・ツンコタ秃山は阿爾泰諸嶺山脈か上記の支脈を派し、二つに分岐せるところの圖所に屹立する。

(註三) ラドイギン著書七四―七五頁

(註四) 同著書一一四頁

(註五) ラドイギン氏はこの峠をブルゲン河谷へ向けて降りた。

(註六) ボターニン氏(同著第一卷二二三頁)に據れば、この川はその流出する湖名を探つてセンターリと記されて居り、又サボーヂ

ニコフ氏の地圖には湖名はツァンタリ、河名はトルダグンと記されてゐる。

(註七) サボーヂニコフ著書一一四頁

ブルゲン河谷はフチムルト。イ河床の幾らか上方に於ては約三露里幅のを有し、この河谷はその右支流の餘り大きくないナルイン・サラ川に合するまで一〇露里の間、右に同様の谷幅を保ち、それからは、再び狭くなり、右の川

の河口より二三露里目の所で峡谷に變り、そこで河流の特色は激變して激流となり、河床を埋める圓礫の間に噴々
と飛沫を擧げながら流れてゐる。こゝでの山道は樹木の密生する河岸側を通り、時として、絶壁に上つたり、
又花崗岩や片岩の裸巖の間を進んでゐる(註一)。この地域の林は、既に専らダウリア樺(Кавказская Береза) 白楊
及び柳楊等の落葉樹、オブレヴォハ(Hippophaë rhamnoides); Ofoenaster; 忍冬^{ハナハコ}、錦雞兒^{ハナハコ}「すべり」Кир-
жевник; Ribes (Grossularia)、スモロディナ(露名。「すべり」の一種)、その他の雜木林より成つてゐる。河は
峡谷を四〇露里流れて、其の間多くの支流を收める。中にも特記すべきものに右支流のイヘ・チョムイルト。イ、ドゥン
ド・チョムイルト。イ、デンド。イルト。イ、トシユルト。イ、チョヒルチャルト。イ及びアル・ツォ等があり、左支流には
ナルイン及びオブル・ツォがある。かやうに支流の多いにもかゝらず、秋にはブルゲン河の水は極く少く、稀に淺
瀬があつても、その水深は馬の鞍に達する程度のものである。然し、春になつて、五月中頃より山の雪が解け始め
るに、河水は非常に増加するらしく、又漂着した樹木から見ても判る如く、峡谷の隅から隅まで水に浸されてゐる
こゝは珍らしくないらしい。尙、この時には河邊の通行は杜絶し、蒙古人は山の方を通行する。

ブルゲン河は前記のバイン・ゴル川と合する個所より五露里手前で峡谷より廣潤地へ出る。然し、ステップはたゞ
左岸に沿ふて伸びるのみで、右岸には依然として岸近く山脈の前山が迫つて續いてゐる。ステップの土壤は粘土質
で、岩屑や砂礫を混へた廣潤地をも抱有し、所によつては砂地の所も有り、農耕にはあまり適してゐないが、灌溉
を行へば、そこでも耕作を行ひうるやうである。このステップに於てはブルゲン河は分流化して、ポブラの林を流過

してゐる。

ブルゲン河はバイン・ゴル河口より八露里下方で左側より流入する大きい烏里邪蘇臺河と合する。後者はツァガン
・オボゲン(又はグルバン・ツァスト・ボグド)山脈の南の主脈に發源してゐるが、その上流地方には雪はない。又こ
の河は狭い谷を過ぎて、地衣や蘆荻の夥しく生へてゐるバインゴル・ステップへ出で、そこで河水の大部分は灌溉路
に誘導せしめられてゐる。ブルゲン河は烏里邪蘇臺河を入れてから、暫くは南東に流れ(註二)、峻峻なブルゲン
・ホシユ山を大迂回し、それより西の方向を取る。ブルゲン河の流れる山岳地帯は比較的高いが、甚しく沙漠性を帯
び、河谷にさへ草地は尠く、こゝではポブラの林のあるべき所に、たゞ柳楊屬やジンギル(Джунгиль——キル
ギース語?; Hal imodendron argenteum. (註三))のみが生えてゐる。ブルゲン・ホシユ山脈より八五露里の所
でブルゲン河はウルダン河の第二の源流と看做す可き、水量の多い(註四)、右支流臣吉利河と合する。チンギリ
河流域はそのサボーヂニコフ教授の踏査地域内のみ吾々に判明してゐる。尙、氏は東より西へ向けてこの河を横断
したが、ツァガン・ゴル河流域と本流の上流に就いては觸れてゐない。

(註一) ラドアイギン著七七頁

(註二) 吾々の地圖には此處にブルゲン河左支流デルズイルイン・ゴルが示されてゐるが、ラドアイギン氏はこの支流に就いては述べてゐない。

(註三) ブルヂェワリスキイ著「ザイサンよりバミを越へて西藏及びジルト。イ河上流地方へ」二三三頁

(註四) ブルヂェワリスキイ著書二三二頁

チンギリ河 サボーヂニコフ教授はチンギリ河々源に雪のない山峰を見受けたこと述べてゐる(註一)が、總ての現存地圖や、氏の著書に添附の地圖にはこれ等の源流はブルゲン河の源流に接近して示されてゐて、そこには、既に記したやうに、萬年雪を戴く山峰ばかりでなく、氷河もあるやうに示されてゐる。サボーヂニコフ教授の調査資料よりしても、チンギリ河谷の右側には、恒雪線外に聳ゆる山岳が河に沿つて續いてゐること明かであり、而も同氏の記録によれば(註二)、トルゲン河源には雪の斑點を着けた山岳が見え、その中の南方のものからはチンギリ河の源流の一つたるアルチャトイに出る一つの峠路があることになつてゐる。従つてこれ等の資料よりして、叙上のサボーヂニコフ教授の説は誤りであり、チンギリ河谷の上部は恒雪線に達する山中に位すること、チンギリ河には幾つかの源流のあること及びその中の一源流が(恐らく最南部の河を指すであらう)、クウ・イルトイ・シ河谷へ通ずる峠より流下してゐることは明らかである。尙、この外にチンギリ河のやはり西方には一つの源流の有ること知られてゐる。即ち、この源流は高いサルイ・ドリ山脈中に在つてチャンカン川に云はれてゐるが、ジャンガイヌ・アガチ峠(九、九七五呎)が一方よりサルイ・ドリ山脈を越えて續いて居り、クウ・イルトイ河の支流トルゲン河(小ト。ルゲン?)が同山脈より流下してゐる一點に留意するならば、ポターニン氏(註三)の云ふサルイ、ゲル山脈はタルグイル・ゴルの源流地帯の主脈に隆起せる山群で、蒙古人間にコク・ツンコクミして知られた山群を指してゐるものとも考へられる。もしさうすれば、チャンカン川の河源をかなり詳細に突止めることができる。ポターニン氏によれば、チャンカン川はチンギリ河の一大支流と看られて居り、このことよりして、チンギリ河はたゞハラマリン・

モンク。雪嶺に發源するものでないとしても、それよりやゝ低いトルゲン・ゴルイン・ツァスウ山峰に發源せる、主要河系の第三支流に當つてゐるものと斷ぜざるを得ない。

チンギリ河はその途中に於て多くの支流を合してゐる。これは、サボーヂニコフ教授の言「サツイン・ゴル河口より源流より約五〇——六〇露里の所での河幅は二〇——二五「サージョン」に達し、深度も著しく大きい」(註四)によつても自ら明らかである。この區域に於ける河面の水位は四、八五五呎を示し(註五)、河谷は廣く開け、ステップ性の植物が生育してゐる。サボーヂニコフ教授はドルリチ川の河谷を経てサツイン・ゴルの下流に於て、この河谷へ出てゐる。氏のドルリチ河谷へ下つた峠は標高八、二八五呎、チンギリ河谷よりの比高三、四三〇呎に在つて、その峠路は分水界の山嶺より河床に向つて真直に一〇露里の間延びて居る。尙、この本流とその左支流のベルト・ケム河(バガ・チンギリ?)との中間に介在する分水嶺の西斜面は著しく急峻斜してゐて、その壯麗な様は形容の言葉もない程である。かやうに急峻なものにもかゝらず、花崗岩と雲母片岩とより成るこの分水嶺は、一見、單調な外貌を呈し、阿爾泰地方に特有の、所謂、ミャコトイ(МЯКОТЭЙ)即ち土壤に覆はれた斜面(ミ)になつてゐる。林はこの山にまでは及んでゐないが、その河谷や谷に在りては密林を成して居り、初めのほゞは、殆んど、皆落葉松林が主占し、それに亞いで主に「たうひ」(蝦夷松)が生育し、尙、その下方にはポプラ(即ち「やまならし」)、樺及び柳楊屬が繁茂してゐる。これらの樹木は尙、コルム・ベリテイルミ呼ぶステップにまで生え下つて、チンギリ河床の各所を縁取つてゐる。

チンギリ河谷の西縁をなす山岳も、やはり、左岸の山岳と同様に片岩類より成り、サボーチニコフ教授は標高約五、八八〇呎の鞍部に據つてこの山岳を越えてゐる。

サツイン・ゴル河口の下方に於ては、兩岸の山岳は互に接近し、たゞチンギリ河の激流になつて流れてゐる山峽のみが自由に通過しうるに過ぎない。この山峽を過ぎれば、チンギリ河は上記のベルト・テム河と合流し、その合流點の少し下方で右側よりチャンカン河を受け入れ(註六)、更にチンギリ河口の手前でツァガン・ゴル河を受け入れる。尙、これらの支流、特にその内の最も大きな支流ツァガン・ゴルに關する調査資料は甚だ貧弱である。

(註一) 同著書一一八頁

(註二) 同著書一八二頁

(註三) 同著第一卷六八頁

(註四) 同著書二二〇頁

(註五) 同著書四〇七頁

(註六) この河を上流のチャンカン川と混同しない様注意されたい。

ベルト・テム河 當河は、サボーチニコフ氏の地圖によれば、トルダグ・ゴルイン・ツァスイ禿山に源を發し、二五露里流下して、廣いステップ性盆地(そこには幾つかの源流が集つてゐる)に入るやうになつてゐる。尙、このサボーチニコフ氏の地圖は同氏の説は(註一)、異つてゐる。もし、標高の測定が正しいとすれば、右の盆地は九、〇七〇呎(註二)の高い標高を有し、従つて、盆地を圍繞せる高い山岳は比較的高くなくなり、山岳の各峰に於ける

山岳の盆地に對する比高は二四〇—四五〇呎なる。而してかやうに盆地が大い高度を持つてゐることを云ふことは、ベルト・テム河の上流地方一帯に頗る懸かな流れの在ることを想像せしめるが、盆地の下方の河流は想像と異なり、樹林と花崗岩塊のある峽谷に流入する河の如きは激流をなしてゐる。これは次の記事よりしても裏書される。即ち、七露里下流でベルト・テム河に注ぐ、ジャンドルイタ川の水準面はその河口より四露里の所で、僅に七、二三五呎の水位を示すに過ぎず、これはベルト・テム河床が峽谷に於て一露里當り二五〇呎以上の勾配を有すること、言ひ換へれば、河を激流たらしむるに足るだけの大きさを持つてゐることを示してゐるものである。

ベルト・テム河はその下流地方で、サボーチニコフ教授がバガ・チンギリと同一視してゐるウセン・ゴル川と合流する(註三)。この川はベルト・テム河谷へ出る時に當る、標高九、五〇〇呎(註四)の臺地に發源し、臺地は貯水池や沼澤に覆はれ、その中には花崗岩礫が夥しく散在してゐる。尙、ウセン・ゴル河谷は深くなりながら、南西に遠ざかつて居り、そこに薄闇い針葉樹林を形成してゐる。ベルト・テム及びチンギリ兩河の合流點はサボーチニコフ教授の地圖には單に想像的に記入されてある。

(註一) 同著書一一七頁

(註二) 同著書四〇七頁

(註三) 同著書一一六頁

(註四) サボーチニコフ教授(同著書四〇七頁)によればこの臺地の一點點は絶對高度九、五一五呎を示してゐる。

サボーチニコフ教授はチャンカン河々谷を遠くより眺めながら、その河の幾つかの支流を横切つてゐるが、その

支流の内の二つはイリズイト・ブラク及びホロ・シ・ロミ呼ばれてゐる。サボーデニコフ教授はホロ・シ・ロ河が約二「アルシン」の細流にして、その頃（六月三十日）既に枯死せる蓬や塵埃の多いステップ性盆地を流れてゐる所に於てホ・ロシ・ロ河に出てゐるが、その地点の標高は約四、七九〇呎に低下してゐたこのことである。

最後に、ツァガン・ゴル河に就いてあるが、サボーデニコフ教授はこの河の一流流ヌゴン・ヌル（ノゴンヌリン・ゴル？）といふ川のみを正しく決定してゐる。この川はブルゲン河の右側（八、八三〇呎）につて伸びた山脈の南斜面に發源し、途中、一小湖（ノゴン・ヌル）を貫流して居て、サボーデニコフ教授の聴取せるところによると、右の山脈の西斜面にはこの川を連続せるツァホル・ヌル湖群があるこのことである。

チンギリ河を合した後のブルゲン河はウルング河といふ。

ウルング河本流 ウルング河はチュクルタイ山を迂回して後、急に南折する。即ちチンギリ河と同方向を取るも、約一二露里を過ぎると、再び南西に傾き、後、北西に再轉し、南斜面は主に灰色片麻岩、北斜面は黒雲母花崗岩や灰色粘土片岩（註一）より成るこの山岳を通り貫けるまでその方向を變へない。

尙、山脈は、河が直西に流れる方向でも河を平行に續いてゐるが、そこでは、既に山脈は分裂し、短くて狭い山脊や丘陵に變つてゐる。黒礫岩、灰色長石、正長雲母岩及び粘土片岩、粘土片岩より成る最後の岩質隆起部は、同河の河口より八〇露里の所まで伸びて、河を遠ざかる（註二）。

これよりウルング河は本書で取扱ふ領域外に流出するも、余は左に行政上科布多蒙古に屬せしめうる右の河谷に

於けるウルング河の延長部をも略記しておかう（註三）。

平原に流入しつゝ、ウルング河は（深さ約三五〇呎）、土壤を浸蝕し、その下流地方に於て、は同河の河口より七〇——八〇露里の間に主に紅砂粘土や黄色砂質粘土層等の水成層を深い凹所に露出せしめて居り、又、中流地では主に灰色長石・黒礫岩等の母岩露頭もある（註四）。尙、凹所はウルング河の下流地方に於ては一五——二五露里の頗る廣い幅員を占めるも（註五）、上流地方では狭まつてゐて、往々深谷性を示し、たゞ、稀に五——八露里の間を上とする廣さの所があるのみである。然し、この場合には、地方一帯は、既に、急峻さを減じて、緩傾斜する（註六）。かやうに擴大した凹地は主に開けた河谷の方面に見受けられ、そこには所々に激流のあつた痕跡がはつきり現はれてゐる。

ウルング河はこの凹所の中を蛇行し、普通の水量の箇所でも急流や激湍になつて流れ、四〇——六〇「サージ・ン」の河幅を約二〇呎の深度を有す。尙、河はその下流のチンギリ河口に至るまでには支流を合してゐないから、水量は上流のものと同じである。

河水は八月になるに激減し、河中に砂洲が現れるから、秋には、まだかなり深い所があつても、この砂洲を利用して淺瀬を涉ることが出来る。この河は満水して、その深さが相當に増大しても、流れが急であるから、溯航には強力な機關備へた船を利用せねばならず、航行路としては頗る不適當である。而もウルング河沿岸では倒木が大きい列をなして河一面を流れることがあり、舟行には非常な障礙になつて居り、又、河には渦流や淺瀬も多い。ペフ

ツォフ氏は、既に減水時であつたが、八月二十日にウルンダ河に筏を浮べて下り、危く遭難し様としたこゝがあつた。氏はその時の状況を次のやうに書いてゐる。「筏を砂洲に乗上げたこゝは何回もあつたが、その都度無事に離れるこゝを得た。筏は約二〇露里の長さの狭谷に入るまでは順調に進んだが、この狭谷では激流のために遂にそれを操縦するこゝが出来ず、筏は激流に翻弄されて、あちこちを岸に打ち付けられながら流れた。筏が渦流に捲込まれると十分間はそこをぐるぐる舞をしてから岸の巖にぶつつけられ、飛沫浴びながら、河岸に突出する太い枯木にひつかまつたり、或は、三、四回も岩に乗上げたりして、遂には、廣い平坦な岩盤に押上げられてしまつた。筏には川柳の枝が敷いてあつて、その端が四方に突出するたゞめ激突するこゝはなかつたが……」

ウルンダ河床の沿岸には、主にポプラ、白楊、柳などの廣い林地が伸び、それに *Eleagnus*, *Crataegus* 及び雜灌木が混生し、林地附近には喬い地衣 (*Lasiogrostis splendens*) の群叢が伸びて居り、所々に有刺錦鶏兒の叢や樺柳 (露名 *Гребенщик; Jarnarix* sp.)、サクサウール (露名 *Саксаул; Hylomylon ammodendron*) 及びジンギリ (露名 *Жингир; Halimodendron argenteum*) の繁茂する叢もある。尙、水邊を遠ざかつた凹所の縁邊には、これ等のステップ植物は漸減して、土壌は次第に裸地に變り、それには「あつけしやう」 (*Salicornia herbacea*) が現はれ、又、稀に窪地には蓬も生えてゐる。ウルンダ河の下流地方では河岸や湖岸に蘆葦を混生せる草類が、更に柳類その他の灌木とも合して、土人の所謂ト。ガイ (*Tyran*) と稱する廣大な面積を占めてゐる。夏は蚊が多くて、河谷は同河の他の區域に於けると同様、全く住むこゝが出来ぬ。

ウルンダ河は三月に解氷し、チオルスイ・イルト。イシ河の解氷期よりは五日乃至十日ほど早い。

ウルンダ河は幾つかの分流をなつてウリユングウル湖に注ぎ、同時にバガ・ノル湖の方へも側流を派してゐる。然し、バガ・ノル湖は現今では淺くなつてゐて、ウルンダ河の水量の多い時にのみその水を満えるのみである。

(註一) アルヂ、ワリスキイ著書三三頁

(註二) 「帝立ロシア地理協會西部シベリア部記録」一八七九年發行、第一卷所載ペフツォフ著「チンガリヤの通路概観」二八頁

(註三) 現在では行政中心地は科布多よりガヤラ・スメに遷され、支那人が同市に於て行政權を握つてゐる。

(註四) ペフツォフ著書三〇頁

(註五) ペフツォフ著書二七頁

(註六) ペフツォフ著書二八頁

ウリユングウル湖 當湖は長さ四五露里で、湖幅の最も廣い所は三五露里である。東及び南岸は緩傾斜し、葦が密生する。湖は岸より次第に深まり、水汀より五〇「サージョン」の所では五——七呎の深度を示す。湖の北西岸は頗る峻峻であり(註一)、絶えず波浪に洗はれてゐるので、岸邊には淵や穴かできて、そこには陸塊の完全な殘骸が恰も圓柱、圓錐狀の尖峯、頂上の平になつたピラミッド等の形で突出して居る(註二)。湖は非常に深いらしく、附近の土地の勾配から察するに、特に湖の南西部が深いやうである。岸を少し離れた所には高いカラ・アド。イル及びサルプウルイ兩支脈があつて、山脈の終端を成してゐる。

湖の水は淡水であり、ポターニン氏はこの湖水に就いて次のやうに書いてゐる(註三)。「或る旅行家は、ウリユン

ダウル湖は鹹湖だといふが、こはその土地の特殊な状況から推定されたものゝ解すべきである。即ち或る地域では湖岸が長距離に互り軟弱且つ鹽土質にして、淺くなつて居り、その水は飲料に適しないからである」云。この湖の鹹水についてはミロシニチンコ(註四)及びソスノフスキイ(註五)兩氏も觸れてゐる。ヌベフツォフ氏によれば(註六)、ウリユングウル湖の水は幾らか鹽辛いが飲むには毫も差支はないとある。ブルジョワリスキイ氏も同意見を述べてゐる(註七)。而してサポーヂニコフ氏によれば(註八)、ウリユングウル湖の水は鹽味を帯びてゐるのこゝである。従つて、これらの諸説より推定するに、湖水は、元來、淡水ではあるが、中央アジアの淡水湖によく見受けるやうに、湖岸の特に淺い所の水が鹽分を含んでゐるものゝ論定するこゝができる。尤も鹽分の程度は土地によつて大いに異なる。

ウリユングウル湖面の水位は一、六五〇呎を示す(註九)。

ウリユングウル湖盆はキルギス人(ケレイ)の間ではアルン・トゴイミとして知られてゐるが、(註一〇)この名稱は、特に春、往々、この地方を吹く南東及び北東の烈風を意味し、この風のために湖は非常に荒れるこのこゝである。

(註一) ベフツォフ著書一八頁

(註二) ソフノフスキイ著書五七五頁

(註三) 同著書第一卷一一頁

(註四) 「帝立ロシア地理協會時報」第十輯所載「チオルヌイ・イルタイシ河上流地方の地理調査」二七頁

(註五) 同著書五七六頁

(註六) 同著書一八頁

(註七) 同著書一二頁

(註八) 同著書一五一頁

(註九) この數字は次の測定の平均である。

ボターニン及びラフファイロフ	一、五三〇呎
ブルヂェワリスキイ	一、五八六
サポーヂニコフ	一、七三九
ベフツォフ	一、七四〇
平均	一、六四九

(註一〇) ソスノフスキイ氏はこれをアルルウ・トホイと述べて居り、支那人はアルン・トホイと云ふ。

アルン・トゴイ湖盆にはウリユングウル湖の外に尙幾つかの貯水池があり、中にも最も大きいものをバガ・ノル湖と云ひ、湖周は約四〇露里ある。この湖の水は他の貯水池やウリユングウル湖に於けると同じく苦い味を帯びて居る。あまり大きくないトズ・クリ湖も亦同様で、その湖岸では採鹽が行はれてゐる。鹽質は純良で、味も良くて、ロシアへ移出されてゐる程である。以上にてウリユングウル河流域の報道は盡きる。

ウリユングウル河以東の阿爾泰諸山脈より流下するの河川には他にシャズガイミナルインの二河より成るウユンチ河、アンギルト・イミ云ふ左支流を持つボド・ンチ河、バルイチン・ゴル川、ビヂュン・ゴル、その他の諸河川もあるが、これらは左程重要なものではなく、又、全く知られてゐないから、此處には述べないこゝにする。

第九章 哈喇烏蘇湖流域の河川

第一節 科布多河

一 科布多河の總體的特徴

阿爾泰諸爾山脈の北東斜面を下る著名な河には科布多河^{コブト}と布彥圖河^{フヤント}の二つがあり、科布多河の流域は賽留格木^{サイリウケキ}山脈の南斜面、バイリム山脈の南西斜面及びハルクラ山群の西斜面に位置を占めてゐる。

科布多河にはカラト、イルミ、アク・スウの二大支流があり、何れもその流程は四〇露里に及び、阿爾泰諸爾主脈の高い支脈の間に出来た、略々互に平行せる河谷を流れてゐる(註)。

(註) サポーチニコフ著「イルト、イシ及び科布多兩河々源に於ける蒙古阿爾泰」三〇九頁

アク・スウ河(註二)は支脈の北東側を流れ、タブイン・ボグド・オラ山塊(標高八、二〇〇呎)の南東斜面を下る氷河群に發源流下し、同河は側谷の氷河群より流下する幾つかの細流を入れて、河床を深く刻下しつゝ、一般にかなり広い河谷を走つて居り、河谷は山岳に狭められた處では峡谷に近い特徴を示してゐる。而してこれらの峡谷には漂礫や岩屑が堆積し、河は激流となり泡沫をあげて嘈々流れてゐる。河は初の一〇露里の間で、右のや

うな峡谷を二箇所通り、それより廣々とした所に出る。この個所の平坦な谷底には、雪原や小氷河に發してこの谷へ急速に流入せる多くの水流の河床があり、谷には澤山な枯木の混つた最初の落葉松林が現はれる(註三)。次いで、三〇露里の所でアク・スウ河には源流より、左方より、かなり大きい支流ナルイン・スウ河が注ぐ。この支流の上流は察罕果勒河^{フアガニョカ}に注ぐハルサラ河の河源に接近してゐるやうである。尙こゝには、分水嶺を踰える馬道があり、その道はウラン・タバ峠を越えてウコク高原へ出てゐる。アク・スウ河谷はナルイン・スウ河口を過ぎるに次第に廣くなり、谷の勾配も減じ、河は平坦な岸や、夏でも全く解けきらぬ雪原を穩に流れる。アク・スウ河はこの河區に於ては多くの支流を受け入れてゐるが、それらの支流は急傾斜した峡谷や、深く浸蝕をされた凹所を過ぎて、平坦な谷底に溢れ、所々に沼地を形成してゐる。これよりアク・スウ河は廣い河谷となり二露里流下し、再び峡谷に入る。道は、こゝでは舊氷砕石丘の間を縫ひつゝ續き、風蝕を蒙つた巖を傳つて河床より頗る高い所へ上り、一方河は暫らく、崩穴中に姿を隠すやうである。ある箇所では道は片岩より成る斷崖下の、落葉松の密林の生育せる、淡青色の水を湛へた氷蝕湖を迂回する。それより五露里を過ぎるにアク・スウ河は直ちに巖間より開けたステップ性平野に出で、そこで急に右折し、廣い大曲流(註三)を描いてウルフネ・コブディンスコエ湖(上部科布多湖)に向ふ。河はこの區域では左方より大きなキズイル・タス川(この川には支流のアラサン川がある)を入れて、矮灌木の生えた沼地を流れる。

(註一) サポーチニコフ氏は河水の色よりして、この河をペーロイ・コブド(白科布多)河と名づけてゐる。河によつて上部科布多湖に瀉らされた白い淤泥は湖の透明な碧水の中に際立つて見えるも、湖岸より遠くには及ばず、湖岸に沿つて帯狀に伸びてゐる。

(註二) サボーヂニコフ著書八五―八六及び三一〇頁

(註三) サボーヂニコフ氏も「アク・スウ河は西方へ大きく蛇行し、隘間はクイズイル・タス山群を越へてこの蛇行部を横断する」と記してゐる。然し、サボーヂニコフ氏の地圖はこの記事と一致してゐない。

カラト・イル河 當河は一名チルナヤ・コブド(黒科布多)河(註二)とも云ひ、二つの源流を持つて居り、その東方のものは、アクスイ分水嶺の高い雪嶺群中の一小氷河に源を發し、同山群を南より迂回し、その途中で小湖を形成する。一方、西方のものは、一部はソム及び科布多兩河の分水嶺を覆うてゐる雪原の水を集め、一部は哈納斯河谷へ通ずる峠の附近にある湖に發源する。この二源流は、この邊に多くある湖の如き氷蝕湖に於て會流する。カラト・イル河は右の湖を出るに、氷碎石より成る高いステップを浸蝕しつゝ、沼地の多い狭谷を流過する。この狭谷には所々に、所謂「石沼」なるものが形成されてゐて、それを通るのは非常に困難である。サボーヂニコフ氏はこの石沼に沿ふ道に就いて次のやうに記してゐる。

「河岸一帯や、なだらかな斜面は大きい稜角状岩石の撒亂せる淤泥地になつて居て、それには幾つかの細流が流れてゐるが、道はない。馬は腹までも泥に没したり、石に躓いたりして驚いてそれを脱げやうとするが、石に脚のかゝらぬときは、再び泥の中に落込んで了ふ。叢林は殊に矮樺の不安定な地層を蔽うて居り、道を撰んで進むことは不可能である。二頭の馬は韃を呉れても、少しも進まうとはせず、又、無理に前進しやうと努めれば乗つてゐる者も馬と共に倒れてしまふ。かやうにして、わが一行は一露里、多くて一露里半の道を進むのに約二時間を要した」

(註四) ……

この石沼の下方では河谷は左方より斷崖に押し狭ばめられ、その斷崖からは、サボーヂニコフ氏が「硝子の川」
と呼んでゐる(註三)川が瀑布になつて降つてゐる。この川の河口に於けるカラト・イル河の河床は小さな湖位の大
さなまで擴大し、その湖の下方では、右方より、サボーヂニコフ氏がカラト・イル河の第三源流と看做してゐる大
きな川が注いでゐる。この源流は主脈に懸る一小氷河に發源し、カラト・イル河系の他の多くの川に於けると同様
その途中に川を堰止めてできた小さな氷碎石湖を形成してゐる。この河口を過ぎるに、カラト・イル河の河谷は、
左側に豐潤なアルプ性草地の始まる所で、特に著しく擴大する。尙、八露里先では、右方よりタルクルイ川がこれ
に注ぐ。この川に沿つてはカナス(アルチュム)河系のコム河谷へ通ずる峠路がある。この川は長さ約二〇露里に
及び、急傾斜せる横谷を流れ、この横谷中谷を圍む氷碎石丘(タルクルイ峠への登路中最も難所となつてゐる)の
間には上、下二つの湖がある。タルクルイ河口(七、五五〇呎)のやゝ下方のカラト・イル河谷には樹林が現はれ
る。更にタルクルイ河口より五露里下方に至れば、カラト・イル河の最大支流であるコルムド・イク河が幾つかの
瀑布になつて轟々たる音を立てながら、カラト・イル河に注いでゐる。コルムド・イク河を渡る淺瀬は、その河の水
流が大して深くもないに拘らず、渡河に非常に危険である。コルムド・イク河の河床が大圓礫の堆積よりなつてゐるため、そ
の間を通る馬は絶えず脚を滑らし、脚場を失つて、今にも倒れ相にあがきつゝ進まねばならぬからである(註四)。
尙、コルムド・イク河は、上記の雪を載くアクス・イ分水嶺より下る氷河群に發源し、その上流では氷碎石に取圍ま

た広い盆地を走つており、氷砕石は又上流の河谷や中流の河谷をも埋め、所々に堰止湖を形成してゐる。コルムド・イク河の水量はカラト・イル河のそれと略々等しく、時としては本流と看做されることもある。

カラト・イル河はコルムド・イク河口の下方、一〇露里の所で平坦な廣谷に入り、流れは緩慢なる。更に、數露里を過ぎて、サボーヂニコフ教授の所謂、マローエ・コブディンスコエ・オーゼロ(小科布多湖—水位七、二二〇呎)(註五)に注ぐ。河はこの區域で四つの川を入れ、その中の三つは右方より、一つは左方より注ぐ。これ等の川は急傾斜せる狭い凹地よりカラト・イル河谷へ出てゐる。

カラト・イル河は右の湖を出て七露里を過ぎると、主脈の、樹木のある右側斜面に近接し、左方に廣いステップ性の廣場を残しつゝ流れる。爾後、河床の右側には氷砕石が連り、左方のステップは沼地に變り、アク・スウ河の沼地と連つてゐる。この河區に於て河は右方より二つの川を入れるが、その第二の川をコム川と呼ぶ。カラト・イル河は幾つかの分流となつて上部科布多湖に注いでゐるが(註六)、中にも最も大きい分流は河幅一五——二〇「サー・ジュン」を示し、深度はカズナコフ氏によれば、馬の胸部以上に達するものである(註七)。カラト・イル河はアク・スウ河よりも水量が多く、水は全く透明である。

(註一) カズナコフ氏はその著書「吾が蒙古及びカム旅行」(カズロフ著「蒙古及びカム」第二卷所載)一〇頁に於て、この河をその左支流の名稱を採つて、コルムドウク・スウと名づけてゐる。尚、これについては後の記事を参照されたい。

(註二) 同著書一九四—一九五頁

(註三) 同著書一九四、三一—頁

(註四) サボーヂニコフ著書一九四頁

(註五) 同著書三二二頁

(註六) サボーヂニコフ著書三二二頁

(註七) 同著書一〇頁

因みに、ウエルフネエ及びニヂネエ(上、下)兩科布多湖は烏梁海人間ではドルモ・ノル、キルギーズ人間ではカラ・クウリミと呼ばれ、氷砕石湖の一つに屬する。(註)

(註) Grundriss, Beiträge zur Kenntnis der Eiszeit in der Nordwestlichen Mongolei, etc. p. 32-54.

上部科布多湖 當湖は北西より南東に向つて廣い帯の如く伸び、湖長一八露里(註一)、湖幅は最も廣い所で四露里に達する(註二)。湖は岸を遠ざかるにつれて急に深くなり、數「サー・ジュン」の深さより九——一二「アルシン」の深さとなり、湖心では一七「サー・ジュン」三分の二に達する(註三)。湖岸はかなり屈曲してゐるが、湖中には三の岬が比較的遠くまで突入し、その中の二つは南西湖岸にあつて、上下兩サガイステイ(又はセギステイ)河の河口間にあり、他の一は北東湖岸にあつて、殆んそサガイステイ河口の對岸に位する。南西湖岸のエリド・イク河口の附近には密林に蔽はれた小さな島が衝立つてゐる。

湖は南西より、落葉樹の繁茂せる主脈の山麓に接して居るが、この山麓はその後幾らか岸より遠ざかり、その跡は沼澤質の草地(その一部には矮生の柳 *Salix caprea* が生えてゐる)や林地となつてゐる。林は、こゝでも、所々に湖と平行に伸びてゐるところの舊氷砕石丘を覆ふてゐる(註四)。湖の南西岸には林や岩があつて、概ね景色が

佳く、荒涼たる陰鬱な性質を帯びた北東湖岸と對立してゐる。西岸の一部には、尙、小さな林區があるが、その東部にはたゞ花崗岩の斷崖のみが、岸より二、三露里離れて、殆ん垂直に懸つて居り、その山脚と湖岸との間に、沖積丘崗や凹所（その一部は所謂、鍋ミ稱する水溜になつてゐる）のある氷砕石帯がある。北岸側からは尙湖へ向つて廣い段階狀のコイト、イン川の空谷が餘々に降下して居る。このコイト、イン川は古い氷砕石の間を流れ（註五）、北方よりこの湖に流入する唯一の水流で（註六）あり、南方よりの水流には上記のサグイステイミエリド、イクの兩川の外に（註七）、あまり大きくない一つの川（サボーヂニコフ氏はこの川の名を逸してゐる）（註八）があるのみである。

サルガルルイといふ廣い（註九）、流れの穩かな支流は三露里近くの流程（註一〇）を有し、上科布多湖の水を下科布多湖へ誘導して居り、その深度は馬腹位あり、流はかなり速かである（註一一）。

（註一） サボーヂニコフ著書三二三頁。然し、同書八二頁には「上方の湖の總延長は一五露里未満で、従つてカズナーコフ及びラド、イギン兩氏の指摘せる大いさ二五露里は過大で、幅員の六露里も亦不當で有る。勿論、精確な測定を遂げた譯ではないが……」との註がある。サボーヂニコフ氏も亦此の種の測定を行はなかつたことは明らかである。

（註二） サボーヂニコフ教授はその著書八二頁に「上部科布多湖の湖頭の幅は一露里に足らず、サグイステイ河口、即ち湖の中部は一露里半、湖の下端は四露里に擴大する」と記してゐるが、湖の前記の特色も、又地圖に描かれた所のもも、この記事と一致してゐない。摘要も亦、誤つたまゝ傳へられたカズナーコフ氏の下部科布多湖の地圖に據つたものであるらしい。

（註三） カズナーコフ著書一一頁

（註四） サボーヂニコフ著書八一頁

（註五） サボーヂニコフ著書三二三頁

（註六） サボーヂニコフ教授は他の頁中（その著書七九頁）には、この川をスウオタ・コフと名づけてゐる。

（註七） サボーヂニコフ著書八二頁

（註八） サボーヂニコフ氏の地圖には二つの川が記入されて居り、サグイステイ川は記事と異つて圖示されてゐる。

（註九） 幅三〇—六〇「サーヂン」。

（註一〇） グラヌー氏の測定によれば五料とある。

（註一一） カズナーコフ氏及びグラナー氏は「Die Seen sind durch den starkstromenden aber seichten Sargally miteinander verbunden」と記してゐる。

下部科布多湖 當湖の形は上部科布多湖に酷似し、たゞ、若干短いだけである（註一）。湖は東端に於て極く僅に科布多河谷の方向、即ち北東に屈折し、湖岸の底には花崗岩礫（時としては大礫岩）が撒らかつてゐる。然し、一層深い湖底になるに何處も殆ん粘土質である。下部科布多湖は上部科布多湖より浅く、水深は約半分に達し、而も島嶼が多くて、その數は十五に及び（註二）、湖岸は沙漠で低く、極く標式的な氷砕石層よりなる。湖の北岸に就いてグラヌー氏の記するところによれば、「下部科布多湖の北岸に於ける氷砕石地帯は、蒙古中で、最も明瞭に顯れたものゝ一つである。氷砕石や細い碎屑礫岩丘（Drumlins）は、こゝでは、著しく複雑な形態を成してゐて、幾十もの小湖沿群がこの地域の低凹地を占めてゐる。而も、この地方に在る「鍋」（Moränenpfhle）はウコク臺地のカナスミカルグッタ兩河の中間に於て余の見受けたところのものに頗る似てゐる。路上には可成り大きい岩塊、圓礫、岩層及び塊狀又は微粒狀砂（氷河の塵埃）等が散亂して居り、而も貧弱な植物は、或る時代にこゝに起つた

偉大な氷河運動の痕跡を十分に物語つてゐる」と(註三)。かやうな特色はこの湖の南方に當る地方にも顯はれてゐる(註四)。

南西側よりこの湖に注ぐ支流としては、西より東へ算へて上、下兩ト。ルゲン、スムダイルク及びルイゴユク等があるが(註五)、北東よりこの湖へ入る支流は一つもない。湖面の水位は七、三〇〇呎を示す(註六)。

(註一) カズナコフ氏はこの長さを一五露里と決定してゐる。

(註二) カズナコフ著書七頁

(註三) 同著書五三―五四頁

(註四) グラヌー著書所載第九表附圖第二十一號

(註五) カズナコフ氏はこれらの川にドゥルゲン、スムダイルク、ウルフニイ・ウイド・イク、ニヂニイ・ウイド・イクの名を與へてゐる。

(註六) この數字は次の測定の平均である。

カズナコフ	七、二五呎
グラヌー	七、三八〇
平均	七、二九八

サボーチニコフ教授は下部科布多湖よりも著しく高かる可き上部科布多湖の水位を六、九二〇呎としてゐる。

科布多河の上流地方を踏査せる人々は殆んそ皆、それが下部科布多湖より流出する地點を見てゐないが、當河源及び科布多河の左支流ツァガン・ゴルの河口間に於ける河谷に關してはグラヌー氏が次の如く述べてゐる。

「ツァガン・ゴル河口より科布多湖までの距離は凡そ六〇杆あり、この河區に於ては、河は稀に幅員〇・五杆を越へるところの、河谷を急流となつて流下して居り、兩側の専ら古い粘土片岩及び千枚岩より成る山岳は河に向つて急傾斜し、谷底は平滑で、高い階段狀段丘を伴つてゐる」(註一)。

尙、こゝに附記せねばならぬことは、河谷を狭める山岳が峻しいため、科布多河谷の落葉樹林や被覆植物が非常に繁茂し、阿爾泰諸爾山脈の北東斜面を下る河谷の中でも、特に際立つて見えることである(註二)。

科布多河は下部科布多湖を出てから二、三の箇所で幾多の小さい湖に注ぐも、コタン・スウ河口以下では、専ら一つの河床を流れる。ツァガン・ゴル河口に於ける河谷の標高は六、二四〇呎を示す。(註三)

科布多河はツァガン・ゴル河を入れてあまり高くない荒涼たる山麓の間の狭谷に流入し、流れは急となり、所々に急瀾を形成する。河は峡谷に入るに、急に北折し、又そこに一小湖(水位六、一七〇呎(註四))を形成するが、幅三〇―四〇「サージョン」の急流となつて、その小湖を出て、そのこ、やゝ下流で南東に轉じ、スオク河口に至るまで、一六露里の間同じ方向を流れる。狭い河谷はこの河區では不毛の段丘を成つて、岩質の著しく不毛な山岳に連つて居るも、河床沿線には狭い綠草地帯や、喬いポプラ林が並んで居り、島嶼に於ては落葉松の孤木や矮い柳の叢林なきがそれに混生してゐる(註五)。スオク河口の渡場の附近での河幅は四〇「サージョン」になり、峡谷は著しく側方に擴大し、峡谷面は五、七三〇呎の標高(註六)まで低下する。右の渡場の下方の荒涼たるバイン・ハイルハン山麓の東端近くに於て、科布多河は遂に沙漠ステップ性の、廣大な河谷に流出し、サクサイ河口附近に於て、

暫く南東の方向を取る。尙、河はこの河區では分流化するが、その主なる分流は約五〇「サージョン」の幅員を有し、舊河床に富む而も幾多の小湖沼のある洪氾地をばサクサイ河の三角洲まで流れ、次いで、サクサイ河と合して、ウスン・ホロイ河口に至るまでの一一〇露里の間、北東の方向に進みんでゐる。因みにこの區間の状況は餘り色く知られてゐない。ペフツォフ氏はエリデゲ界標（ラファイロフ氏の地圖にはウレグイ（註七）にあり）に於てこの河を横切つてゐる。

（註一） 同著書五一頁

（註二） カズナコフ著書五頁

（註三） この數字は次の測定の平均である。

カズナコフ……………六、二〇〇呎

グラヌ……………六、二八〇呎

平均……………六、二四〇呎

（註四） サボーヂニコフ著書四〇二頁

（註五） サボーヂニコフ著書七二頁

（註六） サボーヂニコフ著書二四二、四〇二頁

（註七） ボターニン氏はこれをその著書第一卷三三二頁にウリゲと述べてゐる。

この界標はサクサイ河口より二〇露里の所にあるも、サボーヂニコフ教授の地圖から判断すれば、三〇露里になつてゐる（註七）。こゝでは廣い草原帯が河の右方に沿つて續いて居り、草地には所々に、柳、ポプラ及び雜灌木が

生えてゐて、濕地や小湖（註二）も澤山ある。尙科布多河はサクサイ河を入れて、更に狭い河谷（註三）に入るも、その河谷には、峡谷になつてゐる箇所は何處にもなく、かなり廣潤であるから（註四）、この草地は上記洪氾地の直接の延長と看做して宜からう。ペフツォフ氏の渡つた八月末には、河は幅員四〇「サージョン」の急流をなつてゐたが、同氏によれば、満水時にはこの邊の河幅は一露里に擴大し、その時には、動物を泳がして河を渡すことは困難で、家畜を喪ふことは珍らしくない（註五）。カズロフ氏も八月にこの河を渡つてゐるが、氏は月初ではあつたが、河幅を同じく四〇—五〇「サージョン」、深度を三「アルシン」に測定してゐる。尙、プリンツ氏は一八六四年の六月下旬、即、河が頗る高い水準を示してゐる頃、科布多市へ旅行し、この河幅を僅に二五「サージョン」に測定してゐるが（註六）、これは何かの誤であらう。

科布多河は、サクサイ河口にエリデゲ界標の中間に於てトルボ・ノル湖の排出河たる、科布多河に右側より注ぐトルダン川と合するのみである（註七）。

グラヌー氏はトルボ・ノル湖を訪れてゐるが、この部分のこゝを記して居らず、吾々のこの湖に就いて知るものものは、ただこの湖がタル・ノル湖よりも比較的大であつて、その東方に廣い沼地が、續いて居り、湖の乾涸せる痕路を持つた粘土質の懸崖があるといふこゝのみである。科布多河はエリデゲ河口の下流に於て、右方よりハト。（又はカト）川を入れる。同川の河床は砂利や圓礫に埋もれ、落葉樹林に蔽はれてゐる。尙、これより數露里過ぎた所でボターニン氏は科布多河谷を横斷して居り、同氏は次の如く述べてゐる（註八）。

「科布多河はハト。河口のやゝ下方で、高い急峻な断崖に囲まれた地峡(断崖の直下には夥しく崩壊土が有る)に入る。河はこゝでは、狭溢な河床を流れ、その岸には極く稀にポプラ、柳、樺及びオブレビーハ(露名 Огренкиа; Hippophaë rhamnoides)等が繁茂してゐる。地峡の長さは四露里足らずであるが、それを過ぎるこゝ、河谷は再び擴大して、南西に一大屈曲をなし、爾後、又南東に轉じ、更に北東の方向を取つて、ハラ・ロンフウ山を迂回し、同山の後方でアチト・ノル湖の排出河たるウスン・ホロイ河を入れる」云。

科布多河は右のウスン・ホロイ河口を経て一〇露里の間東流し、それより硅長石増岩の大露頭たるウラン・ロンフウ山の山麓に於て急に南南東に轉じ、コク・コテ・リ山に至るまで、即、七〇露里の間、同じ方向に進む。河谷はこの地域では著しく擴大し、河は河谷の左隅を流れ、時々は左岸の山に殆んぞ密接して流れ、右岸に見渡す限り錦鶏兒の繁茂せる廣い「サイ」(Сай)を残してゐる。河床の縁邊では、柳やオブレビーハの林が樺やポプラの森に交替つてゐる。河はシビル河口に向合つた所で右方に投じ、數露里の間は、西方より接近してきてゐる巖山の下を走る。同時に科布多河谷には東部の山岳も徐に迫り、それが、シビル河以下では右岸の山岳に著しく接近して、恰も門の如くになり、河はその間を突進する。

河はこの岩門よりコク・コテ・リ山の峡谷に至るまでは再び廣い谷の主に左側に沿うて流れる。この區域の河岸には専らオブレビーハ(Hippophaë rhamnoides)が繁茂し、しかもこゝは夥しくこの植物の繁茂した所は蒙古の何れの地方にもない。

尙、コク・コテ・リ山では科布多河の左岸(註九)に隆起せる高い巖山よりも、その巖山の東側にある深い鞍部、即ち、曾て科布多河の第二の河床であつたらしい個所がより明らかとされてゐる(註一〇)。この鞍部の表層には砂利が散亂して居り、殆んぞ全く不毛の地となつてゐる。コク・コテ・リ山は西方よりそれに接近せる岩質のグルバン・ツァサト。支脈に酷似し、高い障壁を形成して居り、科布多河は狭い峡谷となつてその障壁を通過し、下流の平原に出る。この障壁は科布多河谷の隋圓狀に擴大した區域を限定してゐるが、曾て、この河がウスン・ホロイ河口の下方に於て二つのかなり大きな湖に注いでゐたこゝを物語つてゐる。

科布多河は、右に掲げたシビル川の外に、ウラン・ロンフウ、コク・コテ・リ兩河の間に於て、右側にウハ、チジクテン・ゴル及びホヌル・ウレンの三川を收めて居り、これ等の川の状況は左の如くである。

科布多河はコク・コテ・リ山の南側に沿ひ二つの分流に岐れて流れ、二七露里下方で再び合する。この河區に於ては二分流は平坦な一つの島を圍んで互に五——七露里の間隔を保つて流れる(註一一)。島は貧弱な植物に覆はれ、その草株の盛上つてデコボコした沼澤地には主に「すげ」屬が繁茂し、幾らか乾いた混砂粘土質及び砂礫質土壌には錦鶏兒が生えてゐる。これより科布多河は一河床にして、余り區劃の明瞭な谷ではないが、廣い谷をば五五露里流下し、ハラ・ウスウ湖に注ぐ。尙、たゞ一ヶ所、科布多市の經度と同じ位置に於て、河は紅色花崗岩より成る孤立岩質山峰トルフランの一端たる高い岸を奔流するが、その他の地域にあつては、河岸は見渡す限り、頗る緩慢な勾配を保ち、専ら地衣や蘆に蔽はれてゐる。トルフラン山の一端にある渡場では、河幅は六〇「サージン」を示し

左岸に寄つた河心の深さは三「アルシン」を示す。余の科布多河を渡つた時は、七月半であつたが、左岸にはまだ河水の溢れてゐるところが所々にあつて、水溜や主流の河床より六〇〇「サーチュン」も離れた所に水溜や分流さへも目撃した(註二二)。トルフラン山下に於ける河面は、余の測定によるに、四、三八五呎の水位にある。

科布多河はこの山より尙、四〇露里を走り、三つの分流に岐れてハラ・ウスウ湖に入る。その中の北方の分流は主流で、他の二つの分流にはロンド・ゴルミナルイン・ゴルの名稱が附されてゐる(註二三)。

科布多河は廣汎な流域を有し、その支流は廣大な山岳地帯に分散してゐて、その山岳地帯の面積はグリーンニツチを基準とする九〇度の經線に至るまで二六〇露里、四九度の緯度に沿うて二五〇露里に達する。多くの支流の中で特に注意を牽くものとしては、左側にツァガン・ゴル、スオク、ウスウ・ホロイ及びシビルの四河があり、右側にはコタン、カラガントイ、サクサイ、トルダン、ハト、ウハ、チジク、テン・ゴル及びホヌル・ウレンの八河川があるが、遺憾にしてこれ等の河川に關しては満足な地理的報道がない。

(註一) 科布多河のこの區域の流路は現存の地圖に示されたものとは違つてゐる。製圖者は變更を加へた理由を記してゐない。

(註二) ベフツァフ著「蒙古及び内部支那北部諸省旅行記」一六頁及びコプロフ著「蒙古及びカム」二八一―二九頁。

(註三) サボーデニコフ著書三一八頁。

(註四) 然し、ポターニン氏の記述によれば、氏が一〇露里前方より遠望したところでは、科布多河は高い山峽よりエリゲ(エリゲ)自然界隈へ出ることとなつてゐる。これらの山峽は、これに接する山岳によつて形成されてゐるのではなく、高い河岸段丘の絶壁によつて形成されたものらしい。

(註五) 同著書一四一―一五頁

(註六) 「帝立ロシア地理協會時報」一八六五年發行第一輯第二號所載「チヤ河に於けるロシアの取引所及びハブド市への旅」九頁

(註七) サボーデニコフ著書二四一頁

(註八) 同著書第一卷三二五―三三三頁

(註九) この山は粘泥質片岩より成つてゐるらしい。

(註一〇) ポターニン氏の想定(同著書第一卷三二七頁)も同様である。

(註一一) サボーデニコフ氏の地圖には、この島には連丘のある様に誤記されて居り、又、科布多河の下流の全延長に互つての土地の起伏状態も亦誤傳されてゐる。

(註一二) 科布多河はこゝでは頗る深い急流を成して流れ、渡場では大きい動物を漸く泳がせて渡すことが出来る。尙、羊の如き小動物を渡す場合には渡河用の平底舟を用ひる。その時には羊を仰向に臥かせ、頭と頭を備合はせて置けば羊は全く温しくして居る。科布多河の渡舟には凡そ長さの二サージン舟楫が用ひられてゐる。

(註一三) ポターニン著書第一卷三三三頁。ところが、ボズドネーエフ氏(「蒙古及び蒙古人」第一卷三四一頁)の記するところによると、科布多河の南方の分流は最も大きいことであるが、氏のこの河の三角洲に關する記事はポターニン氏のそれと幾分異なつてゐる。これは、恐らく、これ等の探險の行はれた期間(一八七七一―一八九二年)の十五ヶ年間に河流が變化したためであらう。ボズドネーエフ氏の記述によれば、『吾々の科布多河に到着した所はグルブン・サラギン・ウルム(「三つの分流を越へる淺瀬」の義)と云ふ渡場の附近であつた』と。河はこゝでは三つの分流に分れてゐるから、右の名稱は勿論この箇所にはよく當嵌つてゐる。第一の分流の幅は九月初旬に二五―三〇「サージン」を示し、深さは二「アルシン」九「ウルシタ」を示す。ボズドネーエフ氏に隨行した明囑特人は當時科布多河の非常に減水してゐるのを目撃してゐる。普通、淺瀬の徒渉は九月に行はれ、

河水の全く消失するのはたゞ秋の中頃に限られてゐる。水面が低いので、余の案内人等は第一の分流を渉り、それより直行して、他の二分流が合して幅三五「サージエン」、深さ二「アルシン」四「ウルシヨク」の一河床を形成する箇所に達した。

二 科布多河の左支流

ツァガン・ゴル河 當河は乳白色の水を馳せて居り、一名白河とも呼ばれ、タブイン・ボグド・オラ山脈の氷河群に發源する。即ち、この河はボターニン氷河より流出し（註一）、急流ミなつて初は南東に走るが、後東流し、その途中で、主脈やアクスイ分水嶺を下る多數の氷河の水を集め、上源より一七露里の所では既に正しい河を形成し、布を伸べたやうな綠草地（註二）のある狭長い河谷を流れる。次いで河はボターニン氷河の少し下方で紅色粘土片岩（註三）より成る峻しい深い山峽に入ると、この山峽の區間は短く、河が東折せんミする箇所では、前よりも、廣潤な地に出で、無數の舊氷砕石層の間に河床を伸ばしてゐる。河源より二四露里目の所では河谷の北斜面に最初の樹木ミして落葉松が現はれ、それより七露里を過ぎると、林は既に姿を消してゐる。尙、これは、河谷の土壤が沙漠性を帯び岩石に富み、又氣温が不順であつて、林樹の發育に悪影響を與へてゐるからである（註四）。

ツァガン・ゴルは河源より三一露里目の所で最初の著大な支流を入れる。この支流をハルサラ河ミ云ひ、アクスウ分水嶺より下る小氷河群の水を集めてゐる。ハルサラ河は下流に於ては、その河口に至るまで谷全部を埋めてゐるミこころの高い舊氷砕石丘の間の深く削剝された凹所に水流を馳せてゐる（註五）。尙、この種の氷砕石は河口の上方

に當る本流の河谷にも見受けられる。

ツァガン・ゴル河谷の上部地帯では側谷や圓谷にのみ豐潤な牧場があるが、ハルサラ河口（七、四六五呎）を過ぎると、河谷は忽ち擴大して、甚しく沙漠・ステップ性を帯びてくる。こゝでは崩壊地の多い、荒れた高いコチクイン山脈より流下せる（註六）タルドゥイ及びデジ兩川がツァガン・ゴルの左岸に注いでゐる。カズナコフ氏はデジをデストゥイク、又はムズド・イ・ブラク（註七）ミ名づけてゐるやうであるが、この河は峽谷を走り、上流ではかなり廣く、下流に至るに連れて次第に狹猛ミなり、屈曲の多い山峽に入り、そこで舊氷砕石の間を嘈音を發しつつ流れる（註八）。尙、ムズド・イ・ブラクのツァガン・ゴル河谷へ出る山峽の出口は、ツァガン・ゴル河面より一五〇—一七五呎の高所に見え、それに向けて道が崩壊地に沿うて伸びてゐる。

ツァガン・ゴル河はムズド・イ・ブラク河口の手前では河幅二〇「サージエン」に達し、貧弱な草に蔽はれた低い兩岸を頗る速かに、而も甚しい屈曲を描いて流れて居り、往々數十「サージエン」の間で二回も全く反對の方向に流れてゐるミこころさへある（註九）。而もかやうな特色は、その下流にも見受けられる。

ツァガン・ゴル河谷はこゝでは約三露里の幅を示し、その谷底は平坦で緩傾斜し、地層は粘土質であるが、各所に漂砂（註一〇）が分布し、且つ、漂積質岩屑や圓礫も夥しく在る。谷の縁邊には厚い氷砕石丘が幾つも隆起してゐるが、その上方の河面より三〇〇—三五〇呎の所には淡紅色の花崗岩より成る漂石が露はれてゐて、片岩質の山岳の、薄暗い背景に對して際立つた對照を呈してゐる。河谷のこの部分でも、又その下方でも、概ね、古代の氷河

作用の痕跡が顯るはつきり顯はれてゐる。

ムズド。イ・ブラク河口より右支流カト。河々口に至る二〇露里の河區に於けるツァガン・ゴル河々谷は、右に掲げたやうな特色を帯びてゐるが、谷は下流に降るに連れて、たゞ不毛の度を増すのみである。標高六、八六〇呎を示すカト。河口では、河は高い（註一一）氷砕石丘のある廣い地帯に流入し、地形は一變する。氷砕石丘は全く河谷を取圍み、谷の全面を埋め、谷に丘陵伏の景觀を添へ、南方では下方のカク・クリ湖（七、七二〇呎（註一二））に達する程に深く伸び、そこではカト。川の氷砕石丘を合してゐる。ツァガン・ゴル河はこの氷砕石層に達するまでは平坦な屈曲の多い兩岸に水を馳せてゐるが、こゝでは激流になつて嘈然と飛沫あけつゝ岩塊の間の深い河床を流れてゐる（註一三）。尙、斯かる地域の兩岸には草類被覆は無くなり、灌木が稀に見受けられるに過ぎない。

ツァガン・ゴル河はカト。河口より更に一層擴大して、谷幅は四露里に達する（註一四）。而も、谷の、平坦な大部分岩屑質である表層は、この區域では全く沙漠に變り、河岸には草地や灌木が極めて尠くなり、たゞ河に平行に伸びた山岳の側谷にのみ、所々に大きい綠草の斑點が見受けられるに過ぎぬ。然し、ツァガン・ゴル河が分流化する箇所では自然は幾か活氣を帯び、こゝに開いた沼澤質の草地には水溜や舊河床等が夥しく存在し、その土地の游牧民・梁鳥海人のためには好箇の停泊地になつてゐる。因みにツァガン・ゴルミ科布多河との會流點は六、二四〇呎（註一五）の標高に在る。

（註一） ボターニン氷河の下端は絶對高度九、〇二〇呎に在る。

（註二） サポーヂニコフ著書二五、二九、三〇頁

（註三） サポーヂニコフ著書三三頁

（註四） サポーヂニコフ著書二六頁

（註五） サポーヂニコフ著書二四頁

（註六） サポーヂニコフ著書三一六頁

（註七） 同著書二頁、クラヌー氏（同著書四八頁）もこの名を用ひてゐる。

（註八） グラヌー著書四八頁

（註九） カズナコフ氏の目撃せるところによれば、ツァガン・ゴルの水は夕刻に半アルシ単位増加することである。

（註一〇） グラヌー著書四九頁

（註一一） この比高は六五〇呎以上に及ぶ（サポーヂニコフ著書三三三頁）。

（註一二） サポーヂニコフ氏による。

（註一三） グラヌー著書五〇頁

（註一四） サポーヂニコフ著書三一六頁

（註一五） この數字は次の測定の平均である。

カズナコフ	六、二〇〇呎
グラヌー	六、二八〇呎
平均	六、二四〇呎

スオク河（別名スロク）當河はツァガン・ゴルよりも長く、流域も廣いが、水量は極めて尠い。これはその河源に

雪や氷の堆積がないからである。當河名はオイダウル及びジルガラント。イ兩河の會流點以下を指し、オムスタ市出版のトムスク縣一〇露里地圖にはダルクカント。イ記されてゐる(註二)。カズナコフ及びグラヌー兩氏はこの河を通つてゐないため、この河名を掲げて居らず、カズナコフ氏はウラン・ダバンよりカチクイン山脈までの全長に於て、たゞキケキネ及びウリクン・オイダウルの二川のみを己が行程圖に載せて居るに過ぎない。又、グラヌー氏はカズナコフ氏の行程に當る一つの峠より調査に着手し、途中で順次に四つの川を横切り(その内の三つはキチ・オイダウル、オルト・オイダウル及びウリクン・オイダウルと呼ばれる)、ウリクン・オイダウルの南でスウオク及びツガン・ゴル(九、七二五呎)兩河の分水嶺に上り、それよりこのツッガン・ゴル河谷へ出た(註二)、一方サボーチニコフ教授は、これに反對に右の分水嶺を通り、ジルガラント。イ河谷に向けて下り、たゞそこよりボリシ・イ・オイダウル(大オイダウル)河の河谷に移つた(註三)。然し、この部分ではミロシニチュンコ大佐の測量班の測量に基いて作られた上記トムスク縣地圖にサボーチニコフ教授の地圖や、カズナコフ氏の見取圖と一致せしめることは難事であり、而もスオク河流域の上流地方に關する右の如き矛盾した報道(註四)、しかも、極く不完全な報道から見ても、余は手許にある右の資料を基礎として實際に正しく河の状態を述べることは出来ない。

ウラン・ダバン峠を下る川はキジル・ケゼン云々(註五)。この川は峠下に於て、タブイン・ボグド・オラ山脈の高い北東支脈を下る幾つかの細流を集めてゐるオイダウル河の左岸に注ぐ。オイダウル河はウラン峠よりの道の出口のやゝ下方では三—四「サージエン」の河幅を示し、舊氷河(註六)作用の明瞭な痕跡を止めたる、岩石に富むか

なり廣い河谷を流れる(註七)。グラヌー氏の著書には、この河はキチ・オイダウルと記入されてゐる。

(註一) サボーチニコフ著書三一八頁

(註二) 同著書四六一—四八頁

(註三) 同著書三九—四〇頁

(註四) 參謀本部の四十露里地圖の編輯者はこの矛盾を訂正すべく努力してゐるが、不成功に終つてゐる。

(註五) サボーチニコフ著書二二〇頁

(註六) グラヌー著書四六頁

(註七) サボーチニコフ著書二二〇頁

クイズイル・ケゼン河口より七露里の所で、沼澤質の、草株の夥しい河谷を流れると想はれるモホル・スオク(モホル・スロク川)がオイダウル河の左岸に注ぐ(註一)。尙、それより七露里を過ぎると、オイダウル河は大きなオヌヌル川と合する。この川はこの邊では恒雪の斑點を着けた、サイリュゲムの主峰によつてその北方を限られた廣い沼澤質の河谷にある湖群に發源する(註二)。この川の狀況は尠しも判つてゐない。又、オイダウル河の著名な一右支流で、一〇、〇〇〇呎の高所にある湖沼群より發源するジャルルイク川の狀況も判明してゐない。トムスク縣の一〇露里地圖にはジャルルイク河源に湖群を表示してあるも、ボボーフ氏は、たゞ二つの湖のあることを記し、その内の上方の湖は約一〇〇「サージエン」の長さを有し、そこに下つてゐる雪原(註三)の縁端の深い盆地(氷谷)に在ると述べてゐるのみである。オイダウル河はオヌヌル川と合してその水量を増し、且、その左岸に於て尙、幾つかの

川を受け入れつゝ、水砕石や沼澤に富むの草地を流れて、高いカルグット河谷に達し、そこで(七、三五〇呎)シルガラント・イ河と合する。(註四)

地圖にはオイグウル及びシルガラント・イ兩河谷の間に一つの川が示されてある。この川をサボーデニコフ教授はボリシ・イ・オイグウル、即ちリクン・オイグウルと呼び(註五)、グラヌー氏はオルト・オイグウルと呼んでゐるやうであり、カズナコフ氏はキチキネ・オイグウルと呼んでゐる。尙、この川はトムスク縣一〇露里地圖にはダルカント・イ(シルガラント・イ)に注ぐやうに示されてあるも、サボーデニコフ教授の地圖ではオヌヌル河口の上方にある前記のオイグウル河に注がしめられてゐる。右の如き地圖示上の相異の何れが正しいかは、將來の高原の踏査に俟たねば明らかでない。

カズナコフ及びグラヌー兩氏のウリクン・オイグウル(註六)と呼んでゐるシルガラント・イ川の河源、ポターニ水河の近くに在つて、四つの源流(ツッガン・ゴル河谷(註七)の高い左翼より下る小さい水河畔に發してゐる)を持つてゐる。シルガラント・イ川の水はツッガン・ゴルに於けると同様、乳白色を帯び、それにその附近の片岩質山岳より流下せる紅色泥土を混へてやゝ紅色を呈してゐる。シルガラント・イ川は河源より一六露里の所で一つの小湖に注いでゐるが、右の泥土はこの湖に沈澱する。河はそれより先、透明な流れになつて次の小湖に流入する。河岸はこゝまでは高いステップ性の段丘となつて衝立ち、その段丘の崩壊してゐる所には小さな沼がある。河谷もその河口に至るまでは、恐らく、同様の特色を保つてゐるであらう。(註八)

オイグウル川はシルガラント・イ川と合してから、河谷に流入し、そこに透明な河水を馳せて居り、河幅は直流の所で五「サーヂェン」を示す。これより先の河は既に述べたやうに、スオク河と呼ばれる。

スオク河のこれより先の流れにはサボーデニコフ氏の地圖ミトムスク縣の一〇露里地圖との間に甚しい相異がある。後者に於ては、河がカルグット・イ界標(註九)よりカラ・イマト・イ河口までは北東に流れ、それよりボル・ブルガスイ河口まで東流し、爾後南及び南東に向ふやうに記されてある。ところが、前者、即ちサボーデニコフ氏の地圖には、河は右の自然界標より急に南東に向ひ、それより東南東の方向に轉じ、ボル・ブルガスイ河口の手前で南南東に再轉し、最後に南東に向ふやうに描かれてある。余はこの二者の作圖上の相異を認むるも、その何れの作圖を信じてよいか迷ふものである。

カルグット・イ界標より一五露里を過ぎるに、カラ・イマト・イ(サボーデニコフ氏によればハリヤマト・イ)川が左方よりスオク河に注ぐ。同川はサイリ・ゲム山脈の同名の禿山の水を集め、その下流では開いたステップ性の谷を流れる。スオク河は、尙二五露里先で、ボルブルガスイといふ著大な支流と合し、最後に右の河口より五露里の所で右方よりビレウ(ビリュ又はベリュ)といふ一川を受け入れる。スオク河はこの全延長を通じて廣い荒涼たる河谷を流れ、たゞそれに注ぐ諸支流の流出口にのみ小さな沼澤質草地を持つてゐるに過ぎず、河幅は比較的淺い所に於ては一〇「サーヂェン」に及んでゐる。

(註一) トムスク縣一〇露里地圖及び「イルト・イシ及び科布多兩河々源に於ける蒙古阿爾泰」四〇頁、サボーデニコフ氏の地圖中

にはこの河も、オイグル河の河源も記載されて居らず、更にカズナコフ氏の行程にもこれらは記入されてゐない。

(註二) 「帝立ロシア地理協會西部シベリア部記録」一九三〇年第三十輯所載、ボポーフ著「阿爾泰山系旅行概観」一一頁

(註三) 同著書九頁

(註四) サポーチニコフ著書二一一二、三一八—三一九頁

(註五) 同著書四〇頁

(註六) これは、カズナコフ氏の測量圖とサポーチニコフ氏の次の記事との比較によつて余の結論せるところである。即ち「……吾々は長さ一露里の透明な湖に通じた。この湖はデルガラント、イの北側に在り、デルガラント、イとは大きい分流によつては連絡されてゐない。」

(註七) サポーチニコフ著書三八頁

(註八) サポーチニコフ著書二二頁

(註九) ラファイロフ氏の一八八三年の地圖にはタルハトイとある。

ウスン・ホロイ河 科布多河の次の著大な支流はウスン・ホロイ河といふ。この河はツァガン・ノリン・ゴル、ビュコン・モレン及び烏里邪蘇臺の三河を受入れてゐるアチト・ノル湖の排出河となつてゐる。

ツァガン・ノリン・ゴル河(註一)はツァガン・ノル湖より流出してゐる。ツァガン・ノル湖は幾つかの川によつて灌漑されてゐるが、右の源流の内現在その名稱のハッキリ知られてゐるのは、たゞ、ハラ・マンナ(カラ・マンダグダイ又はカラ・ムンダグ)川のみである。ツァガン・ノリン・ゴル河の上流は狭い峡谷を流れてキベーツ(露名 Kireui; Festrcaovina)の生えた桶型の盆地に出で、そこで同河の左翼を取つて砂質の廣い河床を通り、最後に、ツァガン

・ノル河に流入する前に、再び、満水時(註二)には殆ど通過の不可能なるところの峡谷に入る。尙、右のツァガン・ノル湖には更に第二の支流タンジュル川(註三)(ブルグウト(註四)又はクク・クテル(註五)とも呼ばれる)があり、これも亦西方よりこの盆地へ向けて流入し、而も、狭い峡谷を流過してゐる。ツァガン・ノリン・ゴルはツァガン・ノル湖に注ぐ前の六露里の所で、やはり、同じツァガン・ノル湖といふ湖周約八露里の景色の佳い湖に擴がる。最後に、ツァガン・ノルに注ぐ第三の川をシャリ・ゴビ(シャリ・ゴブウ)と呼ぶ。この川は前の二つの川よりも小さく、夏になるに潤渇するやうである。ツァガン・ノル湖を湛へてゐる臺地、特に、同湖畔には氷河の賣した堆積物が夥しく存在し(註六)、同湖より流出するツァガン・ノリン・ゴルの河床にまで及んでゐる。この臺地は、氷碎石の外に、山岳ステップ性の植物に被はれ、所々に良好な牧場を有してゐる。ツァガン・ノリン・ゴル河は、氷碎石丘の間に河床を切開く必要のない箇所では、低い河岸を流れて、緩慢な流勢を示すも、その後、東方より臺地を圍繞せる山岳地帯に入る。そして、そこで水流は一變し、漸次激流に變る。ツァガン・ノリン・ゴルがサイリユゲム山脈の支脈を貫流せる峡谷は約二〇露里の距離を有し、深く且つ狭く、同河に接近せる斷崖に狭い蒼い空の外には何も見えぬほゞである(註七)。河は峡谷を出るに、凡そ三〇露里の間は舊灌漑路の跡を止めた、一部は粘土質砂岩、一部は岩石より成る廣い平野を流れ、アチト・ノル湖に入る。同湖は硅長石玢岩より成り、且つカラ・ロンフウ山脈の最終の支脈を成す河岸の巖山の間にある。

(註一) ツァガン・ノリン・ゴルとも書く。余はヴラディミルツォフ氏「帝立ロシア地理協會時報」一九一〇年、第四十六輯所載、一九

○八年夏季の科布多・デルベト旅行(三三五頁)の説に従つたが、ペフツォフ氏はツァガン・ノレイ・ホロイと記し、グラヌー氏はホ
イリ・ゲン・ゴルと記してゐる。尙、後者の名をポターニン氏もその著書第一卷三四頁に述べてゐる。

(註二) ボターニン著第三卷七頁

(註三) ボターニン著第三卷六頁

(註四) トムスク縣十露里地圖、グラヌー著書一〇四頁

(註五) ペフツォフ著書二五八頁

(註六) グラヌー氏の説による。

(註七) ペフツォフ著書二五八頁

次にビ・コン・モレン河(ボク・モリン、アフ・モリン、ベケン・ベレン、ブコム・ベレ、ブコン・ベレン、ブロン・
ベレ等ともいふ)の記述に移らう。

ビ・コン・モレンといふ河名は、一見、たゞケンド・イクト・イ・キ・リ湖(タスクイル川をその源
流とする)の排出河の合流點以下のみの呼稱と思はれる。尠くも、國境まで余に隨行した烏梁海入サングの云ふ
所によれば、ケンド・イクト・イ・キ・リ湖にエクト・イ・テイミの中間を流れる大小の河川は總てビ・コン・モレンとい
ふ一ヶ所に於て合し、而も其處より始まる一河をビ・コン・モレンと云ひ、而も同案内者の附言するところによれ
ば、彼等の間ではタスクイル及びテレ・オユク(又はテレゴユク)(註一)兩川によつて形成されたる河をビ・コン・
モレン河の源流と看做してゐるところである。余は先づその本流より述べよう。

二つの細流はタスクイル山脈より廣い沼澤質のエド・ゲイ盆地に出で、そこで東西の二方面よりエド・ゲイとい

ふ同名の一小湖を迂回して、同湖の南方で一河床に纏り、狭くて、あまり深くない峡谷に沿つて、この盆地の南縁
を成す頂部の平坦な高地を貫流する。川は右の峡谷を出るに、同峡谷の左側に注ぐケンド・イクト・イ・キ・リ湖の一
分流と合する。

ケンド・イクト・イ・キ・リ湖は長さ一四露里、幅員八露里を有し、かなり高いな岩壁に圍まれた盆地内にある。湖
中には二つの島があるが、これらも亦山岳的特色を帯びてゐる。湖の周圍や島嶼には、形の正しい段丘があつて、
湖面より八、二〇〇呎(註二)も高く聳えてゐる。而も、これ等の段丘は、所々、恰も鐵道の路盤に似た。長い平坦な
地帯となつて伸びゐる。殊に島嶼内に於てはこれらの段丘は各高地を環狀に圍繞して衝立つて居り、現今の一つの
大きな島は曾つて、三つの孤立した小島であつたことが判る。

湖の最も深い所は北部にあり、最大深度二三「サーヂン」二「フート」を有し、八月に於ける水面の水溫は九
度、湖底の水溫は五・九度であり、湖水は非常に透明で、湖中に投下された白片は深さ八・五「サーヂン」の所ま
で見えた。一般に湖は美しく、特にその水は澄んだ淡碧色を呈してゐる。(註三)

ケンド・イクト・イ・キ・リ湖より流出する川は峡谷中を流れ、アドリアーノフ氏の言によれば、非常に獨得な性質
を帯びてゐるところである。即ち川は兩側から迫つて來る裸岩に突き當つて騒音をあげながら、急端の中を急下
したり、或は急に細長い湖に河面を擴げて、よごんだりしてゐる。而も斯様な湖は數個あり、川は恰も湖水を連結
する鎖の如き役目を演じてゐる。河岸には、急傾斜した草地が南に開け、流れはビ・コン・モレン河谷に向つて急流

をなして流下してゐる。

(註一) トムスク縣十露里地圖にはこの川はアク・キル湖に注ぐものとして示されてゐるが、これは余の報道に徴して實際と合致してない。

(註二) ミロシニコフ氏の測定による。ギキシ著書一七二頁

(註三) 「帝立ロシア地理協會時報」一九〇二年第三十八輯一九六頁所載、イグナトフ著「一九〇一年夏季の阿爾泰のテレツコエ湖調査」

(註四) イグナトフ氏の説より。

(註五) 同著書二四二頁

アク・コル湖 右の河口を少し下れば、ビ・コン・モレンにアク・コル湖の水が注ぐ。

この湖は、アドリアーノフ氏の言によれば(註一)、恰も皿の中に在る様な形をなしてゐて、四方の閉がれた盆地の底部に横はり、湖周は約二十露里で、湖岸は湖に向つて急傾斜して居り、湖岸には數個の貯水地が見受けられるが、恐らくこれは最近湖水が減じたために出来たものであらうこのことである。アク・コル湖にはジュット・イ・テイ川(一名ヂト・イ・テイ或はイ・テイ・イ・ミも云ふ(註二))のみが注ぎ、この川は夏季の初めには著しく増水するが、その後急激に減水し、一部はタスタイル山脈に、一部はモイナ・タイガ及びブルリ・タイガに源を發してゐる。尙、この川は山より流出するに、沼澤に富む、所によつては丘陵の多い草地のある河谷に流入し、湖を迂廻しつゝ、最後に南西より湖に注いでゐる。アク・コル湖より發する河は深い低地を流れるが、この低地は或は幅二「アルシン」の溝になつたり、或は左側の段丘に出来た平坦な礫岩床に沿うて五「アルシン」位に擴がつたりしつゝ、或る地點まで進ん

で峡谷に變る。(註三)

(註一) 同著書二三七頁

(註二) 烏梁海語の「テイ」はキルギズ語の「テベ」に相當し、丘、即ち孤立せる山頂を意味し、従つてヂット・イ・テイは七つの山頂より發する河を意味する。

(註三) アドリアーノフ著書二三八頁

右の河より一露里下流でウズン・グッジュル(ウズン・グッジュル)川が左方よりビ・コン・モレン河に注ぐ。ビ・コン・モレン河は爾後、左岸にサイリュゲム山脈を下る幾多の支流を入れてゐるが、中にはたゞ満水時のみ水流を見るものもあり、その最初の支流をサルイ・イマト・イミ云ひ、次いでダツジル・コプウ、カラ・イマト・イ(サボーチニコフ氏の地圖のセビステイ?)及びアスハット・イの三河がある。

アスハット・イ河 當河は山岳を出るに、豊潤な草や落葉松、ボブラ等の樹林に覆はれた、深い河谷に流入し、本流の兩側の不毛な沙漠と激しく對立してゐる。(註一)

この河はビ・コン・モレン河の最初の大支流であつて、水量は本流のそれと大差はない。

サボーチニコフ氏はこのアスハット・イ河谷及び本流ビ・コン・モレン兩河々谷に於いて、サイリュゲム山脈やメンダウ・ハイルハンを下る諸河川に見るに同様の氷砕石を發見した。尙、この氷砕石はサイリュゲム山脈の最後の臺地ミビ・コン・モレン河々床との中間地域には全面的に累積し、同氏は舊氷砕石丘の斯かる大規模な而も完全な分布地

を目して、西部蒙古の唯一の大氷砕石分布區となしてゐる。(註二)

尙、同氏によれば、ビ・コン・モレン平野の西縁ではこれ等の氷砕石は五、五四〇呎の標高にまで、アスハット・イ河谷では同河の淺瀬(六、三七〇呎)よりも幾らか低い所にまで、又、チギルテイ河谷では七、四五〇呎の高度にまで存在し、尙、ト・ラリク河谷では標高八、〇〇〇呎の線にまで累積してゐる。このことであるが、サ氏の行程の南方に於ける右の河谷の踏査は行はれてゐないから、これらの數字は確定的なものを見ることは出来ない。

(註一) サポーチニコフ著書 二四七—二四八頁

(註二) 同著書 二四九頁

ビ・コン・モレン河はアスハット・イ河口を過ぎても、深く削刻された河床を、更に長い間流れるらしいが、その後は、満水時にのみ本流に合する他の多くの支流と同様、分流に岐れて、その一部は平原の脆弱な土壤中に潜入し、ノゴン・ヌルミ云ふ多数の細流や泉網(註一)を有する廣い開墾地さへ形成してゐる。然し、六月初旬にビ・コン・モレンの下流を通つたポターニン氏の記すところによれば、若し同氏のこの河へ來る。こゝが、一日早かつたならば水が馬の鞍までも達し、その河の淺瀬を渡り得なかつたかも知れない。このことである。ポターニン氏の出た箇所はタイン・サラ(五つの河床の義)を呼ぶ。尙、これ等の細流の内でも最も大きいものは頗る深く、流れも急で、激流をなした所もあり、河幅は三〇「サージュン」にも達するらしい。ステップに孤立するあまり高くない、恐らく花崗岩質山脈に向合つて屹立してゐる。この渡場は當時、徒渉に最も都合の良い箇

所であつた。一般に本流の淺瀬は長くて非常に屈曲してゐる。(註二)

アスハット・イ河口以下に於てビ・コン・モレン河へ向けて流れる川としては、右側にナルイン・ゴル、タル及びハト。(カト)の三川があり、左側にチギルテイ、ツァガン・コル及びト・ラリクの三川がある。これ等は總てビ・コン・モレン河に直接注いでゐるやうであるが、ラファイロフ及びウラディミルツォフ兩氏がノゴン・ヌル開墾地で目撃した多くの河川は、ビ・コン・モレンの支流ではなくて、單にその分流に過ぎぬかも知れぬから、確實にこれを断定することは出来ない。尙、既に廣いノゴン・ヌル沼地を経て、ビ・コン・モレンを形成せる細流や泉の水網を横断したことを書いてゐるウラディミルツォフ氏も、右と同様のその意見を吐露してゐる。

尙、右の言はビ・コン・モレンの右支流に關するものであるが、左支流に關する限りでは、恐らく、非常に廣いアルト・イン・ハルイスイン云ふ耕地もその成因を同じくしてゐるものを見るこゝが出来ぬ。此の耕地は雑多な落葉樹林や、豐潤な草に蔽はれて居り、ビ・コン・モレンの主要河床の一〇露里東にある。

(註一) ラファイロフ著「ウランゴムよりコシアガチまでの行路」(ポターニン著「北西部蒙古概観」第一卷三三三頁所載)及びウラ

デミルツォフ著三二五頁

(註二) ポターニン第三卷一一頁

次にビ・コン・モレン河に向つて流れ、而も春その水量を増す河としてト・ラリクを挙げねばならぬ。この河はメングウ・ハイルハン山脈を下る氷河に發源し、それより、良く耕された河谷に流入する(註)。この河は非常に屈曲

しつゝ、三の小さい氷砕石湖を過ぎ、かなり水量の多いチャラ・ハルガイ川に合する。この川も亦、メンダウ・ハイルハン山脈に發し、アチト・ノル湖盆に入り、本流に達する前に、メンダウ・ハイルハン山脈より下る他のツァガレ・コル及びチギルテイの二つの溪流と會するやうである。

(サ) ボーヂニコフ著書二五一頁

以上にてビョコン・モレン河系の川に關する報道は盡きてゐる。

ウリヤスタイ川 アチト・ノル湖の第三の源流はウリヤスタイ川といふ。これは餘り大きい水脈ではない。この河はトルゲン尖峰 (ラファイロフ氏はこの尖峰を二様に呼び、氏の旅行記にはウラスト。イ (註一)、氏の測圖にはヤマト。イミ記してゐる) を下り、一見、湖水に大部分の水を齎す主流のやうに見える。右の他にバイリメン山脈を下る一つの川 (ポターニン及びウラディミルツォフ兩氏はクウブ河と呼び (註二)、ラファイロフ氏はエンデルト。イミ呼ぶ) があるが、この川は六月ですら水量が頗る寡くて、幾つかの水溜を有ひ。右のウラスト。イミ合してウリヤスタイ河となる。

(註一) ボターニン著「北西部蒙古概観」第一卷所載

(註二) ボターニン第一卷一四頁及びザラディミルツォフ

アチト・ノル湖は北西より南東に伸びて、湖長は二〇露里を超え、湖幅は約一六露里である。深度はかなり大きいやうに見え、砂くも南西岸にありては、かなり急に深さに増し、峻しい岩質の山岬 (註一) が湖中に落ちてゐる

る附近に於て特にさうである。湖面は水位は四、六三〇呎を示す。(註二)

アチト・ノル湖と科布多河とを連絡するウスン・ホロイ排出河の長さは約五露里、幅は二—三〇「サーヂェン」で、その流れは頗る速い。この排出河はあまり高くない河岸に圍まれ、峡谷を北より南に奔流してゐて、相當な深さを有し、その河口ですら頗る深い。尙、このはアチト・ノル湖は南北の兩部に岐れ(北部は南部より數倍大きい)、廣い河峽によつて連結されてゐる。河峽の兩岸や湖岸には所々に蘆が生えて居り、湖岸の低地—北岸—東岸には、特に著しく繁茂してゐる。(註三)

(註一) ベフツォフ著書二五六頁

(註二) ベフツォフ著書二七六頁

(註三) ベフツォフ著書二五四—二五六頁

シビル川 この川は科布多河の左支流の内、第四番目の而も最後の支流であるが、ベフツォフ氏は此の川をシビル又はシヴイルタイミ記し、ラファイロフ氏の説と若干異つてゐる。尙、ラファイロフ氏のこの川に關する資料は照會によつて蒐めたものである。シビル川はハルクラ山塊の西斜面の水を集め、その下流地方に於ては廣々とした河谷を流れ、河岸には落葉松の廣い林地が伸びてゐる。川は急流で、所によつて、上流より運搬された砂利の間に分流をなして流れてゐる。(註一) 尙、この川と科布多河との合流點は、特にシビレン・ベリチルミ呼ばれてゐるが(註二)、これは他分、林樹の密生するところから付けられたものであらう。

(註一) ベフツォフ著書二五四頁

(註二) ボターニン著書三一九頁

次上で科布多河の左支流の説明を終り、次に同河の右支流に就て記述を試みよう。

三 科布多河の右支流

庫坦河 當河は一名クタン河とも呼ばれ、二つの大きい河——ウルモガイト。イ及びタスト。イ・ブラク——及びその他二、三の小川によつて涵養されてゐるこの陪鄂勒湖の排水河である。

ウルモガイト。イ河は同名の峠(九、八〇〇呎)より流下して、廣い河谷の、岩石や沼地に富んだ河床に這入り、幅員數十「サーヂン」に擴つて小さな湖を形成したり、又は沼澤に水を馳せる分流になつたりしてゐる。

ウルモガイト。イ(又はウルミガイト。イ)は、ムス・タグ山脈の氷河群より二條の源流を以て流出するダイン・スウ川を合してから、非常に大きな花崗岩塊や片麻岩塊の夥しい、長く廣い舊氷砕石丘の間を流下してゐる。そして舊氷砕石丘の東側に沿つて流れつゝ、廣い分流によつてダイン・ゴル湖に連なるウルモガイト。イ湖に注ぐ。

ウルモガイト。イ湖も亦、舊氷砕石湖で、湖長は凡そ五露里、湖幅は二露里近くあるが、深度はさほご大きくなく、岸は泥濘地である。尙、湖の上方にはウルモガイト。イ河の分流に養はれてゐる他の極く小さな湖が一つあるが、これは最近ウルモガイト。イ湖と共に一つの湖域を形成してゐる。

サボーチニコフ教授によれば、ウルモガイト。イ河はマローエ・オゼロ(「小湖」の義)を貫いてダイン・ゴル湖に注いで居るこのことであり(註一)、ダイン・ゴル湖附近に關する氏の略圖にも同様示されてゐる。然し、余がウルモガイト。イ湖にダイン・ゴル湖の南部との中間にある山脊から眺めた(註二)ところでは河系は廣く且つ短いものであつて、川名をつけるには余りに短く且つ廣いものであつた。それは廣い排出河であつて、寧ろ二湖を連續する水道を云つた方が當つてゐる。ボターニン氏も亦、同様に書いてゐる(註三)。氏の記事には、「ウルモガイト。イ川の注ぐ湖は、單にダイン・ゴル湖の南部に當るものであつて、同湖は北部の湖よりも遙に小さい。この二つの水域の間には狭い岩質山脈が在り、その山脈の中央部は中斷されてゐて、その中斷部によつて二つの湖は互に連つてゐる。而もこの凹所は、たゞ山上より眺められるのみで、岸から見れば、地狭が続いてゐるやうである」と述べられてゐる。

サボーチニコフ教授によれば、ダイン・ゴル湖の長さは約一二露里、幅員は八露里になつてゐるが(註四)、余の見取圖では、それよりもやゝ尠く、長さ一一露里、最大員幅六、五露里(註五)である。尤も、余はダイン・ゴル湖を南東より迂回したみで、湖の北部は少し推定的に地圖に示したから、余の資料の正確さを主張する譯にはゆかぬ。サボーチニコフ教授はダイン・ゴル湖はあまり深くないを見えてゐる。尙、同教授の引率せる探検隊員がこの湖の下部の岸に沿つてその深度を調べたところによるが、湖の南西側の實際の深さは一八・七呎といふ著しい深度を示し、湖の東側では、僅に六一—一三呎(註六)を示すに過ぎなかつたこのことである。ダイン・ゴル湖は氷蝕湖に屬し、

北西より南東に伸びて、梨形を呈し、湖岸は低くて、沼澤質の所が多いが、斷崖が水涯近くまで迫つて湖岸地帯を残してゐない所は二ヶ所ある。即、それは、湖の北西隅と南東部の狭い部分で、そこには峻しい岬が湖に深く喰込でゐて、頗る小さな入江をその兩側に形成してゐる。そして狭い地峡はこの入江よりも二—五「サージョン」高く隆起し、同湖と一小湖とを区分してゐるやうである。尙、この小湖は支流を有せず、浅いが、水流の急な川を水峡に向けて放出してゐるから、恐らく泉に養はれてゐるものと想はれる。

達階鄂勒湖面の水準は七、三一五呎である。(註七)

ダイン・ゴル湖は右に掲げた湖の源流の外に、尙、幾つかの川を受け入れてゐる。中にも最も大いなる川を看做すべきものは、既に曩に掲げたタストゥイ・ブラク(タスタ・ブラク)川で(註八)、この川はムス・タダ主峰の北東斜面を下る一永河に源を發し、深い峡谷を出で、エランガシト。ミいふ高い平野中をU字形を描いて流れ、ダイン・ゴル湖の北部に注ぐ。次に擧げねばならぬのは、水量の多い二つの川で、これは南東よりダイン・ゴル湖の南端に注いでゐる。六月になると何れも水量が増し、吾々はこれ等の川の淺瀬を渡つた際馱荷を水に浸したほきである。

(註一) 同著書三三三頁

(註二) サボーチニコフ教授の地圖には、この排出河の流程は幾らか大に見積られ、二・五露里と示されてゐる。

(註三) 同著第一卷四六—四七頁

(註四) 同著書三一四頁

(註五) カズナコフ氏は最大湖幅を六露里と測定してゐる(同著書一五頁)

(註六) 同著書三三五頁。然し、同著書三一四頁には大ダイン・ゴル湖の最大深度は五—七米即ち、一六、四—一三呎と記してある。

(註七) 上巻五二頁註二参照

(註八) ダラヌー氏はこの川をランガチと名づけて『この川は下流で二度小湖を貫流する』…と記してゐる。

達階鄂勒湖の北隅からは庫坦(又はクタン)河が流出する。この河の流れは極く緩慢で、水も清淨であり、水源より二露里の所で右岸よりコル・アガチ(又はクラガチ、クラガシユ、クラチともいふ)ミいふ川を受け入れる。後者の河口のやゝ上方には氷砕石層に堰塞されてきた小湖群がある。(註一)

コル・アガチには主脈の高い北部支脈アク・コルムの雪原より流下せる同名の二つの源流がある。アク・コルム峠の側にある源流は、同時(一〇、一七〇呎)の鞍部の南を塞いでゐる高所より發し、峠下のやはりコル・アガチミいふ湖(八、九八五呎)(註二)を貫流する。尙、この湖水は湖長約半露里、湖幅一露里を超えず、東より西に伸び、その南東及び北方の一部は圓谷を形成せる巨大な花崗岩塊に限定せられ、その圓谷の底部は岩屑や圓礫に埋つてゐる。湖の西岸は低く、沼澤に富み、漸次コル・アガチ川の河谷へ移る。コル・アガチ川は舊河底の氷砕石層の殘骸たる花崗岩の圓礫に富んだ、平坦な、しかも一部は沼地になつてゐるところの河岸を流れ、その間ベルクウト川を唯一の支流として受入れてゐる。この川は本流の河谷よりも高い位置にある氷砕石層に埋まつた湖を出て、右岸より本流に注ぐ。尙ベルクウト川の水量は寡くて、一部は沼地中に姿を消す。

コル・アガチの川第二の源流は南南東、サンダウト。イ山脈の雪原より流出して、第一の源流が湖より排出する出

口の六露里下方で同源流に合する。尙、その河谷は見渡す限り圓礫に埋められ、その間に幾つかの流れの急な分流を馳せてゐる。

第一の源流に合した後のコル・アガチ川は引續き平坦な沼澤に富む河谷の水砕石層の間を流れてゐる。尙この水砕石層はダイン・ゴル湖盆の周縁に於ては標高七、七五〇呎（註三）の高い障壁を形成してゐる。

鹿坦河はコル・アガチ川を入れて後四、露里の間は丘陵や舊水砕石丘の間を深い流れになつて蛇行し、それより開いたステップ性河谷に出で、かなり急な流れになる。こゝにはアク・コルムミと呼ばれる峠（九、六七五呎）（註四）に通ずるアスタウチャ・ブラク（一名、アク・コルム）川が幾つかの分流になつて注いでゐる。コタン河はこの川を入れて次第に北西に傾き、右方よりアシ・ブラクミいふ溪流を入れて科布多河谷に入る。（註五）

（註一） サボーヂニコフ著書九五頁

（註二） グラヌー氏も同様に呼び（同著書六〇頁）、且つ別名アク・キヨリと呼ぶとも附言してゐる。然し、余はアク・キヨリなる名を聞いたことはない。コルムと云ふ名稱は、土着民の間では湖名としてではなく、盆地や水谷の意義に用ひられてゐる。尙、ボターニン氏も右と同様に説明してゐるが（同著書第一卷五一頁）、ラフアイロフ及びサボーヂニコフ兩氏はこの名稱を湖名に轉用してゐる。

（註三） グラヌー氏の測定に據る。（同著書六〇頁）

（註四） カズニコフ氏はこの峠を越えてゐる。このアク・コルムをコル・アガチ川の源流に於ける同名の峠と混同してはならぬ。

（註五） サボーヂニコフ著書二二六頁

カラガント。イ川 この川はコタン河口の下方で科布多河に注ぎ、その右支流タルド。イ・ブラクミ同様、やはりカラガント。イといふ名稱の雪山群の北斜面に發源する。カラガント。イ川は七、二八〇呎の水位に於てタルド。イ・ブラクミ合流するも、同河口の上方に於ては廣い沙漠性河谷中の平坦な、所々沼澤化せる地域を流れ、その河幅は四——五「サージエン」を示す。カラガント。イ川の水は透明であるが、幽谷を流れるタルド。イ・ブラク川の水はやゝ乳白色を帯びてゐる。これはこの川（註）がカラガント。イ雪山群の斜面の水河より出てゐるこゝを示すものである。これ等の二つの川の流れる山岳は比較的高くなく、不毛で、空谷に刻まれてゐる。

（註） サボーヂニコフ 三一九頁

サクサイ河 科布多河の次の右支流である薩克賽河はその流域面積や水量の點では西部蒙古に於ける最も著名な河の一に數へられてゐる。この河は主脈の二つの雪峰群間のクイズイル・ガヤ峠（九、四六五呎）の兩斜面に三つの源流になつて發源する。その内、中央の源流は峠の西方に當る小さな水河より流出し、サクサイミいふ名稱が附されて居り、他の二源流の中、右方のものはブザウ山群の雪に發し、カラ・キヨリ河、左方のものをダラ・サイ河、ミ呼ば、これ等の源流の合流點には高い水砕石層が累積してゐて、その間を河は穩に廣い帯の如く流れ、湖の如く擴大する（註）。サクサイ河は右の水砕石層を脱し、鋭い岩屑や砂礫の散らかつた廣い荒谷に入り、左岸の山岳に寄添うて流下する。

サクサイ河はダラ・サイ河口より一二露里の所で、左岸に阿爾泰諾爾山脈の雪溪に源を發せるト。ルダン（テュル

グン)川を入れ、次いで二つのタ、バ、ト、イ、川を入れて水量を増し、サルイ・ゴビ(サルイ・コベ)の廣潤なステップ性平野に出て、大きい河となる。七月中旬、余はこの河の淺瀬を渡つたが、流れは急で、深さ三呎、幅六—七「サージン」を示してゐた。サクサイ河はこの平野で次の支流ボロ・ボルゴスン、ミ、ン、ク、ミを右岸に、又サルイ・ゴビ、チギル、タイ及びカラ、ブ、タ等の諸流を左岸に受入れて水量を増す。

(註) サボーヂニコフ 三九頁

ボロ・ボルゴスン河はタル・ノル湖より流出する。サボーヂニコフ教授は反對の東側よりタル・ノル湖に落ちしむるアングイルト。イをボロ・ボルゴスンの源流と看做してゐるが、これはボロ・ボルゴスン川が曾てアサウ山群に懸れる氷河を下り、アングイルト。イ川やタル・ノル湖の河谷を流れてゐたことがあるからであらう。然し、右の理由からするならば、寧ろ、コタン・スウ河の源流たるウルモガイト。イ川の方を源流と看做さねばならぬ譯である。

アングイルト。イ(註一)の主なる源流は山脈東斜面の、小さいが正しい形をした一氷河より流出し、この氷河は又サクサイ河の一源流たるカラ・キ、リ川をも養つてゐる。(註二)

この主要源流は小さな側流を呑んで水量を増し、氷河のために甚しく浸蝕された廣い河谷に入り、一〇露里下方でアザウ・クリ(一名ベリ、ノル)湖(註三)に注ぐ。この湖はこの邊では分裂せる「紅い山」(註四)の岩壁の間にあり、而も北方を高い氷砕石層にて堰止められた湖で、八、八二五呎の水位に在り、湖より出る川は、これ等の氷砕石層を迂廻しつゝタル・ノル湖盆に出て、平坦な沼澤化せる河岸を帯狀に蛇行してタル・ノル湖へ向う。

(註一) カズコナフ氏(同著書一七頁)はこの源流にチ、ミ、クといふ名稱を附したが、余はこの名を聽いたことはない。

(註二) サボーヂニコフ著書三三〇頁

(註三) 余の聽取つたところでは、この湖はブリヨン・ノル、アングイト、イ、タンチャ、クリ等と呼ばれてゐる。

(註四) タル・ノル湖盆に廣く分布せる砂質片岩は紅色ではなからうか。

タル・ノル湖(ダラ・クリ)は北西に伸びた廣い不毛の湖盆中であつて、水位八、三七〇呎を示し、湖長は一露里強に達する。最大湖幅は四乃至五露里で、丁度、湖の略々中部を占め、深い所は、たゞ北方よりこの湖中に落ちてゐる平坦な岬の對岸に有るやうである。湖底は粘泥質で、所々に粗粒狀漂礫が散らかつて居り、上述の岬附近を除いて、湖岸は一般に平坦で、湖に注ぐ河口附近のみ沼澤化し、草に蔽はれてゐる。

ボロ・ボルゴスン河はこの湖の北西より流出するも、タル・ノル湖盆内では、沼澤質の岸を持つ二つの小湖を形成してゐて、上部を高い氷砕石丘に取圍まれた峡谷に入る。尙舊氷砕石層の遺物は、その後、一〇露里(註一)の間の河岸及び、細流より(余はこの細流の四つあることを確めた)の集流せる河谷にも堆積する。

一露里目の所でボロ・ボルゴスン峡谷は南方に急折し、爾後、最初の特徴を一變し、その峡谷を塞ぐ山岳は單調な山貌を呈し、植物はステップ性となり、灌木の叢林は姿を消してしまふ。河谷の最も擴大した所は、河源より二五露里の所でボロ・ボルゴスン河に注ぐ左支流クリッチャ・サイミの合流點であるが、その後、河谷は再び狭められて峡谷に移る。尙、この峡谷は廣いサクサイ河谷への出口の手前の所で特に狭くなる。この邊の山岳は峻しく、

河は殊ん終日日光を受けないほどである。余は七月一日にこの山岳で氷の橋を目撃し、その河岸に沿ひ前年の雪原（標高七、七〇〇呎）（註二）のあるのを見た。ボロ・ボルゴスン河は右岸の山岳に寄添うてサクサイ河谷に向けて流れ、その後、一つの支流も合せずして、一〇露里下方で遂にサクサイ河に注ぐ。

（註一）余は片岩より成る山岳の斜面の、道が山岳を傳つてボロ・ボルゴスン峡谷を迂回してゐる箇所、最後の花崗岩の圓碎を目撃した。

（註二）グラマー氏の測定による。

ミシク川、この川は、たゞその名稱のみが判つてゐるだけである。この川は周囲の山岳に衝立つてゐるトシオン・タグ（別名シクトイ）雪嶺より流下して居り、恐らくカズナコフ氏の地圖に記載されたる四條のトシオン川（註）中の内の、東方の一流に相當するものらしい。

（註）サボーデニコフ教授はこれをトストイと名付けてゐる。しかも川の数は三條（ウチ・トストイ）とある。

サルイ・ゴビ川（烏梁海人はサルイ・コベミ發音する（註））はサクサイ河谷では平坦な、所々、沼澤化せる河岸を分流ミなつて流れて居り、半ステップ性の草類の生えた、牧草地の多い、廣い河谷を通過する。尙、これ等の牧草地は遊牧民にまつてはこの上もない貴重な遊牧地ミなつてゐる。余は六月末にこの川を渡つたが、流程はあまり長くなく幅は三「サージュン」で、本流の深度は一呎を示してゐた。

（註）サボーデニコフ教授はサラコフと記し、この名稱をジョルタヤ・ドリーナ（露名「黄谷」の義）と譯してゐる。

チギルタイ川、この川は一名、チギルタイ川とも云ひ、サクサイ河の支流中最も大きい川である。尙、この名稱は、カズナコフ氏の地圖にも載つてゐるが、遺憾ながら、氏の地圖にはこの川が誤示されてゐる。即ち、この川は右方よりジャラナシ（ジャンガシ又はジナガシとも云ふ）川を入れて居り、地圖によれば（註一）カラ・プタ（別名バルダム）河に注がずして、サクサイ河に注いでゐる様に記されてゐる。チギルタイ川は大道がそれを横切つてゐる箇所では激流を成し、河床には大きい圓礫が多くて、水嵩の大きい時には渡り兼ねるほどである。六月末になるに、流速は激しくなり、馬は脚を濡らされるほどである。他の渡場も概ね頗る危難で、殊に羊を渡すには非常に危険である。尙、余はチギルタイ川が果してラファイロフ及びカズナコフ兩氏の地圖にあるやうに、湖より流出するのであるか、それとも、主脈の雪から出てるのか、見届けることはできなかった。それは余の案内者がこの河の上流を視てゐなかつたからである。然し、その源流には、或る時代にサクサイ河谷へ下る氷河のあつたことが、全流域に互つて河床一面に漂石のあるのでも容易に察知し得られる。（註二）

（註一）ラファイロフ氏の地圖にもチギルタイはカラ・プタ河口の前で直接、同河に注ぐやうに示されてゐるが、これ亦誤りである。ボターニン氏はチギルタイとジャラナシの二つの川にカラ・プタといふ同じ河名をつけてゐる。

（註二）グラマー、六二一―六三三頁

ジャラナシ、この川は水量の點ではチギルタイ川よりも、やゝ小さいが、流れは緩かで、河床に敷かれた圓礫も比較的小さい。ジャラナシ川の河源地帯の状況は詳かでない。

カラ・ブ・タ川 この川は一名バルダム又はバルラムとも云ひ、アク・コルム峠より流下して、湖畔を貫流し、その後、サウダス・テベ川を入れ、サクサイ河の狭谷に入る手前で、同河に注ぐ。右は余の見取圖や、余が照會して得た追加資料によつたものである。これ等の資料はグラヌー氏(註二)のそれと略々一致し、ラファイロフ氏の地圖は若干相異し、又、カズナコフ氏の地圖も可成り異なり、且、サボーヂニコフ教授の地圖に表示されたものには、ダイン・ゴル湖とサクサイ河との中間の山岳地域に、概ね、精確を缺くものが多く、餘の資料も全く相反してゐる。尙、これ等の余の十分に理解し難い不一致な點に就いては、カラ・ブ・カ河谷の記事のところで精しく指摘するここにする。

アク・コルム峠の下では、カラ・ブ・タ川は、頗る大きい花崗岩層の間を細流となつて流れ、河川は泥地を形成し、全山腹をして所謂「石沼」に化せしめてゐる、この石沼に於てカラ・ブ・タ川の源流が形成される。カラ・ブ・タ川は峡谷の左側に寄添ひつゝ流れ、石沼より二露里先でアク・コルム湖(グラヌー氏はこれをカラ・クリミ呼び(註二)、サボーヂニコフ教授はカラガシミ呼んでゐる)へ流入する。この湖は八、七七五呎(註三)の水位を示し、湖長約二露里で岸は沼澤化してゐて、泥澤に富む。湖の東端より流出する川は二つのあまり大きくない氷蝕湖を貫いて、アク・コルム湖より幾か大きいサウダス・テベ湖に入る。カズナコフ氏のアク・コルム峠よりの下坂に沿つて出た湖は他分、このアク・コルム湖であらう。サボーヂニコフ教授の方は何うかといふに、氏の地圖には、アク・コルムの排出河は東流せずして北東流するやうに示されてゐる。が、サウダス・テベは全く圖示されてゐないで、その代りに、

クトロゴイといふ他の湖が示されてゐる。然し、そこは、サウダス・テベ界標であつて、余はそこに右のやうな湖を見受けなかつた。因みに余は、たゞ文献に基いてこの湖を右のサウダス・テベ界標に記入して置いた。サボーヂニコフ氏の地圖はこの文献とは一致してゐない。

カラ・ブ・タ川はサウダス・テベ湖の出口より四露里目の所で、左岸に、同名のサウダス・テベといふ川を入れる。この川はアク・コルム峠の南に當る山岳に源を發し、山中よりサクサイ河谷の西部延長たる、廣いやゝ波状をなした河谷に出で、低い沼澤質の岸を流れ、この河谷にカラ・ブ・タ河谷を分離せる左岸の山岳に沿うて駛る。この川はサボーヂニコフ教授のベルリヤンミ呼ぶ川を左岸より受け入れつゝ、轉流し、カラ・ブ・タ河に合する。尙、ベルリヤン川は極く小さい川であるが、同氏は之を誤つてサクサイ河に直接流入するものにしてゐる。

カラ・ブ・タ川はサウダス・テベ川を入れて、峡谷に出で、それをサクサイ河に合するまで流れる。カズナコフ及びグラヌー兩氏はこの峡谷(正確に云へば狭い河谷)を通つてゐるが、カズナコフ氏の記事からして、この峡谷は不毛で、岩石に富んでゐる、ミ云ふここのみを知りうるに過ぎない。(註四)

(註一) グラヌー著書附圖第五〇號

(註二) 同著書六一頁

(註三) 上巻六〇頁参照

(註四) 同著書一六頁

サクサイ河は上記の如き多くの河川の水を集めつゝ深い峡谷に流入する。峡谷には落葉松林が見えるが、これはこの河の流域に於ける最初の樹林である。峡谷は數露里の間續くが、その後緩傾斜せる荒れたステップ性河谷に移る。この河谷は河口の上方二〇露里の所では谷幅三——五露里を示し、そこには岩層に蔽はれた、而も谷によつて深く刻まれた河岸段丘がある。河はこゝでは綠草地帯と樹林帯との間の屈曲した幾つかの河床を流れてゐて、その本流の河幅は一五——二〇「サージョン」に達する(註)。これより河谷は、山岳のために再び狭められ、河岸段丘は落葉松やポプラに縁ざられた一河床に纏つた河を壓迫して絶壁となり、河中に落ちてゐる。この峡谷は七露里の間續き、爾後、サクサイ河はウラン・フスウ・ステップの廣潤地に出で、廣い三角洲を形成しつゝ科布多河に會流する。

(註) サボーチニコフ著書三三八頁

ト。ルゲン川 比較的高くない沙漠性山岳はサクサイ河を科布多河の次の支流たるト。ルゲン川より分離してゐる。グラヌー氏はこの川と連絡するトルボ・ノル湖を南方より迂回してこの川を通過してゐるが、氏はその通過した部分の道程の記事を掲げてゐないから、この湖に就いては、たゞ大いさがタル・ノル湖に似てゐて、同湖盆に近似せる盆地に在るこいふこと(註)しか判らない。グラヌー氏はラファイロフ氏の報道を検討せずしてト。ルゲン川をサクサイ河に注がしめてゐるが、サボーチニコフ教授(註)が現地で認めた所では、これは間違つて居り、ト。ルゲン河は事實上、科布多河に注いでゐる。

(註) 同著書六四頁

(註二) 同著書二四一頁

カト。川(別名ハト)。この川も、ト。ルゲン川と同様に詳でない。この川は下流では、廣潤な河谷の落葉松林に繞された、圓礫や粗粒状砂礫に埋まつた河床を流れてゐる。河谷の上方は、次第に狭まり、遂には雪の斑點を附けた高い山岳間の峡谷に連り、その全流域に互つて、暗綠色の林帯と圓礫砂利の推積してできた段丘が連續してゐる。尙、カト。河はトシユン雪嶺より流下するやうである。

烏哈河 當河の上流の河谷は五——八露里の幅に達し、泉や濕草地に富み、河はその間にあつて水量の多い流れを形成する。ウフィン・ダバ峠下に於て北方の方向を急に東方に轉じ、科布多河谷に出るまでは峡谷を過ぎる。

チヂステン・ゴル川 この川は恒雪を戴くダルバン・ツァサト。山脈の北東斜面を下る小さな川であり、科布多地方では、その河谷に立派な落葉樹林が生長し、良材の産地として有名であり、これらの木材は科布多市に搬出されてゐる。

ホヌル・ダレン川 この川の状況は、その名稱以外には何も判つてゐない。

以上で科布多河域に關する報道は盡きる。

第二節 ブヤントゥ河

阿爾泰諸爾山脈の北東斜面を下る哈喇烏蘇湖流域に屬する第二の著大な河はブヤント。河である。この河名は同

河の二つの主要源流（デリュン及びチギルタイ）の合流點以下を指すものである。

一 プヤントウ河の支流

デリュン河 當河（註一）の河源はトシュン・タグ及びティエクト。イ兩雪嶺を圍繞せる山岳中に在る。この山岳の脊稜は、ポターニン氏を始め、その後、サボーデニコフ教授、グラヌー氏及び余等のこの河へ出た箇所近くに聳えて居るが、その山岳の南に横はる前山が、デリュン河谷（註二）の上流を深く踏査することを妨げてゐるため、これ等の雪嶺の模様は不明である。デリュン河はティエクト。イ河谷に面する所で廣い圓谷に溢れ、それより主流は幅四露里の間に廣つた、而も東西兩側より帶狀をなして圓谷を取巻く二つの河床に分れて流入する。この二つの河床の水量は寡いが、河谷の下方では多くの細流を入れて水量を増して居るため、河は可成り大きい流れになつて圓谷の南部に流入する。

デリュン河の圓谷内には、嘗て淺く廣い湖が有つたらしいが、現今では、一部はソロンチャク質地帯一部或は細流によつて沼地澤化せしめられた草地（註三）になり、左方より、二つの支流から成るティエクト。イ川を流入せしめてゐる。右の二支流中、一はティエクト。イ峠の濕潤な南西斜面に發源し、他はティエクト。イ尖峰の小氷河より流下する。この兩支流は合して溪流になり、最初は草に蔽はれた沼澤質の斜面を持つ峡谷を流れ、後二つの圓谷の南になつてゐる。尙、この圓谷は殆んき黒色に近い粘土質片岩より成る狭い岩質山脈によつてデリュン河谷より分離

されたものである。ティエクト。イ川は右の山脈を迂迴して南に轉じ、數露里下流で、デリュン河に注ぐ。尙、ティエクト。イ川はその全長を通じて削剝を蒙つた氷砕石層の間を流れてゐる。

デリュン河はティエクト。イ河口の下流に於て一河床に集り、不毛に近い河谷の脆弱な地層を浸蝕しつゝ、數露里を経てチギルタイ河に合する。

（註一） デロウンとも發音する。

（註二） サボーデニコフ教授の照會情報によればデリュン河谷よりトルボ・ノル湖盆に通ずる、車の樂に通れる峠路がある。

（註三） この草地の標高は七、四〇〇呎を示す。この數字は左の測定を平均したものである。

グルム・グルジマイロ測定……………七、五二六呎

サボーデニコフ氏 ……七、二八二呎

平均……………七、四〇四呎

チギルタイ河 當河はキチ・カイルト。イ（註一）及びアングイルト。イ兩河の上流地方の間にある主脈に發源し、三つの源流を併せて廣潤不毛の河谷に流入し、そこで柳屬の點生せる平坦な綠草地の、而も浸蝕された氷砕石層の間を流れる。河源より二一露里目の所で河は湖長約三露里（註二）の湖に向けて流れ、それより河の兩岸には沼地が多くなつて来る。チギルタイ河はこゝで、やはり舊氷砕石層の間を蛇行するアラサン川を右岸に受入れ、遂にデリュン河に注ぐ。チギルタイ河谷からは、アングイルト。イ及びキチ・カイルト。イ河谷に通ずる山道が出て居り、アラサン河谷からはキチ・クウ・イルト。イシ河谷に通ずる山道がある。サボーデニコフ教授は前者を通つてゐるが、

その附近には更に他の二條の山道のある、こゝを同教授は照會によつて知り得たもの、こゝである。(註三)

(註一) 然し、サボーチニコフ氏の地圖より推定するに、チギルタイ河の右側河源は阿爾泰諸山脈にあり、そこは又、キチ・タイ
ルト・イシ河の源ともなつてゐるらしい。

(註二) カズナコフ氏はこの湖長を五露里と見てゐる(同著一八頁)

(註三) 同著書一八三、一八六頁

二 Bryantov 河本流とその支流

チギルタイ河口以下の德里ン河は既に Bryantov。(又は Bryantov、ビヤント、イ、ビヤント) 河なるが、これはカズナコフ氏の見取圖では一〇露里、サボーチニコフ教授の地圖では二〇露里の間、南南東及び南東の方向に流れ、この區域で右岸よりトングリユク及びジャングイス・アガチ川を入れてゐる。カズナコフ氏は Bryantov 河の右岸を過ぎてゐるが、自己の見取圖(註)にはそれを表示してゐない。恐らくこの二川は Bryantov 河に達するまでに途中で不毛な河谷の脆弱な地層に全部、吸収されるて了ふものと思はれる。尙、これはカズナコフ氏の調査によつても證明されてゐる。氏は Bryantov 河谷に於て、ジャングイス・アガチ河谷の入口に面する所に幾つかの小湖(一部は鹹水、一部は淡水で、*Tasiagrostis* sp. の群叢に圍繞されてゐる)を目撃して居り、これ等の湖は伏流をなすジャングイス・アガチ河の水に養はれてゐるらしい。尙、この界標はポルト。(又はバルト)と呼ばれてゐる。

(註) グラヌー氏は Bryantov 河流域のこの部分に於てカズナコフ氏の行路を辿つてゐるが、これらの二川に就いては何も述べてゐない。

ジャングイス・アガチ川 當川は一名ハンツハン・モド川とも云ひ、その上流に關してサボーチニコフ教授は次のやうに述べてゐる。

ジャングイス・アガチ峠を起へると直ちに急傾斜せる雪原とその雪原下の、舊碎堆石に埋められた深い小湖と共に同名の川が見える。氷砕石層の間には氷河の流動作用を蒙つた地層に特有の盆地も目につく。最初の源流には曠て、右方の狭谷より第二の源流が流入してゐるが、植物は間もなく姿を消し、河谷は次第に潤ひのない不毛地に變つて行き、ジャングイス・アガチ河の水嵩は一般に増加する。(註一)

この河谷からはクウ・イルト。イシ河谷へ通ずる峠路の外に、ブルゲン河谷へ通ずる通路もある。後者はジャングイス・アガチの右支流タシヤント。川の上流にあつて、車馬の通行し得る通過の樂な道である。(註二)

(註一) 同著書一八五頁

(註二) サボーチニコフ著書一〇二頁

トングリユク川(テングリユク) この川に就いては、たゞ、それが上流地方に於て舊氷砕石に埋まつた河谷を流れ、その氷砕石層の間にかなり大きな湖を湛へてゐること、及び周圍の山岳に針葉樹林が見え、阿爾泰諸嶺の東斜面では珍らしい現象を呈してゐるこゝより外に判明してゐない。

ブヤント。河は右に掲げたボルト。界標からは、既に、幅八——一〇「サージョン」の大きな河となり、北東に急折し、草類蔽はれた平坦な岸を流れる。而も、この種類は隣接高地へも生へ上つてゐる。この河區に於て、河はタブン・サラミエルゲネクミの二つの川を受け入れる。これ等の川は右岸の山より流下し、ブヤント。河へ向けて幾つかの分流を派生せしめて居るため、その河口附近のブヤント。河谷は沼澤化してゐる。ブヤント。河はエルゲネク河口の下方一〇露里の所にあるキューシ界標に於て北方に轉流し、東方よりティエクト。イ雪嶺を迂廻して片岩や花崗岩より成る屈曲の多い峡谷に入る。道はこゝでは幾回もなく河を横切り、時には、岩崩れのした所を迂廻したり、或は牧草や落葉樹林に蔽はれた岸邊を流れる河へ下つたりする。こゝの峡谷の絶壁は山峽や側峡谷に刻まれ、周囲の斷崖と同様、その斜面は塵埃に蔽はれて薄暗い灰黄色を呈してゐる。

ブヤント。河は三〇露里ほどの間岩頭中を流れ(註一)、それより河谷は急に五——一〇露里に擴大する。尙、この河はこの廣潤地へ出る手前でティエクト。イ山脈より流下せる大きなコス・テレク川(註二)を入れる。

(註一) カズナコフ著書二〇頁

(註二) この川はカズナコフ氏の地圖には存在しない。

コス・テレク川 當川は一名ハト・ウリヤスタイ川とも云ひ、二つの源流より成り、その右方の源流は大きくてティエクト。イ雪嶺より發し、左方の源流はティエクト。イ峠の下の濕地の水を集めて、花崗岩塊に埋まつた沼澤質草地を過ぎ、その途中で左岸の山々より流下せる若干の細流を合してゐる。この二源流は峠(標高一〇、七五〇呎)

(註一) より七露里の所にある高い段丘の下で合流する。尙、この段丘からは、長い千鳥形の路が下つてゐる。段丘は東方に向けて約四〇〇呎の深さに斷層してゐて、厚い端堆石層より成り、河はその岩端より、深い河床を削蝕しながら、幾つかの急瀧となりて流下してゐる。

コス・テレクはこの氷砕石層を過ぎるに、暫くの間沼澤質の草地に沿つて流れ、次いで峡谷に流入するが、その峡谷は花崗岩塊や岩層に埋められて居る。尙、岩層の一部は近代のものであり、一部は舊氷砕石層の殘骸である。道はこゝで頗る峻しくなり、附近の山岳は塵埃のため灰黄色を呈し、草木なく、極めて單調である。コス・テレク河は激流をなしてゐて、水嵩の低い時にのみ渡渉しうるが、六月頃の渡河は非常に困難である。右の二源流の合流點より二三露里目の所に於て、科布多市への道路は河を遠ざかり、河は南方に方向を轉じて岩頭中に流入し、道は狭谷に沿ひ、標高七四〇呎(註二)のウゲゼン峠へ上る。

右の峠よりの下坂は空谷に沿ひ、コス・テレク河口の下方五露里の所、即ちブヤント。河が急流となりて峡谷を出る地點より餘り遠くない所で同河畔に出る。ブヤント。河は七月には、その本流の河床では深さ二・五呎を示し、流れは頗る急で、幅一五——二〇「サージョン」を示す。尙、ブヤント。河の河床は平坦で、堅固であるから、渡河は水嵩の大きい時でも容易である。

當河は渡場の附近で分流化して右岸の廣大な面積を浸すも、その後河區は狭くなり、河床は沙漠の地層に喰入り、(河中に出來た島は水面上に低く隆起せる狭い砂礫地帯に移る)、遂には渡場より一六露里の所で北西より河谷に

迫る岩質山岬を迂回し、幅一〇「サージューン」の（水量の多い時には深い（徒渉し得ない）一河床に纏まる）河となる。しかし、河はその先で、再び分流化して綠草地を流れる。尙、この地域は科布多市へ來る隙間の唯一の停泊地になつてゐる。ブヤント河は科布多市を西より迂回し、引續き北東の方向を取り、七露里を過ぎて、科布多市の圓谷ミハラ・ウスウ湖盆を分離せるアルシャト。イ花崗岩山の狭谷に入り、延長一露里を超えるこの狭谷を出るに、夏の終には普通溜滞するところの、コルンミいふ細流を左岸より入れて、東方に折れ、三〇露里先で哈喇烏蘇湖に注ぐ。

以上はこの河に關する狀況の總てである。

(註一) 精確に云へば一〇、七四五呎である。

(註二) この標高はサボーヂニコフ氏の測定によるものである。

第三節 ツェキル・ゴル及びチルガラント河並びに哈喇烏蘇湖

哈喇烏蘇湖に注ぐ河には科布多及びブヤント河の他に、尙ツェキル・ゴルミチルガラント。(註一)の二河川があるが、ツェキル・ゴル河に關しては信頼するに足る河系圖がないため、その狀況を完全に取纏めることが出来ない、のみならずこの河に關するラド・イギン氏の記事(註二)も十分に理解出来ないのは遺憾である。當河に就いて現在判明してゐるところのものを記述すれば次の如くである。

(註一) 兩河に關する記述はポブドネーエフの書より引用す。

(註二) 同著書六六一七〇頁

ツェキル・ゴル河 當河は一名ドンド・ツェヒリン・ゴルとも云ひ(註)、ツァガン・オボゲン山脈の一水河に發源し、最初の一露里は林や草に蔽はれた景色の住い幽谷や、或は沙漠性の不毛の狭谷を流下し、次いで河岸近くに高く聳えた巨巖に兩岸を狭められつゝ、河は巨岩に埋つた狭い峡谷へ入る。而も、この様な特色はこの河の左支流ウリヤスト・イン・ゴルの河口の下流約四〇露里の間にも現はれてゐる。

(註) ボターニン氏はこの川をウルト・ツェキルと名づけ、又、ウリヤスト・イン・ゴル川をドンド・ツェキルと呼び、これを本流と看做してゐる。

ウリヤスト・イン・ゴルはドロン・ヌリン・ゴルミ云ふツァガン・オボゲンの一水河に發源し、その上流ではドロン・ヌル廣谷を走る。ドロン・ヌルミは「七つの湖」の義で、この河谷には上流の多くの廣い沼澤より流出せる水によつて養はれた數個の小さい水溜りが散在する。ドロン・ヌル・ゴルはこれ等の湖沼の排出川や、左方より流入せるアスハタ・ツェン・キョリ川を容れ、一三露里の所で狭い峡谷に入り、そこで初めて上記のウリヤスト・イン・ゴル川と合流する。この川は約二〇露里の間、本流の峡谷の如く甚しく荒れた、草木のない岩質の峡谷を流下し、最後にツェキル・ゴル河に合流する。

ツェキル河はウリヤスト・イン・ゴル河口より五露里の間片岩より成る峡谷を流れ、それを過ぎて花崗岩質の河

谷に入る。この河谷は最初に、圓谷に擴大するが後に荒蕪地に變り、從つて隊商の通行には頗る難路となつてゐる。河は灰色粗粒狀花崗岩よりなる高い裸巖壁に押し狭められ、その透明な水は岩より岩に突き當つたり、又斷崖に向けて殺到しつゝ、遂には高い有刺錦雞兒に蔽はれた巨巖に壓迫された河岸に流入する。從つて此の河區を通る山道は峻巖を這上つたり、又は水汀を通つたりして續いて居て、文字通り狭道であるため、駱駝に乗つて通ることなきは到底考へられない。

ツェンキル峡谷はツェンキル河とその左支流ハイト・ツェンキルとの合流點の六露里手前で終つてゐる。ハイト・ツェンキルの源流に就いてはサボーチニコフ教授が若干の報導を齎してゐる。(註一)

ハイト・ツェンキル河、この河の上流はココ・ベリチル(註二)と呼ばれ、二つの源流を有つが、その左方のものに就いてはサボーチニコフ教授は、たゞその名を掲げるのみに止め、詳述してゐないが、右方のものに就いては次の様に記してゐる、即ち「この源流は左方の源流と合するまでに峡谷を過ぎ、この峡谷の上部にはコブド・ヌル及びバガ・ヌルの二湖を形成して居る……」云々。ハイト・ツェンキル河は左右二源流の合流點——ココ・ベルチル自然界標(標高八、八六〇呎)の下方に於て舊氷砕石層の殘骸を有つ河谷を流れる。

(註一) 同著書一一二頁

(註二) サボーチニコフ氏はホホ・ベリチルと云ふ名稱を、センキル(一名ハイト・ツェンキル)河を形成する河川の合流地の名に當て、河名には當てゐない。

ハイト・ツェンキル河口の下流六露里の所で、ツェンキル河(當河はこゝではグルブン・ツェンキル(註一)或はトグライン・ゴルミと呼ばれる)にはボトゴン・ゴル川が注いでゐるが、この川は冬になると本流の河谷に達するまでに涸渇して了ふ(註三)。尙、カズロフ氏の引率せる探險隊は一八九五年にこの河邊を通つてゐる。

(註一) ボターニン著書第一卷一〇一頁、ボズドネーエフ著書第一卷二九九頁

(註二) ボターニン著書第一卷一〇一頁

(註三) ラド・イギン著書六六頁

ツェンキル河は山を出るに、沙漠性の特徴を有つ河谷に流入し、河は相當水量の多いにも抱らず、河岸の樹木を生長せしめるに足らず、河岸には大小の圓礫が散在し、稀に矮小な錦雞兒や、瘦せた柳の叢が點在するに過ぎない。然し、ボトゴン河口より六露里降つて、トグライグ・クリリ廟の下方やツェンキル河谷のオシ巖の下方に至れば、既に樹木が見受けられ、その先、河が兩岸を沼澤化せしめてゐる所や、洪瀆地には蘆、雜灌木及び矮樺林も現はれてゐる。河水はハラ・ウス湖に達するまでに殆んど總て札哈沁人(註)の耕地に誘導されて了ふので、ハラ・ウス湖に達する水は極く少量である。

(註) ボズド・ネーエフ著書第一卷二九九—三〇〇頁、尙、マト・ソフスキイ氏は(ボターニン著「北西部蒙古概況」所載「科布多・烏里雅蘇臺市間道路の地形解説」)は、この河にバイン・ホシの名を與へ、この河口附近の渡船場に就いて、『分派の河床は深い泥より成り、河岸には、兩期明けであつたためか、脆弱な鹽沼が廣く擴り、それらの箇處では駱駝を通すのに非常な努力と手数を費した』と書いてゐる。尙、ベツツァフ氏はこの川をハラ・ウスと呼んでゐる。

に湖を圍繞して居り、蘆もこゝでは草と同様の繁茂状態を示してゐる(註四)。蘆の間に見へる水面はステップに散在せる小湖の様に見える、ポターニン氏は春の初めにハラ・ウス湖のこの區域へ来たが、當時湖はこゝでは獨立した小さい沼に分れてゐたこのこゝである。(註五)

湖のこの部分には島が多く、蒙古人はこゝを冬營地に利用してゐる。彼等は蘆の間に居住する方が、吹きさらしのステップに居るよりも餘程暖いといふてゐる。これ等の島は平坦で、管て湖底であつた。然し、ハラ・ウス湖には他に岩質の島もあり、その一つアクダシ島は湖の北東部より半露里の所(註六)に隆つてゐる。

(註一) 同著書第一卷四三頁

(註二) 同著書第一卷三三三頁

(註三) ポターニン第一卷九八一—一〇〇頁

(註四) マト、ソフスキイ氏(同著三六四頁)は『殆んど二〇露里に亘つて北に伸びてゐる』と記してゐる。

(註五) 同著書第一卷九九頁

(註六) マト、ソフスキイ著書三六五頁、この島はポターニン氏のアクブイシに非ずや?

湖の南東岸には幾らか浅い入江が在り、入江は蘆に被はれてゐる(註一)。こゝでは湖岸はデルガラント、ハイルハン山脈の前山に壓迫されてゐるため非常に狭く、水際より五〇「サージョン」の間にはかなり雜草の多い砂質波状地がある。尙、岸はデルガラント。山脈より湖中に突出せる岩質山岬の附近では急傾斜してゐて、岸の所々には狭く長い蘆地がある。而も、蘆は湖の排出河サイハン・フリツヂ(註二)の流出口附近を遠ざかるに従つて益々廣く

繁茂し、こゝに擴がる蘆地には岩質の高地が現はれ、湖に向つて鋭い山岬となつて突出してゐる。尤も、これは水際にまでは及んでゐないが、ザークミして知られてゐる湖の北部を切斷してゐる(註三)。この入江は山岳を繞らしてゐるも(西方よりチゲト、東方よりセルミ云ふ高地が)、この邊は最も調査の行はれてゐない地方であり、その詳細は説明し難い。冬には、湖の他の部分は鏡の如く氷に蔽はれるが、この入江に於ては湖面に氷塊が浮ぶだけである。就中、ハラ・ウス湖の入江には大きい數個の水溜があり、その平坦な湖岸には蘆地が點在する(註四)。

湖の水位は三、九〇〇呎(註五)を示し、湖周は、資料が區々で確言し得ないが、一四〇露里(註六)乃至一七五露里(註七)に及んでゐる。

ハラ・ウス湖よりハラ・ノル湖へ向けては支流が有り、又ハラ・ノル湖はツァプハン河へ水流を伸ばしてゐる。尙、これらの排水河に關する説明はツァプハン河流域の項に於て行ふであらう。

(註一) ポターニン、第三卷八五頁

(註二) この河に關する資料は後章に於て述べるであらう。

(註三) ポターニン、第三卷八四頁

(註四) ボズド、ネーエフ著「蒙古及び蒙古人」第一卷三四四頁

(註五) 上卷二六五頁參照

(註六) ペフツァフ著書二五頁

(註七) 參謀本部四十露里地圖による。

第十章 杭愛高原を下る河川並に

西部蒙古中央部の小流域

第一節 杭愛高原を下る河川と湖沼

杭愛高原は西蒙古内では帖斯、札布干、拜達里克及び色楞格の四大河川を灌養してゐる。中にも、初めの三河の流域は全部、吾々の取扱ふ範圍内にあり、色楞格河にあつては、倭帖爾、チュルト、及び德勒格の三支流のみが吾人の取扱ふ範圍内に屬する。

一 帖 斯 河

既に、曩に指摘した通り、現存の地圖には帖斯河の上流地方は甚しく誤つて描かれて居り、この地方に關する照會資料(註一)も大して信用できぬものであるがために、余はこの種の資料に據らずして、主にウヰズネスキイ氏及びドロゴスタイスキイ氏等の見取圖ミ、ミヘーエフ大尉の行程記事に據つて今後の記述を進めることにする。帖斯河(一名テシン・ゴル)はガンド・イン(又はカンド・イン)湖の南西のボルナイ山脈に二つの溪流を以て發源し、その内、右方の溪流は標高七、三七五呎(註二)の高所に源を發してゐる。この二溪流は共に北西の方向に流れ、

先ず三露里の間、同一の河床を辿り、爾後、西方に急折して二〇露里の間、ほど同じ方向を持續し、その後、左支流フレ・ハラグウル川の河口を過ぎて急に南方(註三)へ轉流する。それより、帖斯河はボルナイ山脈を下る幾つかの溪流を呑んで、河谷の沼地に富んだ地層中に一——二「サージュン」掘り下げられた河床を流れ、深さ約一・五呎、幅三「サージュン」ほどの川となつてアスハト・イン・ゴルの河口に達する。

(註一) 上卷第二章二〇六五頁及びそれ以下参照

(註二) 帖斯河の河源に就いてドロゴスタイスキイ氏(帝立ロシア地理協會時報)第四十四輯一九〇八年三三九頁所載「北西部蒙古旅行」は曩に同氏やウヰズネスキイ氏が帝國學士會に提出せる見取圖と異る報導をなしてゐる。即ち氏の「北西部蒙古への旅行」に記するところに據ると、「帖斯河の上流は頗る景色が佳くて、靜穩に西に傾斜せる廣谷には、各種の水鳥が無數に棲息せる細い圓形の淡水湖がある。これらの湖は帖斯河の上流を築ふ主要河源になつてゐるやうである。帖斯河下流の河床は乾涸して居り、たゞ所々の深い冗に水溜があり、源流より二〇露里の間は水流が目立つて早くなるが、それも普通の河川の流から見ると頗る緩かなものである……」と。而るに、ミヘーエフ大尉はこれと全く反對の事を述べて居る。この矛盾は兩探險家が種々な川を帖斯河の源流と看做してゐるからである。尙、上部帖斯河に就いてはポーホフ氏の「薩彥山脈と蒙古を越へて」の記事を参照されたい。

(註三) ミヘーエフ大尉の見取圖に據る。

アスハト・イン・ゴルに就いては、何等地理上の文献がもないが、ドロゴスタイスキイ及びウヰズネスキイ兩氏の見取圖から察するに、尠くも上部帖斯河中最大の左支流の一であるらしく、當河はボルナイ山脈に發源し、頗る谷幅の廣くなつてゐる帖斯河谷に向つて流れ、同河に合するまでは、北東の方向に流れてゐる。帖斯河はこの

河を合して後、これまでの北西の方向を急に北方に轉じ、長さ約五露里の狭谷に流入する。尙、帖斯河面のこゝでの水位は六、三〇〇呎に及ぶ。爾後河は再びその方向を變じて、殆んど直角をなして西轉し、次の支流ジリムタイ川（又はジレムタイ、ジロムタイ、ウアル・ジニルマタイともいふ）の合流點まではその方向を變へない。尙、この川の上流は、ミヘーエフ大尉が通つてゐるが、同大尉の日誌からは、たゞ「この川の谷は下流では沼澤質の広い面積を有するも、上流では次第に狭まり、河口（註二）より三〇露里の所では、僅に一〇〇——一五〇「サージン」の谷幅を示すに過ぎず、そこから南方に向ひ、同川の發源するボルナイ山脈に喰ひ入つてゐる……」と云ふことだけが判明してゐる。

帖斯河はジリムタイ川の三角洲の下方で北西に轉じ、ガグイスファイル・ゴル河に達するまで、凡そ四〇露里の間は方向を變へない。この區域に於ては、ウズネセンスキイ及びドロゴスタイスキイ兩氏の見取圖から判斷するに、河は初の二二露里の間、左岸の山岳に寄添つて廣谷を流れ、モガイ界標を脱出して峡谷に入り、ガグイスファイル・ゴル河口（谷はこゝで俄に五露里まで擴大する）の直前の所で、峡谷を出るらしい。（註二）

帖斯河は、こゝで西の方向を取り、一五露里の間、北方より迫る山岳によつて形成される短い峡谷を過ぎてゐる。尙、山岳は殆んど皆河谷に向けて急傾斜してゐる。帖斯河は右の峡谷を出ると、深さ一・五——三呎、幅二〇「サージン」に達し、かなり水量の豊富な河となる。河はかやうな流れをなして流れ、ガグイスファイル河（註三）の河口より四〇露里の所で、同河の右支流シャプリン・（又はシャビレン・）ゴル河口に近付いてゐる。

シャプリン・ゴル河はイヘ・ハルズイン・ダバン峠（標高七、七四〇呎——禿頭の峠の義で、事實、峯頭には樹木はない）の西斜面に發源し、沼澤質の河谷を流れる。尙、同河谷の北斜面は落葉松林を有し、結晶石灰岩より成るも、シャプリン・ゴルの河口や河源に近づくにつれ、粗粒花崗岩に變る。シャプリン・ゴルはテリン・ゴル（註四）やイヘ・ヤムトイ等の細流をその右岸より受け入れて、幅五「サージン」、深さ約一呎（註五）の急流になつて流れ、下流では多數の支流を入れて水量を増し、大きな河となり、南方のアルト・イン・クリン・ヌル（又はニウル）山脈の側に轉流し、狭い峡谷に沿ひ、同山脈を北より南へ横切つてゐる。

帖斯河々谷はシャプリン・ゴル河口からは、俄にその特色を變ずる。植物の被覆状態を見るに、上流では河谷は高いステップを呈してゐるが、こゝでは、主に矮樺の林帯に變り、河は所々分流化して、屈曲した、而かも、往々にして沼澤質の河岸を緩流し、又河岸の所々には断崖が突出してゐるが、概ね、この邊の河谷は廣くなつてゐる。

帖斯河にはシャプリン・ゴル河口より一露里下流の所で、その左岸よりツイツェルリク川が流入する。この河は二つの溪流より成り、その右方のものをガルト、左方のものをツイツェルリクと云ひ、何れもダステ・ノル（ダステ・ヌル）湖の西方に當るステップ性臺地に發源してゐる。

この川は著大な流域を占め、その下流に於ては錦鶏兎の繁茂せる廣いステップ性の谷を流れるが、夏の中頃には、概ね全く涸渇する。

帖斯河はツイツェルリク河口より、更に約七露里の間西流して、左岸にショリン・ホトク川（註六）を入れ、アル・ウニゲ

ン川(又はアル・ウヌイグテン)蒙古語「河裏の狐」の義)の河口に達するまでは同じ方向を流れる。尙、右のシェリン・ネトク川は水位五、二二〇呎の所で、直接本流の河床に注がずして、遠く西方を回流せし、本流の分流に注いでゐる。アル・ウニゲン川はその下流でツァイグイル川(ザイグイル)の流れる河谷に於て多くの分流に岐れる。このツァイグイル川も亦、分流化してアル・ウニゲン川と共に廣い一大三角洲(註七)を形成してゐる。尙、この水流網の中央部は混淆林となつてゐて、それより各方面に溪流が派生して居り、一つの島のやうな地形を呈してゐる。これ等の分流の中には頗る大きく、深いものもある。(註八)

アル・ウニゲン川はウニグウト・ダバン峠(六、九〇〇呎)より西方に流下し、ツァイグイル・ゴル川の河谷への出口に達するまでは同じ方向を取る。廣い河谷の左側の斜面は林地で、河床に沿うて伸びてゐるが、右側の斜面は無林帯である。山岳は石灰岩と花崗岩とより成る。ツァイグイル・ゴルは帖斯河ミテリ・ノル湖との中間にある、標高八、〇〇〇呎の分水嶺の水を集めてゐる。

ツァイグイル・ゴルは初の數露里の間は東流し、それより殆んど直角をなして南轉し、上記のツァイグイル河谷へ出るまでは、同じ方向に流れる。この全流程を通じて、山岳はこの河の、樹木の生へた、而も、沼地に富んだ河谷を甚しく狭めてゐるので、河谷は幾度もなく峡谷に變つてゐる。河はその間多くの支流を受け入れるも、ゾシ河を除いては他に大きな支流はない。尙、ツァイグイルは多くの水流を集めてゐて、帖斯河の源流中、最も水量の多い川となつてゐる。

帖斯河はアル・ウニゲンとツァイグイルの二川を入れて六五露里の間(註九)、廣く開いた河谷を真西に向つて流れ、それよりズル山岬を迂回して北西に轉流し、アフィル山梁(註一〇)の岩質支脈と唐努鄂拉山脈の一支脈とによつて形成されたる峡谷に至るまで、一〇〇露里の間同じ方向に流れ、同峡谷を過ぎて、最後の方向を變へ、西方に流れる。

帖斯河のこの全流路は地圖中に記載されてゐるが、これはその河谷の詳細な測量に據つたものではなく、單に遠い間隔を置いた若干の重要地點のみを基礎として作成されたものである。又、この河に關する出版資料も同様に断片的である。

ポターニン氏の行程は帖斯河谷より遠く隔れて居り、氏は、ツァイグイル河口とズル山との間の區域に於て山梁を越える峠の高所より、この河を一瞥したに過ぎぬ。右の山梁は主脈より分岐して殆んど直角をなして南方に走向を取り、テス河に達するまでに、ステップ中に沈入してゐる。これらの高所よりポターニン氏の眼に觸れた帖斯河々谷は、たゞ南方に於てのみ砂漠との分界を劃然と示してゐるのみで、北方では、恐らく距離の遠いためではあらうが、河谷の境界は殆んど判らなくなつてゐる。この谷には樹木の生育せる暗緑色の洪瀆地が帯狀をなして擴りその洪瀆地は河床を挟在し、そこには主に落葉樹(註一一)より成る灌木林があり、河谷の兩側には遠く地衣の生えて黄色な平地が見え、南方には流砂地帯がある。(註一二)

帖斯河はズル(ベル)山の高さと同じ所でダルバン・ブッル山脈の北方に遠ざかつて居り、そこからは、たゞ孤

立した岩質高地が河向ふの餘り廣くない砂質ステップ中に散在してゐるのが伺はれるに過ぎない。ポターニン氏は土地の住民の言によつて(註一三)、これ等の砂山の散在せる面積は頗る廣汎で、それを横断するには隊商は先頭に經驗のある案内者を附ける必要があり、馬で一日で通過しうるに述べてゐる。この沙漠の北西端にはドル・ノル(ドリ・ノル又はテレ・キヨリ)と云ふ鹹湖があり、同湖より西方の前記のアファイル山まではステップである。(註一四)帖新河の左岸流域の特色は大體に右の如きものである。

(註一) ウズネセンスキイ及びドロゴスタイススキイ兩氏の見取圖に據れば、三五露里の所に定められてゐる。

(註二) ミヘーエフ著書六七頁

(註三) 右はウズネセンスキイ及びドロゴスタイススキイ兩氏の、天體觀測地點の状況に基いて作成された見取圖によるものである。

尙、ミヘーエフ大尉はガダイスファイル・ゴル河口の二露里下方に在るワン・グン村とシャブリン・ゴル河口との間の距離を二二露里と測定した。

(註四) シャブリン・ゴル河はテリン・ゴルと稱する二の支流を有する。その下方の支流はブルイン・タリン・ヌル山脈の南側に沿ふて流れ、シャブリン・ゴル河に注ぐ。

(註五) ポターニン第一巻二七七一—二七八頁

(註六) 夏の中頃にはこの川も涸れるやうである。ミヘーエフ大尉はバーデイと呼ぶと記してゐるが、川の状況に就いては何も述べてゐない。

(註七) ミヘーエフ著書七三頁

(註八) ポターニン第一巻二七九頁

(註九) ウズネセンスキイ、ドロゴスタイススキイ兩氏の見取圖に據る。參謀本部四〇露里地圖には、この距離は幾らか長く記載されてゐる。尙、この地圖は帖新河の流れる方向を誤示してゐる。河はこの河區では餘り南方へは傾いてゐない。

(註一〇) この高い岩石の多い山脈は帖新河の附近に起り、ナルイン河へ向けて南西の方向に伸びてゐる。

(註一一) 葉葉松や「たろひ」等はたゞ、ズル山までの帖新河の河床に沿つて伸びてゐる。

(註一二) ポターニン第一巻二八〇—二八六、二九〇、二九一頁

(註一三) 同著書第一巻二八三頁

(註一四) ポターニン第一巻二九一頁、グラヌー一四七頁

次に右岸流域に就いて見るに、總延長を通じて殆んき前者と同一の特色を保ち、右岸流域は石の多いステップ性の、可成り廣い地帯となつてゐて、その間、山岳地方では入江になつた所があり、又、所々に砂丘の伸びてゐる所や、ステップ性植物の生青せるオアシスの所等がある。河岸は甚しく不毛であるが、河に出口を有する峡谷や、小さい谷には、概ね、樹林があり、植物も頗る豊富である。これ等の峡谷を灌漑せる諸河川の中で、帖新河の支流として注目すべきものには、ツェルギン・ゴル河(一名、ツェリク又はチリク)とミヒ、チク、ミがある。前者は、主要河床の幅三「サージュン」に達し、グアイグイル河口より一六露里の所で帖新河に入り、後者は樹林のある河谷を流れるボゴス、ウク及びエルスイン。(又はエルツイン)・ゴルの二源流を有し、グアイクイル・ゴルを含む帖新河の右支流の中で最も大きいものである。このヒチク河は唐努鄂拉及びサンギレン二大山脈の連瓦せる山節部に發源し、水量の點では殆んき本流にも譲らぬほどである(註一)。而して、その支流の中で最も大きいものはナルイン・ゴルと云ひ、サンギ

レン山脈に發して、この河の左岸に注いでゐる。ナルイン河谷には哈爾喀地方より烏梁海人や杜爾伯特人の居住地へ通ずる多くの交通網の中心を成すジンシリク哨所がある。尙、エルスイン河口は三、五三五呎の水位(註二)に在る。

エルスイン河口の下流に於ける帖斯河の状況は十分に判明してゐない。この帖斯河々區では、その本流の河床や支流の河床の外貌は、甚しく變化してゐるやうである。帖斯河がウスア・ノル湖に注ぐ所には、蘆の繁茂せる廣い三角洲が形成されて居り、そこには、野猪(註三)が多く棲んでゐる。

(註一) マト、ソフスキイ著書三七二頁

(註二) この數字は次の測定を平均したものである。

ラファイロフ氏測定	三、五四〇呎
グラヌー氏	三、五一〇
平均	三、五二五呎

(註三) ボターニン著「北西部蒙古概観」第三卷二〇〇頁「中に記載されたオルロフ氏の「北西部蒙古交通路の地形解説」を参考す。

二 ウスア・ノル湖

次はウスア・ノル湖の記述に移る。

ボターニンの率ひる探險隊の一員オルロフ氏は、『吾が探險隊はウスア・ノル湖(又は烏布薩)を殆んど一周し、調査せる結果、同湖の地形は一八七九年頃發表された狀況と全く一致してゐない、こゝが判つた』と記してゐる。他

の旅行家としてはクルイロフ氏が一八九二年に、グラヌー氏が一九〇六年にこの湖を訪れてゐるが、それでも、この湖のこゝは、まだ十分明瞭になつてゐない。

ウスア・ノル湖岸線は著しく屈曲し、湖の面積は二〇〇平方露里を超え、水は苦い鹹味を帯び、味は非常に不快なものであり、又湖水は非常に濁濁して居り、約四呎以下は見えない。湖底は固くて、砂利に覆はれ、岸の一部には砂や粗粒状砂礫が散つて居て、一部は粘土質で泥深く、淤泥質の鹽土帯に變化しつゝある所もある。蘆は湖の東岸の、主に帖斯及びナルイン兩河の河口近くに點生し、その附近の湖水は深い、遠淺であるらしい。北方の乾燥した湖岸では、沼澤性植物がステップ性植物に替つてゐる。このウアル・トルハルイク河口附近には柳や「すげ」屬の生へた沼澤質の狭い地面に續いて、落葉松、ゴブラ及び樺の小さな森が看える(註一)。ウスア・ノル湖は深い湖ではあるらしいが、これに就いては『西岸の水際より一〇「サージュン」の箇所での深さは一「サージュン」に達するミオルロフ氏が述べてゐる以外には他に資料がない。湖面の水位は二、五二二呎を示す(註二)。

湖の附近には天然の灌溉路も人口の灌溉路もなく、沙漠が展開して居る。この沙漠を形成せる混砂粘土層は岩層に覆はれてゐて、砂礫多く、殆んど禿地になつてゐる。地表には稀に地衣の草株や錦鶏兒の食弱な叢があり、又、互に遠く隔てゝ僅かにステップ性の植物が標本的に見受けられるに過ぎぬ。最も多いのは鹽澤質の *Halogelon glomeratus* で、この草は隨所に夥しく生長してゐるが、一般にこれらの植物は地上に平たく這つて居るため、沙漠には何等潤ひを與へてゐない(註三)。幾分濕潤な地層には發育の良い草が密生して居り、殊にハルキイル河やコンデリ

ン(一名フン・デレン)河の下流の如き肥沃な所では、そこに耕地が若干散在し、又、落葉樹林も生えてゐる。
(註四)

帖斯河の外に、ウスア・ノル湖に注ぐ河や、同湖の方向へ流れる河も多いが、中にも、ハルクラ、コンデ・リオン、トルホリク・ゴル及びナルイン(註五)の三河は有名で、これらの河に就いての情報は次の通りである。

(註一) タルイロフ著「烏梁海地方旅行記録」三五頁

(註二) 上巻一五六頁参照

(註三) ボターニン、第三巻二六、二七、三一―三三頁、ラファイロフ著書三三七、三二八頁

(註四) タルイロフ、ボターニン、第三巻一一三頁

(註五) トルホリク河の西及び東に當り、ハンダガイトウ、アルビンダイ・ゴルの二河がウスア・ノル湖に注いでゐるやうであるが、地理上の文献には、これ等の川に關しては何等の報導もない。尙、タルイロフ氏はその著書三八頁に於て、アルビンダイ・ゴルをイルビツタイと呼んでゐる。

ハルクラ河 この河名は同河の源流であるバルン・サラ、ドンド。サラ及びツン・サラの三川の合流點以下の名稱である。右の諸源流の中、右方のバルン・サラ川はハルクラ尖峰の一氷河に發源し、中央のドンド。サラ川はハルクラ及びトルグン兩尖峰の接觸地の山岳に源を發し、左方のツン・サラ川はトルグン尖峰に發する。これらの川は山を下つて廣い平坦なホロ河谷に入り、同河谷の南東端に於て一つの共通な流路(水位八、三五〇呎)に合し、それより先は、峡谷に入り、浸蝕を蒙つた舊氷碛石層の間に激流を駛せてゐる。この氷碛石碎屑層はハルクラ河に添ひ、

同河の左支流トルグンの河口に至るまで伸びてゐる。尙、これ等の川の合流せる箇所は峡谷はサーク形に擴大し、その下半部はボブラの喬林に蔽はれてゐる。そのこ、山岳は再び河谷に接近し、河は樹木の生えた深いハルクレン・ボム峡谷に入り、爾後一〇露里を過ぎてウスア・ノル湖盆へ出る。この邊では河床は分岐し、それに粗粒状砂礫や大圓礫がウスア・ノルに至るまで敷詰つてゐるが、水は殆んど全部ウランゴム部落地方の灌溉のために吸收されてしまふ。毎年六月には、ハルクラ河は頗る水量を増すも、七月になると、既に著しく水嵩を減じ、河の分流化せる箇所の淺灘は徒渉し得るやうになる。この河には西部蒙古特有の小さな橋が架つてゐる。

コンデ・リオン河 この河はフン・デレン河とも云ひ(註二)、トルグン尖峰の北方に當るヤマト。イ山脈に發する。然し、メンダウ・ツァスウ山脈を踏査した旅行家の誰も、この河の源流を究めてゐない。河はケツ・峠を下るジェルト。さいふ、狭い谷の大圓礫層の間を流れる川を左岸より受け入れ、右岸よりは、トルグン雪峰に發源せる同名の川を入れる。このトルグン川の河口の下流よりコンデ・リオン河は開けた河谷に入り、混砂粘土、砂利、圓礫(註二)等より成る河谷の沖積層内に二「サージョン」位深く掘り下げられた、廣い河床に分流を放つて流れる。この河谷は一五露里の延長を示し、河は爾後、ビタウ峡谷に入り、次いで、ウスア・ノル湖盆へ出る。そして同湖盆に於て右方よりサガリ・ゴルさいふ大きな川(註三)と合する。この川はクスルリク、ドンド。イ・フルン及びツン・フルン(一名オルトン)の三源流より成る。クスルリク川の河床は砂や圓礫より成る廣い地帯で、その若干の分流には最近まで水の流れてゐたらしい痕跡が見受けられたが、余は、この川に水を見ることは出来なかつた。尙、次の兩フルン

川は、水嵩がかなりに大きく、河幅五—七「サーツェン」、深度約二呎を示してゐる。

サガリ・ゴル河谷はツァガン・シボト、唐努鄂拉兩山脈の間に廣い楔狀をなして入り込み、そこにあるボド・ホンミ云ふ蒙古哨所(註四)の名を取つて、一名ボド・ホン河谷とも呼ばれてゐる。この河谷は杜爾伯特人の住む土地の中でも、最も肥沃な所で、そこは偉大な絨氈のやうにステップが一面に敷詰まつて居り、河谷を濕はす多くの川の附近には灌木が密生し、クスルリクの如き岩質河床にさへポプラの喬木が生長してゐる。

コンデリオン河はサガリ・ゴル河口の下流では、豊潤な牧草地たる、廣い、一部は沼澤化せる河谷を水量の多い二つの分流になつて流れてゐるが、淺瀬は一定の時期以外には徒渉し得ない。ポターニン氏は九月にそれを渡つてゐるが、當時、水嵩が馬腹まで達したこのことである。(註五)

クルイロフ氏(註六)及びポターニン氏(註七)はトルホリク・ゴル川の河谷より色んな峠に據つて唐努鄂拉山脈の北斜面へ出てゐるが、兩氏はこの川に就いて次のやうに述べてゐる。即ち、この川は唐努鄂拉山脈のクイレ峠(七、七四〇呎)ミバイリン・タグヌイ峠(六、八二〇呎)ミの中間部より流下し、廣いフルゴン・シビル河谷へ出るまでは、樹木の生えた近づき悪い峡谷を流れ、川は右のフルゴン・シビル河谷の北界に於て、右岸より、水量の多いアク・ケム川を受け入れ(この川の峡谷はクイレ峠に通ずる)、又、左方よりは、バイン・タグヌイ峠に通ずるアムルイク川を入れてゐる。これ等の三つの川の合流地(五、〇五〇呎)までは蒼鬱たる針葉樹林が唐努鄂拉の山腹を蔽ふて居るが、下流は殆んど不毛のステップで、爾後トルホリク川は森や草地の狭長な縁帯を繞らした、而も屈曲

せる河床を流れる。アク・ケム河口の一〇露里下方の所でトルホリク川に左岸よりフルゴン・(又はホルゴン)シビル川(四、二〇〇呎)が注いでゐる。尙、後者の下流に在る軟弱な沼澤質の、幾らか乾燥した河岸は落落松樺及び柳の樹林になつてゐる。フルゴン・シビル河谷は、この川の河口の下流で、トズ・タグミいふ沙漠性山脈に擁塞されてゐて、トルホリク河は峡谷になつてそれを貫き、ウス・ア・ノル湖盆に出るや否や、忽ち分流化し、廣い三角洲を形成する。尙この分流の水邊にはポプラの林がある。

(註一) 「コンデリオン」も「フンデレン」もブラディミルツォフ氏の「北西部蒙古地圖の解説」中に記入されてゐる。ポターニン氏はタンデレン及びクンデリオンと記してゐるが、余の聴取したところではこの河はクンデリオンと云ふ。

(註二) この河床には「*Urtica*」(蕁麻屬、*Urtica*)が廣く繁茂してゐて、この邊では非常に長く伸びてゐる。

(註三) ラファイロフ氏に據れば、サターリヤ河と云ふ。

(註四) ポターニン氏(同著第三卷一一六頁)はボドゴンと記してゐる。

(註五) 同著書第三卷一一一頁

(註六) 同著書三一—三五頁

(註七) 同著書第三卷一一三—一一七頁

那林果勒河 この河のこゝは極く僅しか判明してゐない。ポターニン氏の記すところによれば(註一)、この河はシャリ・ノル湖の南西に在る沙漠に發するものもある、同湖は元來ブル・トゴイ界標の北縁に在り、ナルイン・ゴルは南東よりその界標へ入つてゐるから、右の記事には疑問の點がある。この河は地圖中にはその河源としてハン・フ

ヘイ山脈の最高部の北斜面が示されてゐるが、河はその斜面の水を集めてゐるか、それともハン・フヘイ山脈の北方に横はる、沙漠を繞らせる泉水や沼澤に發源してゐるか、その何れかでなければならぬ。尙、此處はホイト・ゴル(フスウト)川(アルル・トゴイ界標内に於てナルイン・ゴルと合流する川で、本流に於けると同様、河岸には蘆、樺及び柳屬の繁茂せる)の源流に當つてゐるらしい。

ナルインゴルの次の支流で、バイン・ノル湖より流出せる水量の尠いナルイン・スムイン川は比較的有名であるが、この支流は平坦な、潤ひのない岸を流れ、グラヌー氏に據れば(註二)、餘り水路としての價値はないこのことである。バイン・ノル湖は南西より北東へかけて約六露里の湖長を有する純淡水湖で、廣い砂丘帯を繞らす盆地中に横はり、湖の北方のみ、岩石の多い孤立した丘陵(ナルイン・スムイン河が附近を流れてゐる)によつて庶斷されてゐる。尙、ハン・フヘイ山脈を下るアルガスタイ、デルガラント、イ及びト。ルン(下流をボロ・プラミ呼ぶ(註三))の三川に沿ふて湖へ到達するのは、沙漠のあるため困難である。これらの川の中で、水量の最も多いのはト。ルン川で、この川はサンギント・イン・ダバン峠(六、八八〇呎)の東部に當るハン・フヘイ山脈の一部より下つてゐるやうである。(註四)尙この山脈の一部には二つの源流があり、左側のもものはサンギント・イ・ダバン峠を下り、右側の源流はウランドルイク川(一名ウランリク)と呼び、ムステ鞍部(七、二三五呎)より發する。ト。ルン川はウスア・ノル湖盆へ向けて山岳を出るに、ハンギリチク川と合する。この川の源流をウズネセンスキイ、ドロゴスタイスキイ兩氏の率ひる探險隊が訪れてゐる。右、兩氏の見取圖より案ずるに、ハンギリチク川はハン・フヘイ山脈(絶對標高七、

六九〇呎)の二つの互に平行した連山を結ぶ山峽の西斜面の水を集めて、最初の三五露里は峽谷を真西に流れる。そして、そこで左岸よりシニアン・キリグイン・ゴル、メンド・ゲン、アル・ブルク及びチュルダン等の支流を納めて北方に轉じ、山岳を貫いて沙漠に出で、ト。ルン川と合流する。この合流點以下のト。ルン川の流れをボロ・プラ河と云ふ。グラヌー氏の認めるところによれば(註五)、この河の水は湖の周圍の沙漠を伏流するこのことである。

ナルイン・スムイン河はナルイン・ゴルの最後の支流である。爾後河は平坦な不毛の河岸中を流下し、直流區域で河幅は約一〇「サーシエン」を示す(註六)が、河がその三角川に流入するに、河岸には再び蘆が現はれ、それが北方に於て帖斯河の蘆地と連つてゐる。

西蒙古に於ける次の二大流域は、^{イフハン・ゴク}札布干果勒(又は匝盆河)と色楞格である。この二大河は杭愛高原の主脈によつて互に分離してゐる。

(註一) 同著書第一卷二九二頁

(註二) 同著書一四七頁

(註三) 吾々の地圖にはケデルゲン・ゴル河はバイン・ノル湖に注ぐ如く誤示されてゐるも、實際は、ウスア・ノル湖に注いでゐる。

(註四) グラヌー一四五頁

(註五) ウズネセンスキイ、ドロゴスタイスキイ兩氏の地形見取圖に據る。それには河の上流がト。ルン川にのみ屬するやうに示されてゐる。

(註六) 同著書一四七頁

三 札布干河

札布干(一名ザブフィン)河は布彦圖河の上源地たる、布彦圖山脈の高所ドラン・ハラヤ、ボグド・オラ(オトホ・テンダリ)山脈の、恒雪を戴くハルト。イル支脈の東斜面の水を集めて居り、広い流域を持つてゐるにも不抱、水量は餘り多くない。これはこの河の源流地帯が南方の才壁沙漠に面し、比較的降雨量の少いのみ、中流や下流に河水の蒸發に由る減水や、河水の潛入による減水を補ふだけの支流がないこと等に由るものである。

札布干河に關する報導は極めて断片的ではあるが、概括すれば次の通りである。

札布干河の上流たる布彦圖果勒河、この河は一名バイント・ゴルにも云ひ、二つの源流を持ち、杭愛高原を越え、互に隣合つたアル・テクシ・ダバミデレ・ハンギン、一名ドリュ・ハンギン(九、九三〇呎)の二峠の直下に發源する。その内、最初の源流は急な、近づき難い峡谷を通り、第二の源流は小さい湖より發して、沼澤に富む広い河谷を流過する。この河谷の特色は二源流の合流點以下にも及んで居り、河は渡渉に便利な淺瀬を多く有し、河谷全面に、沼地に富む河岸を有し、岩石の多い河床に沿つて、かなり靜かに流下してゐる。沼地はブヤント。河谷の上方にも所々に在り、更に河谷上部の緩傾地にも點在してゐる。従つて河岸の植物は専らスゲ屬より成り、沼地には *Potentilla fruticosa* が生長し、その間の砂地には *Caragana jubata* が生えてゐる(註一)。この沼地はブヤン

ト。河に可成り多量の水を供給してゐるが、更に、河はの正しい形多くの支流によつても灌養されてゐる。尙、この種の支流の内、最初にブヤント。河に注ぐタルバガタイ川はブヤント。河の源流の合流點より二露里下方で、ブヤント。河の左岸に注いでゐる。尙、この川に沿つては、色椀格色河系のホイト。テルフ河へ通ずる馬道が附いてゐる(註二)。ブヤント。河は、次いで右岸よりクイルグイル川を入れて、小さな幾つかの湖を形成しつゝ、その間に急流を馳せ、深々たる音を立て、流れて居り、その河流の状態から観て、この河は河谷の南方に向つて漸次傾斜してゐるのではなく、階段状に落下してゐるこゝが分る。而も河は舊水碎石層を敷詰めた地方を通つてゐるものらしく、これは河によつて形成されたる廣い湖と並んで、更に地峽を隔て、河と分離してゐる流域があることによつて證明される。尙、この湖沼地域はチロト。河口(七、五〇〇呎(註三))まで續いてゐる。

上部オイルグイル河ミチロト。河との間に於てはブヤント。河に、右岸よりナルイン・ゴル、下部クイルグイル及び水量の多いツガン・サル諸河が、左岸よりボムボト。河が流入する。後者は閃長石の岩山に擁せられた沼澤質の狭く深い谷を流れ、主脈を越えるボムボト。ダバ峠(九、五四〇呎)へ出てゐる。(註四)

ブヤント。河の河床はチロト。河に近づく圓礫の多い谷の沖積層を深さ三「サーシェン」位に下刻して居り、河はこの深谷中を流下してゐて、涉瀬を渡る可能性は絶對にない。

チロト。(又はチルト)河はブヤント。河の最大支流の一つであつて、ボグド・オラ雪嶺より流下し、頗る急な流れで、八月には幅一〇「サーシェン」深さ約三呎(註五)を示す。

ブント。河はチロト。河口の下流に於て左岸にクエフト。河、右岸には河谷に落葉松林の繁茂せるハルト。イル河、ムストゥイ峠下の沼澤質盆地の水を集める下部ナルイン河を收容する。

ナルイン・ゴル河口に於けるブント。河谷の幅員は凡そ四露里を示し、河谷は下流地方に於ては河に迫る岩質山塊のために狭められるが、それは長い間ではなく、やがてナルイン河口より三二露里の所にあるシラ・ウスウ河口に至つて再び以前の河幅に復へる。

シラ・ウスウ河は一四〇露里の延長を有し、二條の源流より成る。北方の源流はハラ・ウスウミと呼ばれ、丁度、シラ・ウスナイ・ウラミ云ふ殆んき經線の方向に走る長い支脈が、その主脈より分岐する箇所に發源し、南方の源流シラ・ウスウ河は、右の支脈の西斜面のザク河谷へ通ずるデルガラント・イン・ダバミいふ、車馬の通れる峠路の南に發する。この二つの源流は合流してから峡谷に流入し、左岸のゲデゲル・トロゴイ山脈に寄添つて、先づ幅二〇「サージエン」ばかりの河床を流れ、次いで右の二源流の合流點より一三露里の所でシラ・ウスウ河谷はブムバミいふ圓谷^{ウツ}なる。それより先は、多少廣くなるが、單調な特色を示し、山岳は峻しい外貌を喪ひ、植物は鮮明な色彩を帯び、空氣は澄み、河はステップ性山岳地帯に入る。ウブル・デルガラント。驛站の下方に於けるシラ・ウスウ河谷は、あまり、高くない山岳に壓迫されて、峡谷となり、河はそれを貫いてブント。河谷へミ流れ出るのである。(註六)

ブント。河はシラ・ウスウ河口のやゝ下方に於て六條の分流に岐れ、その内最も大きい分流の幅員は四十「サージエン」、水深は一呎四分ノ三である(註七)。この分流區域はそこを流れる川の名に従つてフヂルト。界標ミ呼ばれ、河の渡渉箇所となつてゐる。

- (註一) ボターニン、第一卷二四四頁
- (註二) ボターニン、第一卷二四四頁
- (註三) チロト。河々の稍上流に於てブント河に注ぐボムボト。河の河口は絶對高度七、五一〇呎にある(ベフツァフ、二七五頁)
- (註四) ベフツァフ著書二〇四—二〇五頁
- (註五) ボターニン(同著書第一卷二四二頁)は渡河點の水深は駱駝の腹部位であると述べてゐる。
- (註六) ベフツァフ、第一卷二一六頁以下
- (註七) ベフツァフ著書第一卷二二〇頁

ブント。河はフヂルト。界標を過ぎるミ札布干河ミ呼ばれ、ブント。山脈によつて構成されたる山峽に入り、山峽を流過して、ステップ性の草や灌木の生長せるゴロイン・タラ平野に流出し、そこで、峡谷に似た屈曲の多い、深い深谷^{カニヤシ}を通る。尙カニオンの間にはボブラや柳の繁みや豊潤な牧草地がある。

河は凡そ三五露里の間ゴロイン・タラ平野を流れ、それより從來の南南西の方向を西に急轉し、五露里先で深谷から、依然ミして深く削剝された廣い河谷へ出る。この河谷は、そこにある牧場の肥沃さミ廣さの點では、中部札布干河谷での最良區域となつてゐる(註一)。尙、この河谷の限内はツァキリダリミ呼ばれ、約二〇露里の長さを有し河谷の西方は、こゝで合する杭愛山脈及びタイシル・オラ山脈の兩支脈の岩塊によつて壓迫され、谷は峡谷に近い

ものさなつてゐる。然し、この峡谷は只二露里の間伸びてゐるのみで、その後、札布干河は再び廣谷に出る。この廣谷の東端の標高は約五、一五〇呎を示し、そこにはツァキリダクミ同様、肥沃な牧場が一八露里以上續いて展開し、その下端にはウランサイル峡谷が、杭愛高原の前山に連なるハサクト・ハイルハン山脈の支脈によつて形成されてゐる(註12)。

ツァプハン河は、その方向を北西に轉ずる所にあるウランサイル山脈の上方に於いて、その左岸よりコシト。イを受け入れて居り、而も、こゝには戈壁阿爾泰より烏里雅蘇臺市への大通路が、この河の淺瀬を横切つて通じて居る。因みにこの淺瀬の深さは約二呎で、河床は堅固で、幅員三〇「サージョン」を示す。(註三)

ウランサイル山脈は長さ約五露里に及び、その後は廣谷に變つてゐるが、この廣谷が何の程度まで遠く伸びてゐるのか、その河の續の、ウリヤスタイ河口までの一〇〇露里餘りの區域(註四)が吾々によく判明してゐないから審でない。

ウリヤスタイ河は(上流にはボルドイン・ゴルがある(註五))ボグド・オラ雪嶺の西斜面をイへ・ボグドイン・ゴルミバガ・ボグドイン・ゴルの二源流となつて流下してゐる。この二源流は樹林に蔽はれた近寄り難い山脈を流れ、而もムスト。イ峠よりの馬道のボグドイン・ゴル河谷へ下つてゐる地點よりあまり遠くない所では、狭い山間の水ミ合して涇々奔流してゐる。ボグドイン・ゴルは、その右岸よりアルシャン・ゴルといふ頗る大きな川を入れて居るが後者は、その本流と同様に、二條の奔流に分れてボグド・オラ山脈の北方のバガ・オチル・ワニ尖峰を下つてゐる。

因みに、この河名はその上流に湧出する硫黄温泉の名を取つたものである。

ボグドイン・ゴル河はアルシャン・ゴル河口の下流で流れの速い、深さ凡そ二呎、幅二〇—三〇「サージョン」の淺瀬に突入してゐるが、水量は豊富にして、斯様な河はアヤント。河の上流には他に見當らぬ。河谷の上部や、その附近の高所は針葉樹林(註六)に蔽はれてゐるが、アルシャン・ゴル河々口の下方では粗林となり、たゞ河床の附近にのみ、ポブラや柳の林や灌木林が見受けられる。そのこゝ、烏里雅蘇臺市の近く約一五露里の所、即ちボグドイン・ゴルの狭い岩質河谷の擴大する所では、樹林は姿を消し、たゞ狭長いな草地が、それに代つて河床に續いてゐる。

河は烏里雅蘇臺市に近づくに、河谷の沖積層(註七)中に掘り下げられた深さ三〇—五〇呎の河床を流れて、分流化し、その右岸より、橋の架つてゐるチギスト。イン・ゴル川を入れる。(註八)

チギスト。イン・ゴル川(別名ザギスタイ・ゴル)(註九)はザガスタイン・ダバ峠の東方に在る主脈より流下するも、その河源は詳でない。河は右の峠下に伸びた河谷へ向けて、殆んど絶壁に近い、高いシ。ロン・バイツァ巖ミ向ひ合つて位置を占めたウラン・ハルガ谷より流出し、同巖下で沼地の多い廣い河谷を流れるツァガスタイン・ゴル河ミ合する(註一〇)。チギスト。インはツァガスタイン・ゴル河口の下流では、林の點在する、岩質の峻しい山岳に取圍まれた、かなり狭い河谷に流入し、谷底一帯を埋めてゐる圓礫の間に廣く分流を放つてゐる。然し、河水の最も増加するのは春らしく、八月には既にその主なる分流ですら、あまり深くなく、河幅も一・五「サージョン」も示すに過ぎぬ。(註一一)

(註一一) ベフツァフ著書四二頁

(註二) これらの高所の主占岩石は大理石に變成しつゝある石灰岩である。尙、ポターニン氏(同著第一卷二二一—二二三頁)は札布干河の南方に玄武岩や、同河の北方に紅色正長石斑岩を指摘してゐる。

(註三) ポターニン著書第一卷二二三頁

(註四) この河は下流に於ては南方に轉流せずして、大街道と殆んど平行して流れ、ウラン・フドク驛の三露里上方にあるツァプアハン河に注いでゐるから、烏里邪蘇臺河は吾々の地圖には誤つて圖示されてゐるものと見ねばならぬ。

(註五) 烏里邪蘇臺河とは古い呼稱で、現今は忘れられてゐるから、河全部をかく名付ける方が寧ろ正しいであらう。

(註六) この林の主なる樹木は落葉松である。

(註七) この谷は半圓礫や粘土質砂等より成る。

(註八) ベフツァフ氏の著書二〇七頁より。然し、ベフツァフ氏はこの橋に就いては書いてゐない。氏はその報告にも述べてゐる通りこの川の淺瀬を渡つてゐる。

(註九) ボズドネーエフ氏はこの名稱をチヤガスト・ゴル、ゴガストイン・ゴル、チギストイン・ゴル等と色々記してゐる。

(註一〇) ボズドネーエフ、第一卷三六八頁

(註一一) ボズドネーエフ、第一卷二八一頁

ボクドイン・ゴル川は五、四五〇呎(註一)の水位にあるその河口より烏里邪蘇臺云ふ河名に變るが、この河名は曩にも述べた如く、民間では用ひられなくなつてゐる。

ボグドイン・ゴル河谷は烏里邪蘇臺市の西方に於ては沙漠に近い地勢を呈し、處々に地衣 (*Lasiagrostis sp-10* ndens) 及び *Eurotia ceratoides* の群叢を生長せしめてゐるが、水邊に近づくに連れて植物は漸次豊富になり、牧草地もあれば、林もあり、而も、その林はイロ川の河口に近づくに連れへて密度を増してゐる。このイロ川

はアド・イク・シュル山節部より流下せる川で、その流域はチギストイン・ゴルよりも廣く、水量も多い。

ボグドイン・ゴルは烏里邪蘇臺市の三五露里下方の所でシュルダ(註二)云ふ最後の一大支流を受け入れる。この川はハルト・イル山脈中のボグド・オラ尖峰の南斜面よりチロト。こいふ二つの源流として發源する。シュルダ川は、ムスト・イ峠より道が川を遠ざかる地點に於て三「サージン」足らずの河幅を示し、狭くて深い河谷を流れる(註三)。この河谷は河の下流では更に廣くなるが、深さは變化しない。河口より三〇露里下ればボブラ林のある河岸に砂丘が黙々現はれ、下流に行くにつれて砂地が一面に擴大し河岸に迫つて来る。然し、河の流れが速かであるため、河はこの沙漠を征服して、水流をボグドイン・ゴルまで廣らしてゐる。

尙、ボクドイン・ゴルはイロ及びシュルダ河口間に於ては多くの分派に岐れ、分流は幅員四〇〇「サージン」に互つて廣がり、密林の生長せる廣い洪濤地を圍繞してゐるが(註四)、シュルダ河口以下にありては河は再び貧弱な草類に被覆された、砂地の多い河谷に這入る(註五)。斯くて、前述せる如く、當河はウラン・フドク驛の所で札布干河に注ぐ。尙、ボズドネーエフ氏は「ボクドイン・ゴルはその河口に至るまで、流れが速かであるため、普通、札布干河よりも二十日遅れて結水する」と報じてゐる。

(註一) この數字は次の測定の平均である。

バヂリン……………四、六四〇呎

モーシン……………五、三六五

グラヌー	五、七〇五呎
エリアス	五、七三六
ペフツァフ	五、八一〇
平均	五、四五一呎

(註二) 地方住民の言によれば、シュルグ川はウリヤスタイン・ゴルの發源せる一つの山に同じく發源し、そこには數サージョンの間を置いて二つの泉があり、これらの河川の水源となつてゐることである。

(註三) ボターニン著書第一卷二四〇頁

(註四) ボズド・ネーエフ著書第一卷二八三頁

(註五) ボズド・ネーエフ著書第一卷二八四頁

札布干河はボグドイン・ゴル河口では流砂地帯に入る。この砂地は高い砂丘をなして河谷を取巻いてゐるが、附近の高臺には、さほゞ厚く埋積せず、舌状をなして附近の山々にまで匍上つてゐて、その地表は「のひるがほ」(旋花科、*Convolvulus arvensis*)に被蔽された、全く不毛の地であり、従つて札布干河谷は、こゝでは、頗る蔭鬱な沙漠となつてゐる(註一)、たゞ稀に、河の分流地帯に形成されたボブラの密生せる島が、全體の光景に幾らか生氣を與へてゐるに過ぎぬ。これ等の島々は周圍の不毛地との間に著しい對照を呈してゐる。尤も、不毛地の中でも、砂中より鹽土質の粘土が露はれてゐる所には、地衣や錦雞兒の繁みがあり、又、若干の鹽土質、特にアルカリ質の所にはキペーツ(譯名 *Kipetsu*; *Festuca ovina*、羊の飼養に供しうる禾木科植物)が見受けられる。

札布干河はボグドイン・ゴル河口の附近で、北北西より西北西の方向に轉じ、それより奇爾吉茲諾爾湖に向ひ急に北折するまで、その方向を二二〇露里の間流れる。河はこの區域をに於ては、ハラ・ノル湖の排出河を除いては、他に支流を有せず、その河底の地層は脆弱な砂であるため、河水は減少する。尙、ズウリ驛站の七露里下方の所は、この河の渡場になつてゐて、河はこゝで二條の分流になつて流れて居り、その主流の深さ一呎四分の三足らずで、幅は四〇「サージョン」を示す。それより、更に尙下流では、河は細長い幾多の分流に化し、大河系の分流ミ云ふよりも、寧ろ溪流に近いものなる(註二)。その後、これ等の分流は一河床に合するも、その河床は既にボグドイン・ゴル河口下流の札布干河々床とは全く趣を異にしてゐる。ボターニン氏は「實際、頗る泥深い砂質の河底で、その淺瀬を渡るこゝは頗る難儀であり、地表流の外に、伏流もある」を述べてゐる(註三)。而して氏はこの説を證明すべき一つの事實として、札布干河が、ハラ・ノル湖より流出せる分流と合する前に、俄に大きくなり、幅一〇〇「サージョン」もある深い偉大な河を形成する事實を掲げてゐる。札布干河の上下を通じ何處にも見られない、この驚くべき増水は、潜入せる地下水がタトヘン・テリ分流の出口の手に於て、谷を圍む——水を浸透せしめない緻密な岩石に會し、伏流を阻止されて地表に透出したものに見るこゝが出来る。ボズド・ネーエフ氏の傳へるこゝろによる(註四)、蒙古人は、札布干河には、地表流と伏流、即ち、地下流との二流のあるこゝを認めてゐるこゝである。即ち、蒙古人の言によれば、家畜が河を渉る時に、泥中に脚を入れると直ぐ吸込まれてしまひ、その時の狀況を見るに、家畜が砂の表層へは比較的、徐々に深く這入つてゆくが、その砂層を通ぎるこゝ、一舉

に落込んで姿を消してしまふこのことである。尙、札布干河の水流は多量の砂を運び、而も風も河床に流砂を齎らすため、河心線は頗る變り易い。又、この河の分流の数や、その大きなにも變化があり、従つて河の淺瀬の變易も亦激しく、ために何れの隊商も經驗ある土地の蒙古人の案内者なくしては尙、札布干河の下流の涉瀬を過ぎることは危険である。

札布干河谷はボグドイン・ゴル河口よりハラ・ノル分流の河口に至るまでの全區域に於ては極めて單調である。バガ・グニス驛に至るまでにこの河谷沿岸に續くあまり雄峻でない高所——左岸のモンゴル・エレスウ、右岸のバルン・ツフハル、白ツォクト・ウラ及び黒ハラ・オボト等は殆んご皆不毛の地で、半ば砂に覆はれてゐる。砂は幾らか高い比高を示す左岸のセリ・セルテン山脈や、右岸のズリ山にも堆積する。爾後、砂丘は次第に著しくなり、河を周圍の山岳を遮断してゐる程である(註五)。而してこれ等の砂丘地はボロ・トロゴイ、インギルト・トロゴイ砂漠等と呼ばれ、所に依つては著しく河谷を狭めてゐて、ために道が河床真近まで下つてきてゐるところもある。

(註六) 要するに、砂地は河のこの區域を通じて主なる要素を成して居り、そこに眞の沙漠の痕跡をも止めてゐる。實際、河水が草の發育を助けてゐる所もないことはないが、それ等の草は、特にその繁みは褪せた色調を呈するステップ性のもので、殆んご河谷に何の活氣も添へて居らず、最も肥沃な區域ですら、依然として荒涼たるもので、極めて單調である。

タト・ヘン・テリ河のやゝ上流では、山岳が、殆んご緯度の走向を示す札布干河の河谷へ向けて、南方より(註七)迫

り、處によつては斷崖になつて河に臨んで居り、これより札布干河は北方に向ひ、山峽へ流入する。

(註一) ボズドネーエフ、第一卷二八六頁

(註二) ボズドネーエフ、第一卷二九二頁

(註三) 同著第三卷七二七—七三三頁

(註四) 同著第一卷三四九—三五〇頁

(註五) ボズドネーエフ第一卷二九〇頁

(註六) ボズドネーエフ第一卷二九二頁

(註七) ボターニン氏はその著書第三卷七二七—七三三頁に、絶壁は札布干河右岸に在り、左岸は平坦な地貌を呈してゐると述べて居る

が、これは以下の記事によつても分る如く誤りである。

四 湖 沼

ハラ・ノル湖の排出河タト・ヘン・テリ(又はタト・ヘ・テムン)は約一〇露里の流程を有し(註一)、深い河であつて、絶壁に圍まれた峽谷中を流れ、絶壁はたゞ、その河口の一露里手前で河岸を遠ざかり、河は廣い札布干河谷へ出で出る。タト・ヘン・テリの左岸より札布干の岩頭に至るまでの全區域を通じて、タト・ヘン・テリの左岸に隆起せる絶壁は最も強く浸蝕を蒙り、且、山峽斜面より札布干の河へ向つて流下する、カニオンの特色を呈した放水路によつて各所を切斷せられてゐる。ボターニン氏によれば(註二)、或る時代にハラ・ノル湖盆に充滿してゐた水は、ハラ・アルガラント、山脈の東端を廣い流れになつてこの箇所を溢流し、幾つかの河床を浸蝕したやうである。二河の合し

た所の河谷の底には河峽のために河岸より引離されたらしい巖が見受けられるが、これは、恐らく嘗て暗礁であつたものらしい。この種の暗礁はタトヘン・テリの河口に近い右岸にも屹立して居り、又同河の流出する峽谷に近い右岸にもあり、第三の暗礁はタトヘン・テリの右岸に、第二の暗礁に向ひ合つてゐる。これ等の暗礁は、總て殆んぢ直壁をなして、宛ら橋脚のやうに、地平面に隆起してゐる。河口のやう上流にはタトヘン・テリ河を渡る深さ約二呎の浅瀬があり、その上流には砂洲がある。尙、これは非常に古い時代にできたものらしく、そのこゝは、その上に古墳の盛土 (Kereksaur) のあるところでも判る。

(註一) ボターニン第三卷七六頁

(註二) 同著第三卷七三頁

ハラ・ノル湖 當湖のこゝは殆んぢ不明である。吾々の地圖には湖は北西より南東に伸びて居り、湖の南部(これにはドルガ・ノルの別名が與へられてゐる)は甚しく狭まつてゐるやうに圖示されてゐる。然し、照會資料は右の湖形は全く異なる湖形を提示してゐる。即ち右の情報によれば、(一) この湖は一つの湖域ではなくて、ハラ・ノルミドルガ・ノルの二つの湖域より成り、分流によりて互に連続してゐるこゝ、(二) 南方の湖域は北方のものよりは大きいこゝが明かになつてゐる。尙、現存のこの湖域の地圖はラファイロフ氏が一八八三年に、當時の情報ミ、一八七九年のボターニン探検隊がハラ・ノル湖の北岸より得た行程見取圖ミ、マトソフスキ氏がドルガ・ノル湖の南岸より得た行程見取圖ミに基いて、支那出版の西部蒙古の地圖を訂正して作つたものである。因みにペフ

ツォフ氏の蒐集せる照會資料(註一)にはまだ接する機会を得ないが、その後、ボズド・ネーエフ氏が現地で得た資料によつてペフツォフ氏の照會資料の確なこゝは裏書される。

右に掲げたところによつて、たゞ、この湖域の北端と南端に關する吾々の情報のみは信するに足るものなるこゝが判るが、未だハラ・ノル湖を形成せる北南兩湖の中、何れが主たる貯水湖であるかを決定するこゝはできぬ。西部蒙古の北方より南方へかけての中央部の標高の増大振りより推察すれば、ドルガ・ノル湖は、その餘分の水でハラ・ノル湖を養つてゐるものと推定しうるも、又一方ドルガ・ノル湖の水に鹹味の多いこゝミ、同湖の水の流出や蒸發(註三)による減水を補ふに足るだけの著大な支流のないこゝふ事實から見てその反對のこゝも考へられる。

ドルガ・ノル湖面の水位はエヌ・エリアス氏の測量によるミ、三、七七〇呎(註四)で、同湖の南岸は平坦で輕微な勾配を有し、一部は砂礫を混じた粘土質の硬い土地、一部は貧弱な草の生えた鹽土帯となつてゐる。而して、湖の周邊も、やはり、沙漠になつてゐて、水は極めて乏しく、ドルガ驛站に於てさへも、飲料には鹹味のある、色から云つても、水ミいふよりも、寧ろ乳漿ミ云つた方が適當であるやうな井水が使用されてゐるほゞである。(註四)

一方、ハラ・ノル湖は殆んぢ圓形に近い淡水湖である。ボターニン氏はその南東岸を視察してゐないが、そこでは、同湖よりドルガ・ノル湖へ向ふ分流が流出してゐるやうである。即ち、湖の東方は山塊に塞がれ、山塊の一部は恰もタトヘン・テリ河を通すためかの様に凹地となつてゐる。尙、北方では、その山塊はハラ・ノル盆地を取圍んでゐるが、湖より一露里近くも遠つて、その間に比較的、小さく隆起した湖岸地帯を残して居る。それがため、南

風に吹きつけられた水は湖岸を浸し、凹所に水溜や、湿地、即ち、サーズイ (Cairn) なるものを構成し、そこに沼澤性の草が生育せしめてゐる。この湖岸の特徴とするところは、水涯に長く伸びてゐる、成因の詳でない幅一「サージエン」の圓礫波状地であつて、その一部には既に砂や粘土が積つてゐる。(註六)

哈喇諾爾湖は、一方ではド。ルガ・ノル湖及び札布干河へ向けて分流を放つこゝにも、他方では、哈喇諾爾湖より水量の多いチョン・ハリハ (又はチョン・ハリフ) といふ排出河を受け入れてゐる。この分流は幅一五「サージエン」を示し、狭長い草地を伴ふ峻岸の間を流れる。河は深いから、渡河は蘆を組合はせた筏によつて行はれてゐる。

チョン・ハリハには三つの源流があり、それ等の源流の合する所には、アラク・ノル小湖が形成されてゐる。而して、その南方の源流はサイハン・フリツチミ云ひ、沼澤化せる、而も蘆の密生せる岸を流れる。尙、他の二つの分流のあるこゝは蒙古人の説明で判つた。

(註一) ボズドネーエフ著書第一巻二九六頁及びベフツォフ著書二四九頁による。

(註二) 一八八三年オムスクで公表されたもの。

(註三) ボズドネーエフ氏はその著書第一巻二九六頁にボムボト山岳よりド。ルガ・ノル湖へ向ふ入陸の放水路を掲げ、その何れも涸渇してゐたと記してゐる。

(註四) この數字は恐らく實際よりも小さいであらう。

(註五) ボズドネーエフ、マト。ソフスキ著書三六六頁

(註六) ボターニン、第三巻七六頁

次に札布干河の續きの流路に就いて述べやう。

札布干河はタトヘン・テリを收めてハラ・アルガリント及びニゲト。兩山脈によつて形成された山峽に流入し、この山峽を約一露里過ぎて、再び平野に出、分流化して、段丘狀に浸蝕された廣い河床を流れる。この區域を始め、札布干河の他の大部分の流路は單調で、活氣のない、貧弱な河であり、その河床には狭長く帯を伸べたやうに鮮綠帯が遠くより旅人の眼を牽ひてはゐるが、それに近づいてみるに、砂地の間に點在するステツブ性の草地であつたり、又は、蘆地であつたり、或は乾涸した河の分流の水面を覆ふ水草 (Potamogeton, Polygonum etc.) の群であつたりする(註一)。しかし、尙、他にも河床の邊には眞の草地や地衣 (Tasiegrostis sp.) の大きな叢も所々に見受けられるこゝであるが(註二)、かやうな所は、概して札布干河畔には多くない。

札布干河はタトヘン・テリ河口より三五露里の所で分流化し、長さ約一〇露里の廣い島を形成する。東方の分流の幅は、こゝでは二〇「サージエン」に達し、西方の分流の幅は一五「サージエン」に達し、後者は前者よりも深い。尙、前者の河底は泥濘で、それを渡るのは甚だ困難である。(註三)

河は島の附近で北東に轉じ、二露里を下つてアイリク・ノル湖 (三、四八〇呎) に入る。(註四)

(註一) ボターニン第三巻六八頁

(註二) ベフツォフ著書二五〇頁

(註三) ベフツォフ著書二四九頁

(註四) ベフツォフ著二七六頁、この數字は實際よりも小さい。

アイリク・ノル湖 當湖の長さは一七露里、湖周四五露里を超える。湖の南岸は底くて大部分は泥濘であり、北岸は幾らか高いが、やはり、平坦で、廣い。湖は南岸より徐々に深り、汀線より一〇〇「サージョン」の所ですら漸く三呎に達せぬほきである。湖底は粘泥質である。湖の水は札布干河及び坤桂河の齎らす多くの砂や粘泥のために濁濁せしめられ、黄褐色を呈し、湖水は淡水ではあるが苦味を帯びてゐる。湖の周囲は沙漠になつてゐて、蘆はたゞ札布干河口の砂洲にのみ見受けられる。(註)

(註) ベフツォフ著書二四五—二四六頁

坤桂河 當河は那林果勒(註一)の上流地方に在り、札布干河より三露里東の所で艾里克泊に注ぐ。この河はイヘ・ベルへ山塊の南麓に湧出せる泉に發源し(註二)、最初の五〇露里の間は、吾々には全く不明な地方を流れる。烏里雅蘇臺街道(註三)のこの河岸へ出てゐる所では、河幅は既に一五「サージョン」、深さ約半「アルシン」に達するより見れば、河は、恐らく、この不明な地方でも多量の流水を馳せてゐるものと見える。河はそれより先、殘餘の一二〇露里の流路中には一の支流をも受け入れず、右の水量をそのまゝ、アイリク・ノル湖へ齎らしてゐる。河谷は殆んど全流域に亘つて廣く位置を占め、河谷の南方には、名稱(註四)の附されてゐない連山が續いて居り、又、北方には細長い沙漠地帯があつて、その附近の山麓を覆ふてゐる。尙、この狀況は蒙古人の呼ぶシル(Siler)砂海中に突出せる巖山)と云ふ語によつても良く證明される。砂地は、河口より一〇〇露里上流のヌガ界標の西方では

淺くなり、次いでツッガン・ブルン界標附近では、全く、無くなつてゐる。尙、こゝでは巖山が兩側より河上に懸つて、峡谷を形成し、坤桂河はその中を二五露里の間貫流し、爾後、波狀ステップに次いでアイリク・ノル湖盆へ出てゐる。

坤桂河谷は札布干河谷に比べて地味肥沃であり、嘗てこの河谷は樺林に蔽はれてゐたものと見え、樺の殘木が、ツッガン・ブルン峡谷に残つて居り、その峡谷の各所に湧出せる泉の附近の草地は、現今でも河の左岸に廣汎な地域を占めてゐる。こゝの河から幾らか離れた所にはウルドル・ウニゲト。山脈が隆起して居り、この山脈はその幾つかの低い支脈を河の方に放つて居り、支脈と支脈との間は頗く廣くて、緩傾斜せる河谷になつてゐる。この河谷の土壤は砂利を混へた鹽土質土壤で、概ね、錦鶏兒や地衣に蔽はれてゐる。又、これ等の河谷の下方は上記の如き廣い草地を成し、特に河の上流の部分には泉水より成る沼澤や小さな水溜が夥しく散在し、ヌガ界標では河岸に十二露里も伸びてゐる(註五)。尙、河の上流には氷砕石より成る同様の水溜がベフツォフ氏に發見されて居り、そこには河岸に沿つて多くの小湖、正確に云へば凹地が細流によつて湖と連結せしめられてゐる。(註六)

(註一) 上巻二六一四頁以下参照

(註二) ベフツォフ著書二四三頁

(註三) タングイ河谷の當所に於ける絶對高度は五、〇七〇呎である。

(註四) ベフツォフ氏はこの山麓にウルドル・ウニゲト(ウニグイテ)の名を附してゐるが、この名稱は明かにこの山麓のウラン・イイルハン尖峰に至るまでの西部のみを指す線である。

(註五) ベフツァフ著書二四三—二四四頁、ボズドネーエフ第一卷三五四頁
(註六) 同著書二四二頁

アイリク・ノル湖盆は、平坦なグリブイン・オル山麓(幅五露里未満で、西部だけがかなり高い)によつて奇爾吉茲諾爾湖盆と分離されて居り、この山麓を艾里克諾爾湖よりキルギス・ノルへ向けて、緩かではあるが非常に深い一分流が横切つてゐる。吾々の地圖にはこの分流は實際よりも三倍も長く圖示されており、又、その流れる方向も、アイリク・ノル湖を目標した唯一のロシアの旅行家、ベフツァフ氏の掲げるこのものとの符合せぬ。

キルギズ・ノル湖 當湖はサイリゲム山脈の南斜面、阿爾泰諾爾山脈の北東斜面及び杭愛高原の西部を抱擁せる擴大な湖域中の、最後の貯水場に當り、大約三、五〇〇呎の水位に在り、且つ、廣い沙性漠盆地の最深部を占め、而も、往時この盆地に水を湛られてゐた形跡が歴然と現はれてゐる。この湖は、未だ全く踏査されて居ない湖であつて(註一)、これに就いて目下判明せるこのものを綜合すれば次の通りである。

キルギズ・ノル湖の北岸には緩慢に隆起せる餘り高くない段丘列が在り、この汀には一つも枯草や芥などが打ち上げられて居らず、従つて湖中には餘り魚類なども棲息してゐない様にも考へられるが、ポターニン氏の率ひる探險隊が目撃したところによると、鷗が湖上を飛んだり、水面に浮んだりしてゐるこのことであり、又、蒙古人の話によると激浪の起る際には魚が岸に打上げられるこのことであるから(註二)、右の想定は確實なものではない。尙、湖の南岸に沿ふた所、特にアイリク・ノル分流の出口の所には奇い蘆も生えて居れば、小さな水鳥も避んで居り(註三)幾らか生氣を帯びてゐるが、總體的にこの湖の水は碧綠色を呈し、苦味を帯び、湖邊は全く淋しい處である。ブルガースタイ川は如何と云ふに、これに就いてはポターニン氏は七月にその河口が既に涸渴してゐるのを目撃してゐるから(註四)、河水の河口に及ぶのは恐らく満水期に限られてゐるやうである。この河面の水位は三、五六〇呎を示す。

(註一) この湖に就いて述べられてゐる記事は區々であり、例へば、ポターニン氏(同著書三卷四九頁)はこの湖には南より長い岬が突出してゐると述べてゐるが、吾々の地圖にはそれが記載されてゐない。

(註二) 同著書三卷六〇—六一頁、尙、ユルガノフ女史の報するところによると、(トムスタ・シベリア研究協會々報)第二卷第二號所載「ウラルよりオトホン・ハイルハンまで」(二八頁)湖の北岸に沿ふて淡水の冷泉と地表類(Lustigeritis Splendens)の繁茂せる流域があるとのことである。

(註三) ベフツァフ著書二四七頁

(註四) 同著書三卷五四頁

五色楞格河

今、こゝに述べ様とする色楞格河はイデルイン・ゴル、チュルタイン・ゴル及びテリギル・モリンの三河より成り(註)、この三河の流域のみが吾々の研究の範疇に屬して居り、三河の形成せる合流點以下の色楞格河は本書の記述の領外にある。今、この三河に就いて次に述べて見やう。

(註) 支那の文獻「蒙古遊牧記」(ベ・ポーポフ譯、「帝立ロシア地理協會所屬八種研究部時報」第二十四輯一八九五年三七—一頁所

(載)の註に曰く、「色楞格河に四河源あり。北方の源流は鄂魯爾河と云ひ、哈爾哈西境に起り、七水を入れ、流程四百里、其の間齊老圖河がその全水源を併せて南西よりこれに匯く。爾後、鄂魯爾河は東北流して、南に一河を收む。これ、德勒格河(北方より?、テリギル河?)なるべし。同方向に流れること一百支里餘、山麓に於て南西より烏里邪蘇臺河を入れて東北流すること三十支里にして、南にアシルガ河を併す。鄂魯爾河を併せた後の河を色楞格河と稱す」とある。

イデルイン・ゴル河 イデルイン・ゴル(鄂魯爾、倭帖爾、エドリン・ゴルとも呼ぶ(註一))は杭愛山脈の一支脈の北斜面に在るツァガスタイン・ゴル峠の東方に發源する。ポーポフ大佐(註二)が蒙古人より聴取せるところによれば、イデル河は、ボグドイン・ゴル河の河源ともなつてゐる恒雪を戴く山群より流下するこのことであり、この説は烏里邪蘇臺市よりイラダフサン・フト、フト、イ部落へ通ずる一道路についてボズドネーエフ氏の記するところのものに全く一致する。即ち道はボグドイン・ゴル河に沿つて進み、アルシャン・ゴル河谷に移り、同河源に位する療養硫黄泉を過ぎる。そして、山脈を北に踰え、イデル河や廟のある東の方向へ伸びる(註三)。然し、それは主脈の走向とは一致してゐない。主脈はイデル河の上流では屈曲せずしてアルシャン河の河源に於てハルト、イル山脈に合してゐるらしい。尙、今日まで稱へられて來た、イデル河の河源に於ける山塊や河谷の走向が、その實際のものに一致してゐないことは、ボズドネーエフ氏の通つたツァガスタイン・ダバ峠よりイラダフサン・フト、フト、イ部落に至る道路を吾人の地圖に示されたところのものに(註四)を比べて見ても明瞭である。

この道がイデル河を横切る箇所、即ち、右の部落の附近に於て、この河は廣い草地のある河谷中の、崩壊せる、あまり高くない河岸を流れ、その河幅は最深部一呎四分三の所で、一五——二〇「サージエン」を示す。この邊の河床には圓礫が敷詰つてゐる(註五)。道はイデル河を過ぎ、その谷を數露里進んで東へ折れ、一方これより河は北方の未踏區——山岳地方へ遠ざかつてゐる。尙、地圖中には、こゝで河に左右より多くの河が注ぐ様に記入されてゐるが、その内で、吾々に判明してゐるものは、實際に於て、僅かにデルガラント河(ラファイロフ氏のナムト又はナムト河(註六))の一河があるのみである。

(註一) ベ・ポーポフ氏はエデルと云ふ名稱をイデルの獨名と看做してゐる。

(註二) 「陸産及び蒙古を越えて」七七頁

(註三) 同著 第一卷三六七頁

(註四) 同著 第一卷三七——三三三、三三三—三三三頁

(註五) ボズドネーエフ著書第一卷三八五—三八六頁

(註六) これはデルガラント河谷(ナムト、トゴイ)の丘陵のみを云ひ、その丘陵の麓には曾て烏里邪蘇臺—庫倫街道の一驛站があつた。

イデルイン・ゴルは、その左岸よりアングルト、イ川を入れて、東方に急轉し、三〇露里先で、その右支流テクシ・ゴルに合する。

テクシ・(又はテクシユ)ゴル河は杭愛山脈の北部支脈たるバガタイ山脈を越えるところの、ヤマト・ダバ峠より下り、最初の幾露里かは落葉松の密林のある幽谷中の舊水碎層の間を流れ、それよりテクシイン・ドリ、リツヂミ

ハブチク・ウラ兩山脈の間にある、隊商の通行にはあまり適さない山狭に入る。それがため、道はこの山狭を迂回して、隣接せるヤマト河谷の方へ移つてゐる。このヤマト河谷はテクシ河谷に於けると同様の特色を有するも、より廣潤で、傾斜の緩慢な、一部分を草地に蔽はれた斜面を有してゐる。この河谷では、曾て氷河運動のあつた痕跡がテクシ河谷に於けるよりも一層顯著に残つて居り、氷砕石層は、途中、幾度もなく擴大して湖沼化せる川に沿ひ、その河口まで伸びてゐる。(註一)

道はヤマト・ゴル河谷を傳つて、その河口に到るまで、四〇露里の間續いて居り、尙、道がテクシ河谷へ出る箇所からはテクシ河の河谷が瞭然と見えるから(註二)、ヤマト・ゴル(七、二四〇呎(註三))との合流點に到るまでのこの川は既に良く踏査されてゐるものと思はれる。この川は、こゝでは一、五呎の深度に於て、約二〇「サージョン」の幅を示し、サーク狀の廣い河谷を流れ、河床は、全く平坦で、河岸には苦蓬やその他のステップ性の草が生えてゐる(註四)。

河は、尙、下流で玢岩や紅色花崗岩より成るステップ性の、一部、裸地になつてゐる山岳地方に入り、落葉松が草地の奥の方に見受けられる。

(註一) ボターニン著書第一卷三八七頁、ボズドネーエフ著書第一卷三八七頁對比

(註二) ボズドネーエフの説による。

(註三) ボターニン著書第一卷三三五頁

(註四) ボターニン著書第一卷二四九頁

イデルイン・ゴルはテクシ・ゴルを入れて後、砂に被覆された廣いステップ性河谷を約一四露里の間東流し、それより南方に急轉して、同じ方向を五露里過ぎ、次いで樹林の多い峡谷を流出する小さなコンザンダ川の河口に於て、再び進路を東方に轉ずる。こゝでは河谷は、南方より迫る花崗岩質山岳によつて半露里近く幅員を狭められ、河は幅員約一五「サージョン」の一河床に集流し、その深度は頗る増大して居り、河底を透視できぬ箇所が所々にある。(註一)

このイデルイン・ゴル河谷の狭部は五露里の間續き、それより河谷は再び幅を四露里まで擴大し、右岸の山々は奥地の方へ遠ざかるも、依然として峻しい外貌を呈して居り、山岳を被ふ針葉樹林は谷を降つて河岸に接近し、タルバガタイ山脈の北麓に沿つて隆起せる砂丘にさへも生育してゐる。砂地は概ねイデル河谷に廣く擴がり、植物の生育せる地域と並んでゐるが、特に河床より高さ三「サージョン」位高い兩岸の斷層に良く現はれてゐる。この砂丘の斜面には錦鶏兒や *P. haeca alpina* C. が繁茂する(註二)。要するに、河谷のこの部分には、林地、草地及びステップの三植物地帯があり、第一は右岸の山岳間の谷々や、ボルナイ山脈の上部地平面を主とし、第二は山脈の北斜面や河岸低地の沼澤化した區域を占め、最後のステップは砂地や、南面せる山腹に多く在る。

ロシアの旅行の訪れた最後の箇所であるこの地點でのイデル河谷の標高は五、六四五呎を示し、この地點より更に進んで、ホヂェル又はホヂェルミ云ふ著大な支流(註三)を過ぎるこゝ、河は右岸の山岳によつて再び壓迫され、文字通り、"tarn incognita" に入り、一六露里の間、そこを流れる。

(註一) ボターニン第一卷二五〇頁。尙、ボターニン氏はやゝ下方でイデルイン・ゴル河を渡つた時、淺瀬の水は馬腹に達したと述

べてゐるが、その河幅が何の位廣くなつてゐるかに就ては述べてゐない。

(註二) ボターニン著書 第一卷二五二頁

(註三) ボズドネーエフ氏(同著第一卷三八九頁)の行程はこの川の上流を横切つてゐるが、同河の河源たる山岳地域の地形關係を明示してゐないから、余はこの川に就いて詳述することを躊躇する。川の水量は頗る大で、地層を下刻しつゝ流れて居り、地層は軟弱で而も沼地に富み、ボズドネーエフ氏はこの河谷を限定せる山の斜面に於てすら右と同様の地層に遭遇してゐる。

チュルタイン・ゴル河 色楞格河の第二の源流チュルタイン・ゴル(一名チュロト、チロト)河は同河を形成せるスメイン・ゴル及びチルネイ・ゴル(ボズドネーエフ氏はこの河をやはりチュルト。と呼んでゐる(註一))兩河の合流點以下に對する名稱のやうである。ボズドネーエフ氏は、チュルト河の河源は主脈のアガトル・ダバミ稱する部分にあるものと認めて居り、グラヌー氏も同様の意見で、氏はチルネイ河をチュルト。と呼んでゐる(註二)。然し、「蒙古游牧記」には(註三)、『チュルト河は杭愛山脈の西境に發し、オリヂト・ツァガン湖(テルヘイン・ツァガン・ノル)を出、それより北東に向ひ、ウルト。イ山麓を過ぎて、稍々東進し、北西(南西?)より一川を收め、それより、尙、東方に向つて、約一〇〇支里(註四)を過ぐれば二つの河(ボトゴン河及びボズドネーエフ、グラヌー兩氏のチュルト。と名づけてゐる河)と會合する。この二河は合して南西よりチュルト河に注ぐもので、これより、初めてチュルト河の名を帯びる』とある。尙、ボターニン氏の聴取したところによる(註五)、チュルト河はツァガン・ノルより流出するものとである。従つてチュルネイ河でなくてテルヒ・スメイン・ゴルの水脈を以てその主流と看做すべきであることはこれ等の河の流域面積や、河の廣らす水量等を較べて見れば自ら明かなるであらう。

(註一) 同著 第一卷四〇五頁

(註二) 同著 一八〇—一八一頁

(註三) 六一三—六一四頁參照

(註四) 一支里は約二五〇サージンに當る。

(註五) 同著 第一卷二四五頁

スメイン・ゴルの上流はテルヒ・ゴル(又はテルヘイ・ゴル)と稱ぶ。この名稱は、たゞ、ウルト・テルヒ・ゴル(南テルヒ・ゴル)河口以下の河區に附された名稱で、この支流との合流點より上流の河には、別に、ホイト・テルヒ・ゴル(北テルヒ・ゴル)と云ふ河名が附されてゐる。ホイト・テルヒ・ゴルはヤマト。及びボムボト。(九、五四〇呎)の二峠より流下せるアル・ブルク及びウアル・ブルクの二つの川より成り、ベフツェフ氏はこの二川に對し、ハト・ゴル及びイヘ・ゴルといふ名を附けてゐる。この二川はバイツァン・ゴルと合して、初めてロイト・テルヒ・ゴル河を形成する。(註一)

アル・ブルク河は高い斷崖に擁塞せられた無林の深谷を流れる。尙、この斷崖は、その上部より落下せる崩壊土のために、半ば埋められてゐる。當河がデレ・ハンギン(九、九三〇呎)峠を下る水流と合流せる地點以下に於てはアル・ブルク河の河谷は二露里近く擴大し、山岳は、これまでの峻しい外貌を失ひ、平坦な臺地狀を呈する。然し、此處でも山はまだ無林で、たゞ草敷のみに蔽はれてゐる(註二)。因みに、これと同様の特色はイヘ・ゴル河谷や、その連續部をなし、且、舊氷河運動の明瞭な跡痕を存するホイト・テルヒ・ゴル河谷にも見受けられる。

ホイト・テルヒ・ゴルは右の二源流の會流點を距る三二露里の所で、相當に大きなウズイグイ・ゴル川を右岸に收め(註三)、そのやゝ下流の左岸より、ツァガスタイン峠下の小さなダバン・ヌル湖より流出せる(註四)ツァガスタイン・ゴルを入れる。ホイト・テルヒ・ゴル河はこれ等の川を始め、その兩岸に注ぐ多くの溪流をも呑んで、著大な水流になつて居り、増水時には、この河の淺瀬を渡ることは全く不可能である(註五)。尙、ボズドネーエフ氏は、秋ツァガスタイン河口の下でこの河を渡つたが、その時には、この河の分流は、何れもかなり擴大してゐたにも拘らず、その深度は四分の三「アルシン」足らずであつた(註六)。河はこゝでは河谷の中央を流れるが、その河谷は依然として、これまでの特色を保ち、たゞ、アルプ性草地が高いキペーツの生えたステッパに頻りに交替して居り、ステッパは弱ソロネツ質土壤のある漏斗狀河谷に於ては主占植物になつてゐる點が異つてゐる。針葉樹(専ら落葉松より成る)は、ウルト・テルヒ・ゴル(註七)の河口以下に現はれてゐるが(註八)、テルヒイン・ツァガン・ノル湖の周辺では再び無林地となる。

ホイト・テルヒ・ゴルの本流はウルト・テルヒ・ゴル河口より八露里の所で、俄かに北東に轉じて、同方向に伸びてゐる盆地に入り、同盆地の北東部を占める上記の湖まで一〇露里の間は、この盆地を流れる。盆地の幅員は一五露里に達し、その一部はソロネツ質土壤(註九)、一部は沼地土壤よりなり、後者に沿つては多數の小湖が散在してゐる。盆地の東方では、山岳がテルヒン・ツァガン・ノルの間に接近し居り、北西や南西では、湖ミ山岳ミの中間にかなり廣いソロネツ地帯があつて、その一部には脊の高い草がかなり密生してゐる。湖は湖長一〇露里、湖幅六露里、湖周三〇露里を有し、湖の南西部の、岸より半露里の所には、高い岩質の島があつて、その島には淡碧色を呈する表層が突起してゐて、奇觀を呈してゐる。湖のこの部分は徐々に深度を増してゐるが、東岸の高地附近は、著しく深いらしい。湖水は淡水で、味も良い。

(註一) 同著書 二〇三頁

(註二) ボターニン著書 第一卷二四五—二四六頁

(註三) ベフツァフ著書 二〇二頁

(註四) ボズドネーエフ著書 第一卷三九一—三九二頁

(註五) 同上

(註六) 同著書 第一卷三九三頁

(註七) ベフツァフ氏による。尙、ボターニン氏はアル・ブルク河口に捜せた潤葉樹の疎林があると述べてゐる。

(註八) ボズドネーエフ氏(第一卷四〇三頁)はこの川をウリド・テルヒと呼んでゐる。

(註九) ボズドネーエフ著書 第一卷四〇二頁

湖より流出せるスメイン・ゴル河(註二)は、最初の一〇露里の間は頗る曲流に富み、ブダ、アラルイン・アマ、スブルガト及びその他の河谷の出口に在る廣い地域を次々に過ぎ、一三露里の所で、水量の多いギデギスイン・ゴル川と合する。この川は所謂「鍋地」の多くある河谷を流れてゐるが、「鍋地」——鍋狀の小湖群は河によつて連絡されてゐないところから見ると、嘗て杭愛主脈北斜面の舊水河帯は、尠くとも、標高六、八三〇呎(註二)の位置で

この河を横切つてゐる郵便街道の線にまで存在してゐたものと見るこゝが出来る。

ギヂギヌイイン・ゴルはブドン・(ブトン)ギヂギヌイイン・ゴルミナルイン・ギヂギヌイイン・ゴルミの二河より成り、これらの河は何れも杭愛高原のアチャトル・ダバミ云ふ部分に發源する(註三)。ボズドネーエフ氏によれば(註四)、『満水時に於ける當河の淺瀬の徒渉は不可能であり、河は岩石の多い河床を有し、且つ急流であるから、船で渡るこゝも出來ず、従つて、かやうな時には兩岸の交通は全く杜絶する。秋には當河の三つの分流では河幅約三七「サージエン」、深さ一「アルシン」を示す』のこゝである。

スメイン・ゴルの次の東部支流——チルネイ河の河源は、蒙古人の言によれば、スメイン・ゴルを横切る大きい道路の南方五〇——六〇露里の所にあるこのこゝで、丁度、アチャトル、ダバ(註五)の走向線上に有る。この河の支流の中で有名なものは、たゞボトゴンのみで、グラヌー氏はスジ峠(八、七七五呎)を下つてこの川へ出てゐる。この川は草地の斜面を控へた、而も舊氷河運動(註六)の顯著な痕跡を止めてゐる廣い河谷を流れ、水量の點では、六、九〇〇呎(註七)の標高に位せるチルネイ河口の上方五〇露里の所でボゴゴン川と合するチルネイ河よりも幾らか狭い。チルネイ河は多くの圓谷群のある上流地方に於て分流化し、ボドゴン河口より三〇露里の所で山峽に入り、幅五「サージエン」強の峽谷を流れるが、山峽に入る直前では、各々二〇——二五「サージエン」の流幅を有し、秋には一・五呎の深さに達する三の分流となる。チルネイとスメイン・ゴルの合流點及びスメイン・ゴルのその後の流路(これをチュルト。河云ふ)に就いては詳でないが、河はこゝでは近寄りがたい峽谷を流れてゐるやうである。

(註一) ボズドネーエフ氏はこの名を、その著書四〇四頁にスムヌ・ゴルと書き、テルヒン・ノルより流出せる河をテルヒ・ヌルイン・イヘ・ゴルと呼んでゐる。

(註二) ベフツァフ著書 二〇〇—二〇一、二七五頁

(註三) ボズドネーエフ氏はその著書第一卷四〇四頁に、これ等の河の流出する山をヒルツァハ山と記してゐる。

(註四) 同著書 四〇四頁

(註五) グラヌー氏は「參謀本部の四〇露里地圖中に記載されてゐるバイダリク河及びチュルト」(チルネイ)河の河源地方の狀況は幾分實際と相違してゐる」と述べてゐる。

(註六) チルネイ(チュルト)河のこの河谷及び隣接河谷に於ける端推石は標高七、三〇〇呎—七、四〇〇呎までにある。

(註七) グラヌー著書 一七九—一八一頁

テリギル・モリン河 色楞格河を形成する第三の河——テリギル・モリンは、北及び西部斜面がハ・ケム河側へ傾倒せる、高い臺地(註一)に源を發し、この河系はイデルイン・ゴル及びチュルト。河系に比してまだ十分に研究されてゐない。オルロフ氏はこの河の上流地方に就いて、次のやうに書いてゐる。『テリギル・モリンはウラン・タイガ山脈に發し、臺地を過ぎて、その右岸にバルリク、大小オレン・ゴル(オロン・ゴル?)、タイリス、ホルガス、モラト。(モリト?)、ツ。ガン・ゴル、プリアト、アガル及びオルリク(?)の諸河川を入れ、左岸にペレリゲ(ブルリゲ)、ナルイン・ゴル、ズン・ホルガナ、同名の三つの源流より成るホルグスト、フジエルト、ハイセ(ハイス)及びベリト。イスの諸河川を收め、その内最後のベリト。イス川はバイン・ナラ山脈に發する。これ等の

河川は、すべて余の随行員の描いた地形見取圖によつて地圖に載せて置いた』(註二)。勿論、かやうな方法で作られた地圖は断片的資料に據つたもので、その精確さを望むわけにはゆかぬにしても、記述上の資料には役立つであらう。故に余はテリギル・モリン河の右支流タイリス河口の下方に於ける部分に就いて左に述べて見やう。タイリス河の下流のこゝも、同河ミテリギル・モリン河との合流點のこゝも精しくは判明してゐないが、タイリス河源に就いては、ポターニン、オルロフ氏等の報告中に若干の記事がある。

タイリスは、南より北へ向け、上記の臺地の邊緣部より内部に流れる若干の溪流より成る。この地方は頗る傾斜の緩やかな土地であるから、これ等の溪流は甚だ流れが緩慢である。谷はいづれも、平坦であるが、耕地は尠く、植物被覆は専らキベーツ (*Koeleria cristata* Pers.) 性ステップより成り、その所々に落葉松 *Potentilla fruticosa*, *L.*; *Carex jubata*, Poir. 等の灌木叢林が點在する。タイリスは、その左岸にハンガルイク、ジクタベ、ボロク、アル・タシト、イ及びカラ・スウの諸川を入れて北東に急轉し、約六〇露里の間その方向を進み、遂にテリギル・モリン河に注ぐ。而して、この最終の區域に於てタイリスは、その左岸にジャツト、イク、ヂルルク及びフウ・(又はフユイ・)ケム等の支流を收める。尙、フウ・ケム河口下方の河谷にはアラサン温泉が湧出してゐる。(註三)

テリギル・モリンはタイリス河口附近に於ては廣い平坦な河谷を過ぎてゐるが、この河谷は、その後、次第に深くなつてゆき、而もアグイル河口では、約一露里の谷幅を保つてゐる。然し、この河谷を塞ぐ山岳は、既に尠くも

河谷より七〇〇呎の高さに隆まつて居り、河はこの河谷を通過して、その後二〇「サージン」嶺の河幅を示しつつ、近寄り難い峡谷に入る。

(註一) 臺地の標高は五、一〇〇呎(東部)と七、七五〇呎(西部)の間を上下してゐる。

(註二) 同著書 二二六頁

(註三) ポターニン第三卷二四九頁、オルロフ二二三頁

アグイル(又はアガリ)川も亦、右の峡谷を出て、テリギル・モリン河へ注ぐが、その上流地方ではタイリス河谷と同様の特色を帯びた河谷を流れる。

アグイル川はアルト・イン・クリン・ニル山脈より同名の峠(七、六七〇呎)の東方へ流下する。道路はこのアグイル川に、平坦で沼澤質な河谷を流れるウラン・セリチル川との合流點に於てアグイル川を離れ、右の峠に向つてゐる。アグイル川は更に流下して、右岸よりアルウ・サレン・ゴル及びボロフジルの二川を入れ、左岸よりアスフイト(アスハトツ)、ジュルク(ツ)、ソグド、グト及びトセン(又はトスイン?) 等の支流を入れて、専らキベーツの繁茂せる、緩傾斜した斜面のある、廣い河谷の平坦な河床に水流を馳せる。尙、二、三の地點に於ては高所の、急な北斜面に沿ふて落葉松の林が見える。河床沿岸は沼澤化して居り、そこには沼澤性の草が生えてゐる。(註一)

アグイル川は河源より三五露里の所で、左岸に大きなテルミス川を入れる。一八七九年にはポターニン探検隊が

この川の上流に出てゐる。

このテルミス川はテ・テルミス、ドンド・テルミス及びト・テルミス(註二)の三源流より成り、その河谷は幅二—三里露で、禾本科植物及び「すげ」屬(Oberon)の群叢を有する。河の北に河に平行に伸びな山岳の傾斜面は殆んど無林で、南方の山麓の北斜面には落葉松の密林のあるのが遠くより見えるが、密林は谷底深くまでは生へ下つてはゐない(註三)。テルミス川は、その下流に於て左岸にウル・ト・ムト。イミタシャント。イミの二支流を入れる。

このテルミス川の河口以下(註四)に於けるアグイル河谷は、漸時峡谷に移る。この状況に就きオルロフ氏は次のやうに書いてゐる。アグイル河谷は、こゝでは、この臺地の他の河谷とは全く異なる特色を帯びる。アグイル河谷は七〇〇呎の比高(註五)を示すところの、高い、而も、垂直な岩壁のために狭められた緩傾斜せる峡谷をなしてゐる。尙、この岩壁は、所により河谷を一〇「サージエン」まで狭めて居り、普通の谷幅は五〇「サージエン」を出でぬ。谷底は全く平坦で、砂礫や砂利に埋まり、落葉松の喬木が所々に繁茂する。テリギル・モリン河口に於ける同河の位置は、標高五、二六〇呎(註六)を示してゐる。

(註一) ボターニン、第一巻二七五—二七六頁。ボズネセンスキイ及びドロゴスタイスキイ兩氏の測量圖による。

(註二) オルロフ氏はテルミス川を支流と看做し、ツァスウ(ツァソイ)川を主流として居り、ボターニン氏は「正しいかも知れない」とその説を肯定してゐる。

(註三) ボターニン第三巻一四九—一五〇頁。

(註四) 本來は次の支流、バガ・ガガルの河口の下方を指す(ボターニン第三巻一五〇頁)。

(註五) 右岸の高所はフ・ヘルト、左岸のそれはフ・フツジルと名づけられ、これらの岩壁は石灰岩、灰色花崗岩及び綠岩類よりなる(ボターニン第二巻一五〇頁)。

(註六) ウズネセンスキイ及びドロゴスタイスキイ兩氏の測量資料による。

テリギル・モリンはハイス(又はハイシニ)川の河口より數露里下方の所では、上記の通り、三〇「サージエン」の河幅を示し、峡谷に流入し、ベリト。イス河口に至るまでそれを流れる。尙、ベリト。イス川は幽谷を通過つてウラン・タイガ山脈の東部の水を集めてゐる。(註一)

この河の河口より二〇露里の所、即ちナルイン河(五、〇九〇呎)の河口の附近にはテリギル・モリン河を渡る渡船場がある(註二)。この箇所にはける河谷は、前の如く比較的峻峻な、所により、殆んど垂直壁に近い斜面を持つ岩質の山岳に壓迫され、谷幅は約二露里となり、その後、峡谷の特色を帯びて来る。然し、その區間は頗る短かく、河は右の峡谷を脱出するに、相互に遠く距つた山岳の間を流れて、曲流を形成し、而も、左右の河岸の巖にぶつつかかりがら流れてゐる。この區域に於て、テリギル・モリンは、右岸より、深く且つ狭い峡谷を流出するテフティン・ゴル、テ・クンクルベイの二川と、その先で、尙、ドンド・クンクルベイミト・クンクルベイの二川、並に、渡船場より三八露里の所でシャルクイン・ゴル川等の諸支流を受け入れてゐる。(註三)

テリギル・モリン河は、上流地方では、殆んど、ベリト。イス河口に至るまで、北より南に流れるが、右のシャルクイン・ゴル川の河口からは、方向を南東に轉じ、それより更に二〇露里を経て、東南東に流れる(註四)。こゝでは

サンギン・ダライ湖の東端に於てミヘーエ大尉の通路がテリギル・モリン河谷を横切つてゐるが、氏はテリギル・モリン河のこの地點に就いて次のやうに報じてゐる(註五)。即ち「ムリン・ゴル(テリギル・モリン)河谷は、こゝでは、幅約一露里半を有し、平坦でその地表には、牧草が繁茂する。南北の二方面よりこの河谷を擁する山岳は峻しく、殆んど垂直をなして河谷に迫つてゐる。河幅は三〇—四〇「サージョン」、深さは二「サージョン」に達し、渡河は二つの丸木舟を繋いで造つた筏によつて行はれるが、下方にある淺瀬は水量が大きくて渡れぬ」云。渡船場の河面の水位は四、七六〇呎を示す(註六)。ポボーフ氏もこの地點が、それこそ、やゝ下方らしい所でテリギル・モリンの淺瀬を越えてゐるが、氏は十月にこの河は馬腹に達するほどの深度で、一〇「サージョン」の幅員を有してゐることを報じてゐる。(註七)

右に述べたところにより、テリギル・モリン河谷はアグイル河谷よりサンギン・ダライ湖の經度に至るまでの區間は高い臺地に喰入つた、幾らか廣い廻廊のやうな單調な特色を保ち、その後下流では、既に右の特色を失ひ、著しく擴大し、それを擁する山岳は緩傾斜し、同時に植物の被覆状態も變つて、次第にステップ性の特色を増してゐるこゝがかである。この邊では四、五六〇呎の標高の所に耕地さへも見受けられる。(註八)

參謀本部四〇露里地圖に就いて觀るに、テリギル・モリン河はシャルグイン・ゴルを過ぎるこゝ、一つの支流も入れてゐないこゝになつてゐるが、實際には、疑もなく幾つかの支流がある。ポターニン氏にその支流の一としてバイン・ゴル川を指摘してゐる。(註九)

ヨーロッパ人がテリギル・モリン河を訪れた最終の箇所はツァク・ツウ界標である。この界標はミヘーエ大尉の渡河點よりせる地三〇露里下方にある。こゝでは河は分流化して居り、九月には主流の幅員は約五〇「サージョン」、深さは駱駝の腹部に達する程度である。この界標を過ぎるこゝ、テリギル・モリン河谷は再び狭められて、河はイデル河谷へ抜ける狭谷に入る。

この最終の區域で、テリギル・モリン河の受入れてゐる著名な支流としては、左岸にチト、イグ、右岸にブクスイがある。この二支流の上流には、一八七七年ポターニン氏の通つた路があり、氏のブクスイ河に關する報道を引用すれば次の通である。「サンギン・ダライ湖の東に隆起せるバイン・ジュルク山はブクスイ河及びその左支流アルダン河の河源となつて居り、このアルダン河は、同河の支流クブ及びフツツパ兩河に於けると同様、かなり貧弱なステップ性の草類(註一〇)の繁茂せる、丘陵狀臺地を削刺し、深い狭谷を流れてゐる。又、チト、イグ河はさほゞ大きくない川で、沼澤質の河谷を流れてゐる」云。(註一一)

右にて吾々のテリギル・モリン河流域の河川に關する記事は盡きる。

(註一) この川に就いての資料は、ポターニン氏の著書第一卷二七二頁より引用したものである。

(註二) ミヘーエ大尉は(同著九頁)、ムリン・ゴル(テリギル・モリン)の河幅は一〇—一五「サージョン」を示し、何れの淺瀬でも渡り得る、と記してゐるも、上述の事實より見て、これは誤りである。

(註三) ポボーフ氏の行程はこのシャルグイン・ゴルの河源を横断してゐるが、氏の報告にはこの點に就いて何も述べられてゐない。ウズネセンスキイ及びドロゴスタイスキイ兩氏の地圖より察するに、この川はト、ネムル湖の東に在る山脈中に、二つの源流と

して發源してゐるらしい。

(註四) 參謀本部四〇露里前圖にはテリギル・モリン河のこの部分を東の方向に示してゐる。

(註五) 同著書 五頁

(註六) ミヘーエフ著書 四一頁

(註七) 同著書 八〇頁

(註八) ボターニン、第一卷二五八頁

(註九) 同著書 二五九頁

(註一〇) 同著 第一卷二五六―二五七頁

(註一一) 同著 第一卷二六〇頁

六 拜達哩克河

拜達哩克河の流域は、非常に狭く西部及び東部に於ては、一部は杭愛主脈のために、一部はその支脈(山脈名は不明)のために甚しく狭められてゐる。尙、ボズドネーエフ氏(註一)はこの西部支脈には一般的に脈名のないことを確言してゐるが、東部支脈の方は、その北部(註二)だけにハビルミいふ脈名がついてゐる。

拜達哩克河の上流地方に關しては、たゞ、支那側の文献があるのみである。蒙古游牧記(註三)には、『バイダリク河はフフ・リン山脈(註四)の南麓に發し、タミル河(註五)はフフ・リン山脈の北麓に發源する。拜達哩克河には

三條の南流せる源流があり、合して一河となり、南西に百支里以上流下し、そこでザク河を入れる。ザク河は北方の山岳を出て、五つの川を併せ、三百支里餘を南流して遂にバイダリク河に注ぐものである』とある。

グラヌー氏は、參謀本部四〇露里地圖に拜達哩克河源地方の山岳が誤示されあることを指摘してゐる。尙、蒙古游牧記の著者は、ザク河はバイダリク河よりも長いと記してゐるが、これは正しいのかも知れぬ。因みに、中央杭愛高原中、バデーリン、シシマレフ、モーシン、クレメンツ及びグラヌー諸氏の探つた行程内の地域については、吾々の知識は最も不十分であり、蒙古遊記を除いては、その地方の状況をこれ以上明示するものは他にないのである。が然し、それだから云つて右の支那側の文献を無條件に信じたり、或は反駁したりすることはできぬ。因みに七、〇四〇呎の標高に位するスツジ峠に向ふ道路がバイダリク河を横切る箇所からの状況は吾々に幾か明かになりつつある。バイダリク河は稍上流でその左岸にスツジ及びテリイン・ゴルの二支流を入れる。グラヌー氏はその著書の中にこれ等の支流について若干の報導を寄せてゐる。

(註一) 同著第一卷二二五頁

(註二) 蒙古人の言としてボズドネーエフ氏の報するところによると、ナルイン・ゴル河(一名ウフタ又はオロゴイ)もやはり、バイダリク河の流域に屬する。これに就き氏は次のやうに記してゐる(第一卷二〇九頁)。「ウフタ(又はウケタ)山脈のやゝ東方に當り、しかも、同山脈と同じ緯度の所にはデルガラント山脈がある。この山脈の南側には、泉を源とする二つの川があり、その内、東の川をデルガラント、西の川をテリイン・ゴルと呼ぶ。この二川は合してオロゴイ河と成る。オロゴイ河は南西の方向に流れて、幾つかの支流を併せつゝ、ウフク河と合し、爾後更に、ツァガン・トルン河(吾々の地圖に示されたテムル河ではな

い)と合するまでは、このウフクといふ河名で呼ばれる。ツァガン・トルン河は既にバイダリク河に注いでゐる』とある。この報道は、この河に就いてのこれまでの資料(ベフツォフ著書四九頁)とは異なつてゐる。

(註三) 下巻一五二頁参照

(註四) 吾々の地圖には、主脈のこの部分はアチャトルとなつてゐる。バイダリク河の上流地に於けるフフ山脈に就ては、ベフツォフ氏も述べてゐる。

(註五) この記事は吾々の地圖やグラヌー氏の得た情報とは一致してゐない。グラヌー氏はスッジ、ウラン・チュル及びテリイン・ゴル河の三川をバイダリク河の支流として呼び、源流としては呼んでゐない。

スッジン・ゴル河 當河は同名の峠(八、七七五呎)より流下し、その河源には一圍谷があり、河成段丘列に取圍まれて居る。河成段丘の斜面は圍谷の谷底の斜面に平行して居り、斜面は、一つの水河が峠の鞍部より徐々に退脚した時代に生成されたものらしく、現在ではこの鞍部は僅に圍谷の上部の一段丘を成してゐるに過ぎない。スッジン・ゴル河の附近に於ては舊氷河運動の痕跡は概ね頗る明瞭に現はれて居り、同川の桶形を成した河谷には、上方より七露里の流程に互り氷碎石が夥しく存在し、川は下流に下るに一部沼澤化せる草原(註)に水を馳せてゐる。

(註) 同著書 一七六一七七頁

テリイン・ゴル河 當河は杭愛主脈の高い一支脈の北西斜面の水を集めてゐる。支脈は南西に遠ざかり、南より上バイダリク河域を圍み、同河に、その右支流ザークミの合流點で上バイダリク河谷へ突入する。テリイン・ゴル河は南より北へ流れるが、ウラン・チュル川を右岸に入れるに、南西の方向に急轉する。この川は多汁質の草に蔽はれ

た岸邊を蛇行する。草はその河成圓礫層を殆んご全部被覆し、只その圓礫の一部は河の兩岸に伸びた段丘の斷層内に露はれてゐるに過ぎぬ。尙、河谷には舊氷河運動の明瞭な痕跡はないが、その右支流ウラン・チュル河の河谷(標高八、四三〇呎)には氷河の遺物が到る所に見受けられ、氷碎層丘が數十「メートル」も高く(註)累積してゐる所がある。

(註) 同著書 一七六頁

バイダリク河はグラヌー氏の進路を横切つてゐる箇所では、廣く平坦な河谷を流れ、廣い「サイ」(一時的に水の流れる河川の砂質河床)を淺い分流に岐れて流れてゐる。

右の地點を過ぎるに、河は庫倫街道を横切るが、そこでも河中には右に同様の特色が見受けられる。この街道を通つたボズドネーエフ氏の計算にするに、こゝには十一條の分流があるが、その深度は八月でも一呎四分の三を超えたこゝはまだ曾てないこゝである。此所の河谷は全くステップ性を帯び、専ら *Tasiagrostis splendens* 地衣)が繁茂してゐるから、土地はよほど低下してゐるこゝが判る。又、河の流れも速で、所々に急瀾(註)もあるから、河谷は著しく南方へ急傾斜してゐるらしい。

バイダリク河は郵便街道より二〇—二五露里下方で右支流のツァク(又はザーク)河に合する。

(註) 同著書 一巻二二三頁

ツァク河 この河の上流に就いては何等の情報もない。たゞ、照會によつて、この河の河源にベンド・リヤン(又

はフフ・ノル)ミいふ大きい湖のあるところだけが判つてゐる(註一)。この河は、郵便街道を横断してゐる所では、峻しく断層せる段丘に囲まれた、而も砂礫に埋められたの廣い(一露里)も河床に多くの分流を放つて流れて居り、水量は本流(註二)に比べてやゝ劣つてゐる。

(註一) ボターニン著書 第一卷二四六頁、ペフツォフ著書四七頁及びグラマー著書一七四頁。この湖はクラプロット氏の地圖にはビド・リヤ・ノルとして記されてある。

(註二) グラマー氏の著書一七四頁より。尙、ボズドネーエフ氏(同著第一卷二二五頁)はこの本流の大きさを幾らか小さく記する。氏の記事によると「こゝでは四つの分流に岐れ、その中の本流の幅六「サージョン」弱、深さ八「ウールシク」弱、他の分流にありては、幅四「サージョン」を超えぬ」とある。

バイダリク河はツァク河と合してより南南西に轉流し、四〇露里先で左岸に大きいウタ河を入れる。

ウタ河 ボズドネーエフ氏が蒙古人の言として傳へるところによる(註三)、この河の名稱は、同河岸にあるウト。Uta(「廣い」の義で、この場合は廣谷の意)ミいふ驛名を採つて附けられたものである(註四)である。この河谷には二條の川があつて、その中、河谷の東端を流れるものをツァガン・トルトミ呼び、西端を走るものをバイン・ヌルイン・ゴルミ呼ぶ。この二つの川は合して一河床を成し、間もなく峡谷に入り、それよりはじめてウト。又はウタイン・ゴルミ呼ばれる。ボズドネーエフ氏はこの二源流の中、ウタ驛の附近を三つの分流となつて流れる東方のものに就いて報じてゐるが、それによるミ、三つの分流中の主たるものは八月に河幅三〇—四〇「サージョン」深さ一〇「ウールシク」を超えぬもの(註五)である。

(註三) 同著 第一卷二二二頁

バイダリク河はウタ河口を過ぎるミ、耕地(註六)に水を引かれて水量を激減し、その下流では比較的小さな早瀬を成して流れてゐる。ペフツォフ氏によれば、晩秋には河は非常に淺くなり、河幅も僅に一五—二〇「サージョン」を示すに過ぎぬ……この(註七)である。バイダリク河はその河口の手前で右方にツァガン・ゴル川を入れるが、この川の水も、また耕地に費消せられてゐる。尙、この川は、山中にあつては峡谷を流れ、その河床の兩側はさほご高くはないが、断崖を成してゐる。(註八)

バイダリク河の注ぐボウン・ツァガン・ノル、又は、單に察罕淖爾^{ツァフロン・ノル}云ふ湖は約六〇露里の著大な湖周を有し、水は頗る鹹い。湖全體の形は稜角の除れた三角形を聯想せしめ、北西に南西に當る側は入江のために複雑に刻まれてゐる。湖の周圍は砂質やソロンチク質の土地で、後者の水汀に臨んだ箇所湖岸は全く平坦で、草も生えてゐない。

(註九)

(註一) ボズドネーエフ著書第一卷二二四頁

(註二) ペフツォフ著書 四六頁

(註三) カズロフ著「蒙古及びカム」第一卷七八頁

西部蒙古の灌溉は、以上述べたところの上部エニセイ、 Cholmui・イルトイシ、ウルンダ、色楞格^{シレンゲ}の諸河、並に、この地方の中部に水源を有する諸河の廣汎な流域に在る河や湖のみによつて限られてゐるのではない。土地の

起伏する特色だか、又は、現代のやうな氣候の乾燥性なきのために、地方の中部の或る部分には上記の水域は水路學上、何の縁故もない孤立的な水域を成すものもあり、中には、非常に小さい水域もある。

而して、右の如き孤立的な水域としては、ウルク・ノル、三音達頓、テリミン・ノル、シャルギン・ツァガン・ノル、並にその他、降雨量の寡いために孤立せる二流どころの多く水域——ハラ・ウス湖（ナルミ河を有す）及びジグジン・ゴル河（ハン・フ・ヘイ山脈を南下する）、ハラ・ノル湖（ムフル・クンダイ河を有する）等がある。而して、これら流域の内の或るものは、恐らく、或る時代にキルギス・ノル流域に屬し、或るものは確に、他の水域に屬してゐたやうであるが、その大多数に關する研究は、まだ頗る幼稚であり、それに、右に述べた若干の水域に就いても、余は、更に附言すべき何等の材料も持合はせてゐない。然し、この點では、三音達頓ミウルク・ノルの二湖だけは例外で余はこの二湖の、こゝを左に詳述して本章を終り、同時に、吾々の研究しやうとするこの地方の水路學上の概観をも打切らうと思ふ。

第二節 西部蒙古中央部の小流域

三音達頓湖 當湖（註一）は一名サンギン・ダライ湖とも云ひ、杭愛高原内のボルナイ山脈北側——標高の大きいステップ盆地にあり、山間の樹木の生育せる峡谷には幾つかの細流や小河川が湖へ向けて流れ、減水しつゝある湖の水量を辛うじて補つてゐる。尙、この湖は目下涸渇の過程にあり、これはこの湖の東部が著しく淺くなつてゐる。

て、ミヘーエフ大尉が入江（註二）を迂回せずには苦もなくその砂洲を横切つた事によつても立證される。

サンギン・ダライは淡水湖であるが、湖岸の水は鹽分を含み（註三）、湖長三五露里餘、湖幅八露里足らずである。湖の北岸は高く、長さ二露里弱の岩質山岬によつて、狭く深い入江を構成してゐる。又、湖の北東部は既に指摘したやうに、淺い入江に終つてゐて、この入江の長さは一〇露里に達し、最も廣い所では、幅一・五露里に達する（註四）。入江の南の湖岸は平坦で、ソロネツ質の泥地である。こゝでは山岳は湖より七露里南方に遠ざかつて居りその跡には湖へ向けて軽く傾斜した草の生えた低地がある。草類は山麓の森林植物より水邊（註五）のステップ性草類へミ次第に變化しつゝある。この草原は湖の南岸に沿うて、次第に細くなりつゝ伸びてゐる。尙、ウヘル・チュル川（註六）の西方に於ては山岳が湖上に懸り、峻しい斷崖（註七）をなつてゐる。湖の西端にはボグタイ・ゴル及びウトイン・ゴル（註八）の二川が注いでゐる。後者は盆地に連る廣い谷を流れ、その谷面はステップ性の草に被はれたソロネツ質草原である。湖底は岩質で（註九）、湖面の水位は六・二二五呎を示す。（註一〇）

（註一） ボターニン氏（同著第一卷二五三頁）の記すところによれば、サイギンの意義を蒙古人に質したが、知る者はなかつたことであり、従つて、恐らくこの名は嘗て行政地域名に用ひられてゐたものらしい。以下述べやうとする湖盆も、昔はこの行政地域に屬してゐたものであるかも知れない。

（註二） 同著書五七—五八頁

（註三） ミヘーエフ大尉はその著「北西部蒙古及び烏梁海地方旅行報告」一一頁に於て、サンギン・ダライ湖を鹽湖に屬せしめてゐるも、その先の五九頁では、サンギン・ダライ湖の水は、飲料に適することが判つたと述べてゐる。ボターニン氏（同著第一卷二五

四頁)はこの湖の水は飲料に適するも、ソロネツ質の湖岸の水は鹽分を含むと述べて居り、ポターニン氏のこの説に對立せる説としてはドロゴスタイスカイ氏(帝立ロシア地理協會時報)第四十四輯二三八頁所載「北西部蒙古への旅」の「サンギン・メライ湖の水は苦鹽質で、鹽分の含有量が頗る大で、飲料に適せぬ。水中には有機物らしいものを見受けぬ」との断定がある。然し、これに對しては、又、ポターニン氏の「湖中には或種の小魚が棲息し、湖岸には多くの小鳥が居り、アングライ(譯名、鳥名)が幾百となく群つて居て、鴨や白鳥などもある」との報告が反駁を與へてゐる。これらの矛盾は、恐らく湖の東部へ注ぐ大きい淡水の支流のあることに起因するものと思はれる。

(註四) ミヘーエフ氏の説に據る。

(註五) ポターニン氏の説に據る。

(註六) ミヘーエフ大尉はウハルチャルンと記してゐる。

(註七) ミヘーエフ氏の著書五九頁より。

(註八) ウォズネセンスカイ及びドロゴスタイスカイ兩氏の見取圖に據る。

(註九) ミヘーエフ氏の著書一一頁より。

(註一〇) 上卷二二八頁參照

ウルク・ノル湖 次にウルク・ノル(別名ウリュク・ノル、ウイリュク・ノル又はウリュ・ノル)湖の記事に移らう。

北部蒙古に於ける幾多の閉塞盆地の中、ウルク・ノル湖(註一)のある盆地は山嶽のために狭められて、深くなつてゐるものは他にない。この盆地の深さは、それを挾窄せる山岳の峰より恐らく三、〇〇〇呎(註二)も低いらしい。盆地の地質は鹽分を含んだ粘土、砂利、礫岩等より成り、全く不毛な所もある。たゞ、湖に近づくにつれ珍ら

しいソロネツに *Lasiagrostis* sp. *leudensis* の生えてゐるのが見られる。然し、周圍の山嶽中の峡谷には草も豊富で、樹林もある。

湖は長さ約一四露里、幅凡そ一〇露里(註三)に及び、盆地の東部にある。湖岸は平坦で、その附近の土地も同様甚しく荒れてゐる。湖岸の水は苦鹽質であるが、全く飲料に適せぬほどでもなく、水は碧綠色を帯びてゐる。湖底には所々に水草(ヒバマタ屬 *Algae*)が生えて居り、又、硬く、奇麗な湖底の所々には砂礫が透けて見える(註四)。湖岸には多数の鳥類が棲んで居り、従つて湖中に魚類の居ることも想像に難くはない。

山嶽からは幾つかの河床がウリュク・ノル湖へ向け走つてゐるが、湖に注ぐ川としては、ハルガ河を除けば、すべて夏の終には概ね涸れてしまふ。

ハルガ河(カルガイ又はハリゲ)はチュルイシュマン川の河源たる標高八、二〇〇呎(註五)の沼澤質の平坦な分水界に水を集め、この分水界を下るに、峡谷に入り、五露里の間、それを流れ、その後、河谷は二露里まで擴大し、その左右には河岸段丘が見られる。尙、メンダウ・ハイルハン山群の峡谷及び、時としては、河床附近にも針葉樹林がある。ハルガ河は若干の溪流や川の水を入れて水量を増し、こゝでは四「サージン」の河幅に達し、水は透明で、雜灌木に被はれた低い河岸を泊々み頗る駛く流れてゐる。河谷はそこより更に擴大するも、メンダウ・ハイルハン山群の氷河群に發源し、河源より四〇露里にしてハルガ河に注ぐムホル川の河口の下方では、深い峡谷に變る。この附近を通る道は、二露里も續くこの峡谷を遠く迂回し、再び河邊へ出るが、この道からはウリュク・ノル湖をは

じめ、ハルガ河谷(註六)の斜面や、同河の直流區域等が遠く眺められる。尙、當河の上流地方は、ウルク・ノル湖岸と同様不毛地になつてゐる。

(註一) ボターニン著書 第三卷一七頁

(註二) ウリ・グ・ノル盆地(フルガスタイ川、正確に註二云へばブルグスタ川)に關する、吾々の手許にある標高測定は、たゞ一五、二九三呎の數字のみであり、一方この盆地を繞るバイリム及びツァガン・シボト。兩山脈は平均八、二〇〇—九、〇〇〇呎の高に達する。従つて、右の標高五、二九三呎より見て、グラノー氏は湖の標高を一六、〇〇〇「メートル」(五、二四〇呎)と測定したことは明らかである。

(註三) オルロフの著書一八七頁。尙、參謀本部四〇露里地圖には、この湖の大きさを、ヤム大きく見積り、長さ一六露里、幅一四露里としてある。

(註四) オルロフ著書 一八六頁

(註五) サボーデニコフ著「イルト・イシ及び科布多兩河々源に於ける蒙古阿爾泰」二五二頁

(註六) オルロフ著書 一八五—一八六頁

第十一章 過去及現代に於ける西部蒙古の氣候

第一節 西部蒙古の過去に於ける氣候と氷河及び萬年雪

ヴェイコフ教授は一八八一年に次の如く述べて居る。即ち「西はバタールより東は戈壁の南東部地疊たる大興安嶺及び南西支那の連山に至るまで、北は阿爾泰及び薩彦の兩山系より南はヒマラヤ山脈に至るまでの現今の内部アジア高原の地形は、尠くも鮮新期以降には變化してゐない」ことが、現今、一般に認められて居り、(註一)この時代より以後には、この内陸アジア高原には氷河の發達、乃至は、廣汎な内陸水の發達を助長しうる條件のなかつた(註二)ことが考へられる。而して、このヴェイコフ教授の結論に對立せる資料としては、主に、往時の南シベリア、特にエニセイ及びイルト・イシ兩河の河源地帯に於ける古代の水質覆蔽(凍土帶)の分布に關する若干の資料がある。同資料は阿爾泰及び薩彦山嶽地帯の最初の探検家であるケブレル(註三)、エフ・フルメルセン(註四)、チハチフ(註五)の諸氏並に一部は、シチュロフスキイ(註六)、マレフスキイ(註七)及びグエ・コッタ(註八)諸氏の發表にかゝるものである。而して、これ等の地方に舊氷河が著しく發達してゐた事斷定する者に、たゞ、クロポートキン公爵(註九)及びチユカノフスキイ(註一〇)の兩氏があるが、兩氏の論據はチユルスキイ氏(註一一)に據つて動搖せしめられてゐる。

る。即ち、チルスキイ氏は、南シベリアの山岳中の、現今の位置よりも若干高度の低い所に氷河の痕跡の存在してゐたらしいことに就いては否定してはゐないが、この事實は、たゞその地方々々に起つた部分的氣候條件に因るもので、一般的な氣候條件に因るものではなく、従つて、この氣候條件のみを理由としてシベリア及び蒙古の接壤部に氷河時代があつたを斷定するのは、尙、不十分だを看做してゐる。

然し、晩近の阿爾泰・薩彥高原の調査は、假に、曾て南シベリアや西部蒙古に、西ヨーロッパや北ロシアに主占してゐたやうな大陸氷河の緻密な被覆が存在しなかつたにしても、尠くとも、これらの地方に於ける山地の氷結オシヤトホエは現在よりも幾倍も廣く、現在の恒雪線(註二二)の遙か下方の地域にまでも及んでゐたであらうことを想定せしめるに充分である。

勿論、これ等の調査は、まだ戈壁阿爾泰には行はれてゐないが、吾々はこの方面にも氷河の痕跡を見受け得る十分な確證をもつて居り、現に、余が東部天山(註二三)や南山(註二四)に於て發見した廣汎な氷河作用の痕跡の如きは、正しく、それを實證するもので、同地方には端堆石、不成層堆積物及び巨大な漂石などが、東部天山にありては、六、五〇〇呎(註二五)、六七五呎の標高に發見せられ、又南山にありては、一一、〇〇〇呎(註二五)の標高に發見されてゐる。従つて、若し氷原が戈壁阿爾泰の南北に横はる地方に在つたとすれば、無論、その山腹をも覆ふてゐた事は疑ひ得ないところである。

(註二一) 「礦物學協會叢書」一八八一年發行、所載「現在及び過去に於ける氷河と氣候條件」四六頁

(註二二) 同著書五〇頁。

(註二三) Gebler, "Uebersicht des Katunischen Gebirges, der höchsten Spitze des russischen Altai" in, Mémoires présentés à l'Académie Impériale des sciences de St. Pétersbourg par divers savants" III, 5-6, 1837.

(註二四) Halmersen, v., "Reise nach dem Altai" in "Beiträge zur Kenntnis des Russischen Reiches," XIV, 1848.

(註二五) "Voyage scientifique dans l'Altai oriental."

(註二六) 「阿爾泰の地質調査旅行」一八四六年版

(註二七) 「山岳誌」第十號所載「一八六九年夏季に於ける阿爾泰山系邊境南東境旅行報告」

(註二八) "Der Altai" 1871.

(註二九) 「帝立ロシア地理協會時報」一八七六年、第七輯所載「氷河時代に關する調査」、及び同會シベリア部叢書所載「オキンスキイ哨所への旅」

(註三〇) 「帝立ロシア地理協會シベリア部時報」一八七四年第一一輯、「バイカル湖よりムンク・サルド・イタ山に至る地帯の觀測及び薩彥山脈よりの記録」二九一—三二頁

(註三一) 「帝立ロシア地理協會東部シベリア部時報」所載、一八八一年第二二輯第四一五號「東部シベリアに於ける古代氷河の痕跡に關する問題に就いて」二八—五七頁

(註三二) レズニチンコ氏の好意的に余に寄せた「南阿爾泰とその氷結帯」と題する年記にすれば、阿爾泰山脈に於ける舊氷河作用の痕跡に對する私見として、これは、すべて南阿爾泰に於ける古代氷結帯の明瞭な景觀を呈顯するものであつて、これらの山脈は廣域に亘つて氷河時代を經過したものであることは一點の疑ひもない」と結んでゐる。

(註三三) 筆者著「西支那旅行記」第一卷一六八及び四八〇頁